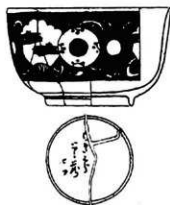


府内城・城下町跡

第12次調査報告書

旧米屋町における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査



2003

大分市教育委員会

府内城・城下町跡

第12次調査報告書

旧米屋町における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査



2003

大分市教育委員会

序 文

本書は、平成11年度に共同住宅建築に伴って記録保存のために実施した府内城・城下町跡第12次調査の発掘調査報告書です。

江戸時代、府内を訪れた儒学者貝原益軒の豊後紀行によると「府内の町は、すこぶる大きな構えで町もまたすこぶる広い。この町にはたくさんの商品が揃っており、ここ府内の地は豊後の府」であると記しています。益軒が「豊後の府」と感じた府内は、今も県都大分市の中心街として繁栄しています。

こうした繁栄の礎は、戦国時代に南蛮貿易都市として栄えた大友府内町の移転を図り、織田信長に始まる石造りの府内城と総構えの新しい都市「府内」の誕生にあります。これまでの15次に及ぶ武家屋敷跡や町屋跡地区での発掘調査において、城下町の変遷過程や構造、度重なる火災でその復興に努めた府内町人の活力あふれる姿の一端がしだいにわかってまいりました。今回発掘調査を実施したところは、城下町の東の御門である塩九升口につくられた米屋町の一角にあたり、ここでも東の玄関口にあたる町屋の状況や調査区南端部で検出できた南外堀に沿う土塁痕跡など、文書や絵図資料を裏付ける重要な成果を得ることができました。なかでも、破損した陶磁器の修理を行った焼継資料がまとまってみつきり、製品に記された人名や屋号、町名、村名などの朱書き文字から城内はもとより周辺の他藩領との関係が明らかとなり、全国的にも貴重な資料となりました。さらに、近世城下町の下層から中世大友府内町に係る遺構・遺物も確認され、中世の町の変遷とその広がり知る重要な手掛りも得ることができました。

本書が、学術研究はもとより、文化財の保護、さらには教育文化の向上に役立つ契機となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書の上梓にいたるまで、ご理解とご協力をいただきました古城増代様ならびに株式会社大東建託様に衷心より感謝申し上げます。

平成15年3月30日

大分市教育委員会

教育長 秦 政 博

例 言・凡 例

- 1 本書は、大分市教育委員会が共同住宅建設に伴って実施した府内城・城下町跡第12次調査の報告書である。
- 2 調査は共同住宅の施主である古城靖代氏からの委託を受け、平成10年7月2日から平成10年9月15日にかけて大分市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査にあたっては、古城靖代氏ならびに株式会社大東建託の全面的な協力を得た。
- 4 本書に使用した遺構実測図は調査担当である高島豊のほか藤沢敏夫、坪根伸也、池邊千太郎、河野史郎、塩地潤一（以上大分市教育委員会文化財室）、高木隆司、大野康弘、奥村義貴、佐藤道文、羽田野達郎、神尾至、横山歩、早田利宏（以上大分市教育委員会文化財室嘱託）が作成した。
- 5 遺構の写真撮影については、高島のほか坪根、河野、塩地、高木、佐藤が行い、遺構空中写真の撮影は九州航空株式会社に委託した。遺物の写真撮影は、高島が行った。
- 6 調査の際には国土座標第Ⅳ座標系の座標値を実測・測定の基準として使用した。
- 7 本書で使用した方位は全て座標北（G.N.）である。
- 8 本書作成に至るまでの整理作業（遺物の注記・復元・実測・トレース・遺構図トレース遺物観察表作成他）は担当職員である高島の他、次に記す大分市臨時職員の多大な協力の下に実施されたものである。
井口あけみ、伊東みほ、今村信子、内田順子、江藤井津子、大島紅、小野千恵美、小山田裕子、河野誠、河野裕子、木村藍子、小田原由実、後藤好美、武田真知子、長木恵里子、林裕子、松嶋泉、結城由利恵
- 9 出土遺物および調査の記録・資料は大分市教育委員会文化財資料室に保管している。
- 10 本書の執筆は第4章付録2を木村幾多郎（大分市歴史資料館館長）が行ったほかは全て高島が行い、編集については井口の補助を受け高島が行った。
- 11 本書に用いた遺構略号は、SK：土坑、SD：溝、SF：建物基礎及び土塁、SP：小穴、SX：不明遺構を表す。
- 12 本書で用いた出土陶磁器の分類及び編年観は主として以下の文献による。
なお、中国産の染付を「青花」と呼称し、国内産の染付を「染付」と呼称する。
青 花 小野正敏 1982『15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代』『貿易陶磁研究』No2
森 毅 1995『16・17世紀における陶磁器の様相とその流通—大坂の資料を中心に—』
『ヒストリア』第149号
備 前 焼 桑岡実 2000『中世備前焼（壺）の編年案』『第2回中世備前焼研究会資料』
桑岡実 2000『中世備前焼掻鉢の編年について』『第3回中世備前焼研究会資料』
肥 前 陶 磁 九州陶磁学会編 2000『九州陶磁の編年』
瓦 大分県教育委員会 1993『府内城三ノ九遺跡』
その他全般 江戸遺跡研究会編 2001『図説江戸考古学研究事典』
また、一部の近世陶磁器の分類、編年観については大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁博物館）、吉田寛氏（大分県教育委員会）よりご教示いただいたものである。
- 13 焼継文字及び墨書の判読については以下の方々のご教示による。
武富雅宣氏（大分市歴史資料館）、鹿毛敏夫氏（大分県立先哲資料館）
萩幸二氏（大分市教育委員会）
- 14 本書には、焼継文字資料をはじめとする写真図版を収録したCD-ROMが付属する。

目 次

第1章 序

1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法と経過	1
3 調査組織	2
4 調査区の位置と環境	4

第2章 調査の成果

1 調査の概要	9
2 遺構と出土遺物	11
①中世の遺構と遺物	11
②近世1期の遺構と遺物	21
③近世2期の遺構と遺物	38
④近世3期の遺構と遺物	72
⑤近代以降の遺構	115

第3章 まとめ

第4章 付篇

付篇1 府内城域下町跡第12次調査で出土した焼瓦文字資料について	123
付篇2 府内町(米屋町)出土脊椎動物遺存体について	130

出土遺物観察表

写真図版

挿図目次

第1図 周辺遺跡位置図	4	第16図 SD201出土遺物実測図6	17
第2図 調査位置図1	5	第17図 SD201出土遺物実測図7	18
第3図 府内藩の領域	6	第18図 SD201出土遺物実測図8	19
第4図 調査区位置図2	7	第19図 SD203出土遺物実測図	20
第5図 調査区位置図3	7	第20図 近世1期遺構配置図	21
第6図 現在の米屋町	8	第21図 調査区西壁整地層土層断面図	22
第7図 調査区西壁土層概念図	9	第22図 土層土層断面図	23
第8図 検出遺構略図	9	第23図 近世初頭整地層出土遺物実測図1	23
第9図 中世遺構配置図	10	第24図 近世初頭整地層出土遺物実測図2	24
第10図 SD201・SD203土層断面図	10	第25図 SK030平面・断面図	25
第11図 SD201出土遺物実測図1	12	第26図 SK030出土遺物実測図1	26
第12図 SD201出土遺物実測図2	13	第27図 SK030出土遺物実測図2	27
第13図 SD201出土遺物実測図3	14	第28図 SK061平面・断面図	27
第14図 SD201出土遺物実測図4	15	第29図 SK061出土遺物実測図	28
第15図 SD201出土遺物実測図5	16	第30図 SK062平面・断面図	28

第31图	SK062出土文物实测图	29	第73图	SK057出土文物实测图 1	61
第32图	SK092平面·断面图	29	第74图	SK057出土文物实测图 2	62
第33图	SK092出土文物实测图 1	30	第75图	SK057出土文物实测图 3	62
第34图	SK092出土文物实测图 2	31	第76图	SK105平面·断面图	63
第35图	SK092出土文物实测图 3	32	第77图	SK056平面·断面图	63
第36图	SK093·SP097出土文物实测图	33	第78图	SK105出土文物实测图 1	64
第37图	SK104·SP097平面·断面图	33	第79图	SK105出土文物实测图 2	65
第38图	SK106·SK108·SK110 平面·断面图	34	第80图	SK056出土文物实测图 1	66
第39图	SK106·SK108·SK110出土文物实测图	35	第81图	SK056出土文物实测图 2	66
第40图	SX038平面·断面图	36	第82图	SK013平面·断面图	66
第41图	SX038出土文物实测图 1	37	第83图	SK014平面·断面图	66
第42图	SX038出土文物实测图 2	37	第84图	SK013·SK014出土文物实测图	67
第43图	近世2期遗构配置图	38	第85图	SK043平面·断面图	67
第44图	SE064平面·土唇断面图	38	第86图	SK048平面·断面图	67
第45图	SE064出土文物实测图	39	第87图	SK072平面·断面图	68
第46图	SE089平面·土唇断面图	40	第88图	SK080平面·断面图	68
第47图	SE090·SE101平面·土唇断面图	40	第89图	SK100平面·断面图	68
第48图	SE089出土文物实测图	41	第90图	SK043·SK048·SK100出土文物实测图	69
第49图	SE090·SE101出土文物实测图	41	第91图	SK072出土文物实测图	69
第50图	SK018平面·断面图	42	第92图	SK080出土文物实测图	69
第51图	SK018出土文物实测图 1	43	第93图	SX031平面·断面图	70
第52图	SK018出土文物实测图 2	44	第94图	SX031出土文物实测图 1	70
第53图	SK018出土文物实测图 3	45	第95图	SX031出土文物实测图 2	71
第54图	SK018出土文物实测图 4	46	第96图	SX083平面·断面图	71
第55图	SK018出土文物实测图 5	47	第97图	SX083出土文物实测图	71
第56图	SK022平面·断面图	48	第98图	近世3期遗构配置图	72
第57图	SK022出土文物实测图 1	49	第99图	SF073平面图	73
第58图	SK022出土文物实测图 2	50	第100图	SK004平面·断面图	73
第59图	SK022出土文物实测图 3	51	第101图	SF073整地层出土文物实测图	73
第60图	SK023平面·断面·土唇断面图	52	第102图	SK004出土文物实测图 1	74
第61图	SK023出土文物实测图 1	52	第103图	SK004出土文物实测图 2	75
第62图	SK023出土文物实测图 2	53	第104图	SK004出土文物实测图 3	76
第63图	SK044平面·断面图	54	第105图	SK007平面·断面图	76
第64图	SK044出土文物实测图 1	54	第106图	SK007出土文物实测图 1	77
第65图	SK044出土文物实测图 2	55	第107图	SK007出土文物实测图 2	78
第66图	SK044出土文物实测图 3	56	第108图	SK007出土文物实测图 3	79
第67图	SK044出土文物实测图 4	57	第109图	SK007出土文物实测图 4	80
第68图	SK044出土文物实测图 5	58	第110图	SK007出土文物实测图 5	81
第69图	SK052平面·断面图	59	第111图	SK007出土文物实测图 6	82
第70图	SK052出土文物实测图 1	59	第112图	SK015平面·断面图	82
第71图	SK052出土文物实测图 2	60	第113图	SK015出土文物实测图	83
第72图	SK057平面·断面图	60	第114图	SK017·SK029平面·断面图	84

第115図	SK017・SK029土層断面図	84
第116図	SK017出土遺物実測図1	85
第117図	SK017出土遺物実測図2	86
第118図	SK017出土遺物実測図3	87
第119図	SK017出土遺物実測図4	88
第120図	SK017出土遺物実測図5	89
第121図	SK017出土遺物実測図6	90
第122図	SK017出土遺物実測図7	91
第123図	SK017出土遺物実測図8	92
第124図	SK017出土遺物実測図9	93
第125図	SK017出土遺物実測図10	94
第126図	SK017出土の焼継文字を 有する陶磁器実測図1	96
第127図	SK017出土の焼継文字を 有する陶磁器実測図2	97
第128図	SK017出土の焼継文字を 有する陶磁器実測図3	98
第129図	SK017出土の焼継文字を 有する陶磁器実測図4	99
第130図	SK017出土の焼継文字を 有する陶磁器実測図5	100
第131図	SK017出土の焼継文字を 有する陶磁器実測図6	101
第132図	SK017出土の焼継文字を 有する陶磁器実測図7	102
第133図	SK017出土の焼継文字を 有する陶磁器実測図8	103

第134図	SK017出土の焼継文字を 有する陶磁器実測図9	104
第135図	その他の遺構から出土した焼継文字を 有する陶磁器実測図	106
第136図	SK029出土遺物実測図	108
第137図	SK033平面・断面図	108
第138図	SK033出土遺物実測図	109
第139図	SK042平面・断面図	109
第140図	SK042出土遺物実測図1	110
第141図	SK042出土遺物実測図2	110
第142図	SK042出土遺物実測図3	111
第143図	SK070・SK077平面・土層断面図	112
第144図	SK070出土遺物実測図1	112
第145図	SK070出土遺物実測図2	113
第146図	SK077出土遺物実測図	114
第147図	表土・表持遺物 実測図	114
第148図	近代以降の遺構・攪乱配置図	115
第149図	SK118出土遺物実測図	116
第150図	近世2期 各遺構出土陶磁器産地別組成	119
第151図	焼継文字にみられる地名の 比定地1：府内域内および隣接地	125
第152図	焼継文字にみられる地名の 比定地2：府内域外	125
第153図	SD201出土動物骨1（イノシシ）	131
第154図	SD201出土動物骨2（シカ）	131
第155図	SD201出土動物骨3（ウシ）	132
第156図	SD201出土動物骨4（ウマ）	132

表目次

第1表	府内域内における近世の火災記録	120
第2表	焼継ぎを有する陶磁器の占有率	123
第3表	府内域・域下町跡第12次調査出土 焼継文字判読・地名比定表	124
第4表	大分市域における焼継文字資料一覧	127
第5表	SD201出土獣骨同定表	130
第6表	中世遺構出土遺物観察表1	133
第7表	中世遺構出土遺物観察表2	134
第8表	中世遺構出土遺物観察表3	135
第9表	中世遺構出土遺物観察表4	136
第10表	近世遺構出土遺物観察表1	136
第11表	近世遺構出土遺物観察表2	137
第12表	近世遺構出土遺物観察表3	138
第13表	近世遺構出土遺物観察表4	139

第14表	近世遺構出土遺物観察表5	140
第15表	近世遺構出土遺物観察表6	141
第16表	近世遺構出土遺物観察表7	142
第17表	近世遺構出土遺物観察表8	143
第18表	近世遺構出土遺物観察表9	144
第19表	近世遺構出土遺物観察表10	145
第20表	近世遺構出土遺物観察表11	146
第21表	SK017から出土した 焼継文字を有する陶磁器観察表1	146
第22表	SK017から出土した 焼継文字を有する陶磁器観察表2	147
第23表	SK017以外の遺構から出土した 焼継文字を有する陶磁器観察表	148

写真図版目次

写真図版1

- 1 調査区遠景空中写真（南東から）
- 2 調査区全景空中写真（上が西）
- 3 近世遺構完掘状況（南から）
- 4 SD201完掘状況（南端部除く：南から）
- 5 SD201・203完掘状況（南から）
- 6 SD201近景（北から）
- 7 土塁土層（東から）

写真図版2

- 8 SX038石組み（南から）
- 9 SK061遺物出土状況（北から）
- 10 SK092遺物出土状況（南から）
- 11 SK018完掘状況（北から）
- 12 SK022礫出土状況（東から）
- 13 SK044土層断面（東から）
- 14 SE064井筒痕跡検出状況（東から）
- 15 SK105完掘状況（東から）

写真図版3

- 16 SX083石組み・礎検出状況（東から）
- 17 SF073石組み検出状況（東から）
- 18 SK017完掘状況（北から）
- 19 SK017陶磁器廃棄状況（北から）
- 20 SK017陶磁器廃棄状況近景
- 21 SK017下底遺物出土状況

写真図版4

- 22 SD201出土墨書土器1 「光盛」
- 23 SD201出土墨書土器2 「さい良」
- 24 SD201出土墨書土器3 「さかい寺」
- 25 SD201出土墨書土器4 「右」
- 26 SD201出土推定中国産焼締陶器攪鉢

写真図版5

- 27 SK017出土禁裏御用品肥前磁器皿
- 28 SK017出土禁裏御用品肥前磁器皿裏面

写真図版6

- 29 SK017出土肥前磁器花形鉢
- 30 SK017出土伝世され焼き雑ざされた
肥前磁器皿
- 31 SK017出土中国宜興窯産急須・徳化窯産碗
- 32 SK017出土萩焼製品
- 33 SK017出土福岡産陶器鉢・碗
- 34 SK017出土三田青磁鉢
- 35 SK017・SK042出土大谷焼

写真図版7

- 36 整地層出土志野向付1
- 37 整地層出土志野向付2
- 38 SX038出土肥前陶器片口
- 39 SX038出土ベトナム産長胴瓶
- 40 SK092出土ガラス製品

写真図版8

- 41 SK056出土柿右衛門人形（若衆人形）
- 42 SK044出土クレイパイプとヒールマーク
- 43 SK057・SK052出土色絵磁器人形
- 44 SK044出土白磁皿
- 45 SK044出土京焼（京・信楽系陶器）
- 46 SK105出土京焼（京・信楽系陶器）
- 47 SK105出土瀬戸・美濃産陶器碗
- 48 近世遺構出土中国産磁器皿

第1章 序

1 調査に至る経緯

平成9年(1997年)10月17日大分市大手町1丁目2番29号における共同住宅建設が計画され、これに伴い、建物の設計者である株式会社大東建託より、埋蔵文化財の所在状況について照会が行われた。この事業計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である府内城・城下町跡の範囲内にあたることから、大分市教育委員会では、まず遺構の遺存状態を確認することとし、確認調査を平成10年1月12日に実施した。その結果、府内城外曲輪の土塁基底部および土坑等の近世遺構多数を検出した。さらに、整地層よりも下層で戦国時代の遺構が検出されたことから、中世大友府内町跡の関連遺構も存在することが確認された。

このため、事業主体者の古城氏および株式会社大東建託と協議を行った結果、工法上、遺構の保存が困難な建物建設部分についてのみ発掘調査を行って遺構の記録保存を図ることとした。

本調査にあたっては、平成11年6月30日に大分市教育委員会と古城靖代氏との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約が締結され、平成11年7月2日から調査に着手することとなった。

2 調査の方法と経過

典型的な都市遺跡である近世城下町の遺構については、きわめて高い遺構密度、複雑かつ厚い整地地層をはじめ遺構それ自体も大規模なものが多く、その土地には大きな土木量が投入されており、これらを逆に掘り返す形になる発掘調査の際には、作業の困難さが大きくなることが避けられない。府内城・城下町跡についても例外ではなく、今回の調査までの11次にわたる各調査において、調査費用や調査期間の制約により遺構全てを完掘できない例も発生していた。

また、府内城・城下町跡は中世大友氏により築かれた中世大友府内町跡の比定地とはわずかに重複するのみであるが、府内町跡と同時代の遺構やそれ以前に遡る遺構は府内城・城下町跡の多くの調査地点でも検出されている。これらの遺構は府内城築城時の整地層より下層に存在するため、当然、上層の近世遺構を調査により除去しないと調査がおよばないことになる。今回の調査地点は府内城・城下町跡と中世府内町跡とが重複する部分であり、さらに中世の遺構が試掘により確認されていた。

今回は、調査期間を中心として、多くの制約がある調査ではあったが、以上のことを考慮した結果次の諸点を最低限押さえるべく発掘調査を実施することとした。

- 1 近世遺構と中世の遺構について、鍵層である近世初頭の整地層を把握した上で、層位的に発掘すること。できればその他の近世の整地層についてもできるだけ把握すること。
- 2 すべての近世遺構を可能な限り完掘し、必ず中世遺構まで完掘すること。
- 3 府内城外曲輪土塁を面的に確認すること

発掘調査は平成11年7月2日に表土剥ぎを開始し、平成11年9月15日に埋め戻しを行って終了した。近世の遺構の発掘調査は、近世初頭の整地層よりもやや上面まで重機により掘削した上で遺構検出を行った。整地層については、詳細に見ると複数の整地面が認識できるが、調査日程を短縮する必要に迫られたことと土層認識の困難さのため、より上位の整地層上で検出できた遺構はごく少数にとどまり、多くは近世初頭の整地層上面まで掘り下げて検出したものである。また、調査期限が迫ってくると調査を急ぐため、発掘作業自体が粗いものとなり、遺構の見落としが生じたり、図面の省略も行わざるを得なくなるなど、結果として多くの情報を欠落させる結果となったことは否めない。しかし、ともかく中世遺構まで完掘して調査を終了させることができた。

調査は実働54日間、調査面積は298㎡であったが、実際はこれに倍する面積を調査したことになる。

調査日誌抄

- 7月2日(金) 重機による表土剥ぎ1日目。調査区南端において、舗装と旧表土を除去すると、早くも直下で府内域外曲輪の土塁積み土が確認された。
- 7月8日(木) 規準点測量。メッシュ設定。
- 7月12日(月) 遺構検出作業開始。視乱の掘り下げ開始。
- 7月22日(木) 遺構掘り下げ開始。
- 8月2日(月) 本日より文化財室囑託の応援を得る。
- 8月3日(火) 雨のため休み。廃土上げ作業を若干行う。以後、雨の日を除いて休み無しで行うことにする。
- 8月9日(月) SK017に陶磁器が大量廃棄されていることが判明。
- 8月13日(金) SX038掘り下げ。石組み遺構は17世紀前半の遺構と推定される。
- 8月17日(火) 調査員疲労のため休日とする。
- 8月18日(水) 北端部の遺構検出。近代以降の建物基礎を除去する。
- 8月19日(木) 調査期限について、9月中旬まで2週間程度の延期を要請する。
- 8月21日(土) 調査区北端部、重機により表土剥ぎ、廃土移動。建物基礎SF073を検出。
- 8月30日(月) SK092で17世紀前半の一括資料出土。
- 9月5日(日) 本々までに近世の遺構を完掘し、明日の空撮に備えて現場の清掃を行うも、夕方現

場終了直前に豪雨。

- 9月8日(木) 早朝より、現場の清掃を行い、空撮を行う。撮影後、城下町築造時の整地層を人力により除去し始める。
- 9月9日(木) 戦国時代の溝SD201を検出。掘り下げにかかる。
- 9月12日(日) SD201完掘し、現場清掃を行い南側マンションより完掘状況の写真撮影。
- 9月13日(月) 重機により土塁部分の積み土・整地層を掘削する。あわせて調査区大部分の埋め戻しを行う。SD201の続き部分を検出したほか、新たに平行する溝SD203も検出し、掘り下げを行う。文化財室職員・囑託多くの応援を得て作業する。
- 9月14日(火) 文化財室職員・囑託多くの応援を得るも台風接近のため本日の作業完了が危ぶまれる。午前中で一応完掘し、午後清掃・完掘写真撮影を行う。完掘写真撮影中14:00頃より雨が次第に強くなったが、撮影完了する。現場事務所等の撤去作業も併行して行う。撮影後、激しい雨の中、土塁土層図と溝平面図を分担して作成する。日没後によりやく終了し、調査は完了した。
- 9月15日(水) 台風一過、朝から嘘のように晴れる。重機により調査区南端の埋め戻しを行う。

3 調査組織

平成9年度（試掘調査）

調査主体 大分市教育委員会

教育長 清瀬和弘

事務局 大分市教育委員会 文化振興課

課長 野尻政文

参事 秦政博

主幹 玉水光洋

文化財室 室長 植木正巳

次長 讃岐和夫

主査 佐藤宏明

指導主事 藤沢敏夫

指導主事 後藤典幸

主任 安部貴美代

主任技師 塔鼻光司（試掘調査担当）

主任技師 坪根伸也

主任技師 池邊千太郎

技師 塩地潤一

技術員 河野史郎

技術員 高島豊

囑託 杉崎重臣

囑託 大野康弘（試掘調査担当）

囑託 奥村義貴（試掘調査担当）

囑託 羽田野達郎（試掘調査担当）

文化財調査員（臨時）中西武尚

文化財調査員（臨時）幸しのぶ

文化財調査員（臨時）田淵芳剛

文化財調査員（臨時）小野貴史

文化財調査員（臨時）林潤也

文化財調査員（臨時）大藤弥生

文化財調査員（臨時）永松正大

平成11年度（本調査）

調査主体 大分市教育委員会

教 育 長 清 瀬 和 弘

事 務 局 大分市教育委員会 生涯学習課

課 長 安 部 信 孝

参 事 泰 政 博

主 幹 玉 永 光 洋

文化財室 室長 植 木 正 巳

次 長 讃 岐 和 夫

主 査 福 田 誠 一

指導主事 藤 沢 敏 夫

指導主事 後 藤 典 幸

指導主事 甲 斐 猛

主 任 安 部 貴美代

主任技師 塔 鼻 光 司

主任技師 坪 根 伸 也

主任技師 池 邊 千太郎

技 師 河 野 史 郎

技 師 塩 地 潤 一

技 師 高 畠 豊（調査担当）

嘱託 杉 崎 重 臣

嘱託 高 木 隆 司

嘱託 奥 村 義 貴

嘱託 神 尾 至

嘱託 佐 藤 道 文

嘱託 萩 幸 二

嘱託 小 野 貴 史

嘱託 羽田野 達 郎

嘱託 大 野 康 弘

嘱託 橋 原 嘉 明

嘱託 横 山 歩

嘱託 早 田 利 宏

嘱託 宮 川 泰 男

嘱託 永 松 正 大

発掘調査作業員

古城 英治 堤 鈴子

麻生 妙子 田中富美子

薬師寺由記子 柳井 紀子

若林 文子 石井 一徳

松尾さよ子 日野 秀俊

玉井多紀子 西村 智明

井野和歌子 岩下磨須美

利光 克寛 栗崎顕太郎

林 房枝 古川 智紀

渡辺 悦子 溝口 正人

吉良 直子 松田 正人

二宮 要 河合 崇行

清末サキエ

平成14年度（調査報告書刊行）

調査主体 大分市教育委員会

教 育 長 御 薮 義 則（～平成14年6月27日）

泰 政 博（平成14年6月28日～）

事 務 局 大分市教育委員会 文化財課

課 長 帯 刀 修 一

主 幹 玉 永 光 洋

管 理 係 課長補佐兼管理係長 熊谷一秋

指導主事 姫 野 公 徳

主 任 幸 裕 美

主 任 桑 原 治

主 事 三 浦 亜 紀

文化財係 課長補佐兼文化財係長 讃岐和夫

指導主事 後 藤 典 幸

専 門 員 塔 鼻 光 司

主任技師 坪 根 伸 也

主任技師 池 邊 千太郎

主任技師 塩 地 潤 一

技 師 高 畠 豊（報告書担当）

技 師 中 西 武 尚

主 事 永 松 正 大

事 務 員 佐 藤 道 文

嘱託 井 口 あけみ

嘱託 奥 村 義 貴

嘱託 萩 幸 二

嘱託 佐 藤 孝 則

嘱託 羽田野 達 郎

嘱託 宮 田 剛

嘱託 羽田野 裕 之

嘱託 上 野 淳 也

嘱託 小 住 武 史

嘱託 松 尾 聡

嘱託 松 竹 智 之

嘱託 荻 谷 史 徳

嘱託 水 町 裕 子

嘱託 梅 田 昭 宏

嘱託 勝間田 あ や

嘱託 岩 尾 美保子

嘱託 梅 木 信 宏

4 調査区の位置と環境

久住高原に源を発する大分川は中流域で盆地状の平野を形成しながら流下し、河口部にデルタ平野を形成して瀬戸内海に注いでいる。近代以前、河口部は多くの流路に分流していたと考えられるが、これに伴って多くの微高地が形成された。今回調査が行われた地点は大分川左岸の微高地群の一つに立地する。

周辺地域には弥生時代以降の遺跡が分布するが、豊後国衙の比定地があることに見られるように、古代以後、豊後の政治的中心地となったことを反映して多くの遺跡が知られている。

古代の遺跡としては、大分川河口部の平野を北に望む位置にある上野台地上の遺跡群が注目される。台地東端部の竜王畑地区では平成9年度に行われた発掘調査により9世紀代を中心とし、10世紀前半に至るまでの掘立柱建物跡や築地塀跡などが多数検出されており国司館等、豊後国衙関連の施設であると推定されている。（上野竜王畑遺跡）また、台地の西端部付近では8世紀～9世紀に築造された版築基壇と礎石建物跡を伴う古代寺院跡が検出されている。（上野廃寺跡）出土した多量の瓦の中には百済系の単弁軒丸瓦等をはじめ豊後国分寺創建瓦も含まれており国衙との密接な関係を窺わせる。

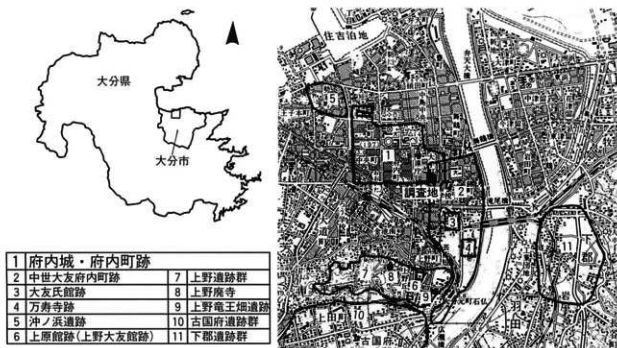
従来、豊後国衙推定地としては、上野台地よりも南側に所在する古国府地区が推定されていた。しかし、これまでの発掘調査によって、7世紀後半から8世紀初頭の掘立柱建物群が検出されているものの、国衙関連施設と推定できる遺構は検出されていない。現在判明している調査成果からは遅くとも9世紀には上野台地上に国衙が置かれた可能性が高くなってきたといえるが、それ以前に関しては未だ不明と言わざるを得ない。

古代末期の上野台地一帯は「高国府」と称されており、この時期に至るまで国衙の中核施設が存在し続けたことをうかがわせる。また、この時期の文献には大分川と推定される川が「市河」として記述されている。このことから河原において市が開かれていたことが推定され、これが後の中世「府内」の濫觴となったとする説も提出されている。

中世大友府内町跡

中世の当該地域は、鎌倉時代中期に豊後守護大友氏が入部して以来、その本拠である守護所がおかれ、戦国時代にかけては中世都市「府内」として発展したことが特筆される。

中世「府内」については戦国時代末期の様子を描いたと推定される絵図「府内古図」の存在が知られている。



第1図 周辺遺跡位置図 (1/50000)



第2図 調査区位置図1 (1/7000『大分市史』中巻付図Ⅱから作成)

それによれば当時の町は南北に4本の大路とこれに交差する7本の東西道とにより、碁盤目状に区切られ、中心には広大な大友氏館や万寿寺、御蔵場が描かれている。さらに、道路に沿って、44もの町名が記入されており、道路を挟む両側町も存在したことを示唆している。また、道路の交差点には木戸を示すと見られる表現も見られる。

これらの絵図はすべて近世以降の写しであるが、基本的に1種類の原図から派生したものと解釈でき、建物の表現や地名等の記述内容の異同によりA・B・Cの3類型に大別されている。「府内古図」の現地比定については、1987年の大分市史編纂の際に試みられ、「戦国時代の府内復原想定図」が作成されている。この結果絵図に描写された府内町は南北2.2km東西0.8kmにわたって広がっていることが推定されたのである。その後、1996年に始まった中世大友府内町跡の発掘調査、さらに1998年に始まった大友氏館跡の発掘調査により、この復原想定図により比定された府内古図の記述が考古学的にもかなり信憑性が高いことが次第に確かめられつつある。

これまでの発掘調査により、中世府内町については、遺構の初現が14世紀に遡る万寿寺関連遺構を除けば、概ね15世紀前半以降に遺構が造られ始めており、16世紀初めに規準となる軸線が変更される画期を経て、16世紀中葉から末にかけて最盛期を迎えることがわかってきている。そして、16世紀末に焼土層や火災処理土坑を伴う遺構群をもってほぼ終息している。おそらく1586年～1587年の島津侵攻に伴う大規模な破壊と火災のあと、限られた部分のみしか再建されなかったものと思われる。

府内城・城下町跡

文禄二年(1593)、大友吉統が朝鮮出兵での失態を理由として降国され、豊後国は豊臣秀吉の直轄地(蔵入地)となり、翌年、府内には早川長敏が蔵入地預かり分を含む計六万石で入封した。この時、長敏は旧大友氏館を修築して使用したといわれる。

慶長二年(1597)、早川長敏に替わって豊後臼杵から福原直高が大分郡及び速見郡計十二万石で入封した。直高は中世府内町の北方、別府湾に面する「荷落」と称されていた地を選地し、築城に着手した。慶長四年(1599)には二ノ曲輪三重櫓や三ノ曲輪家臣屋敷が完成し、地名を「荷揚」と改め、新城を「荷揚城」と称した。しかし同年、直高は改易され、早川長敏が再入封する。

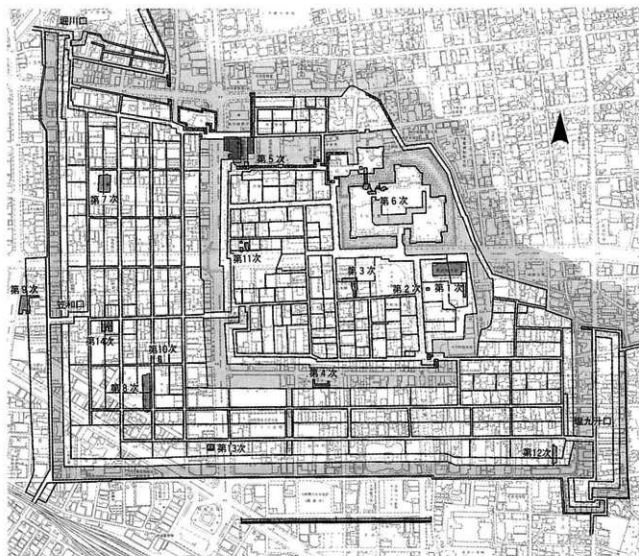
慶長五年(1600)、関ヶ原合戦の後、豊後高田から竹中重利が三万五千石で入封した。竹中氏は築城事業を再開し、慶長七年(1602)には四重天守等の城郭中心部が完成した。慶長十年(1605)には城下町がほぼ完成、城下町を囲繞する濠を築き、城名を「府内城」、城下町を「府内」と改めた。さらに、慶長十二年(1607)、城下の東に塩九升口、西に笠和口、北に堀川口を設け、翌年には船入「京泊」が造られ、城下町は完成した。

寛永十一年(1634)、竹中氏二代重義が改易され、替わって下野国壬生から日根野吉明が二万石で入封した。日根野氏は府内城・城下町の再整備を行ったほか、初瀬井路をはじめ、用水路の開削・整備を精力的に行い、新田開発を進めるなど積極的な領国経営を行う。ところが明暦二年(1656)、日根野氏は1代で断絶したため、一旦幕府の管理下に置かれた後、万治元年(1658)、松平忠昭が二万二千石で入封して大給松平氏の府内藩が成立し、十二代を経て明治を迎えるに至った。

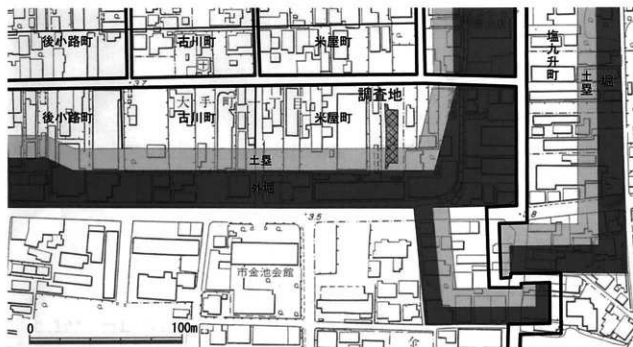
府内藩は松平氏時代以降には2万2千石に過ぎなかったが、城下町は小藩らしからぬ規模であり、繁栄した。これは当初大分郡・速見郡12万石の城として築城され始めたらしいこと、中世府内町の移転により大友氏時代から続く豊後の経済的中枢機能を引き継いだことに起因す



第3図 府内藩の領域



第4図 調査位置図2 (1/8000、『大分市史』中巻付図Ⅳ「府内城下の復原図」から作成)



第5図 調査位置図3 (1/2500、『大分市史』中巻付図Ⅳ「府内城下の復原図」から作成)

ると考えられる。17世紀末に府内城下を訪れた貝原益軒は、「町すこぶるひろし、万の売り物備われり」などと記しており、その繁栄が窺われる。しかし、18世紀になると、寛保の大火（1743年）をはじめ宝永の大地震、安永の大地震等大火や震災による被害が相次いだ。特に寛保の大火では、天守閣以下ほとんどすべての城郭施設と城下町のほぼ全域を焼き尽くす大惨事となった。こうした相次ぐ災害からの復興は小藩にとってきわめて重い負担となった。また、周辺諸藩が専売制を敷き、自藩領の振興をはかる経済政策をとったことや、府内周辺に所在する諸藩領の在町が小都市として発展したことも加わり、次第に経済的な中核機能も失われていく。こうして18世紀後半からは、城下町は次第に衰退し人口も減少していった。石高の大きい諸藩の城下町が、経済的中核機能を維持・発展させ、18世紀以降農村からの人口流入に伴って城下町が次第に拡大していったことは対照的な現象が府内城下には見られたのである。府内城下町では17世紀に西新町と東新町が城外に設けられた以外に新町が設けられることはなかった。こうして明治を迎えたとき、府内町の範囲は基本的に17世紀末と変わらないものであった。大正3年陸軍陸地測量部作成の地図においても大分市の市街地は依然として府内城下町の範囲を大きく出していないことが読みとれる。市街地の飛躍的な拡大は、太平洋戦争後の再建、さらには高度成長期に実施された大規模な市町村合併による新大分市の成立と新産業都市としての発展まで待つことになるのである。

調査地点について

「戦国時代の府内復興想定図」によれば、中世府内町北端の穴打町、長池町、及び舟入付近に比定され、町屋のはずれに近い位置にあったものと思われる。

一方、近世においては府内城下町の南東端近くに所在した米屋町にあたる。府内城下には北西隅に勢家口、西側に笠和口、南東には塩九升口とそれぞれ呼称される3カ所の入り口があったが、米屋町は、このうちの塩九升口に隣接する。塩九升口の東には大規模な馬出状の曲輪である塩九升町があり、府内城東南方向へ続く街道「日向道」は塩九升町内で3度折れ曲がって向きを変え、外堀を渡って塩九升口から城内に入るように造られていた。米屋町は、この塩九升口から城内に入って最初にある町で、城下町西南端の光西寺につながる東西道の両側に展開する両側町であった。この町の東と南は外堀輪土塁を挟んで外堀に面している。本調査地点は、米屋町のはずれ東端に所在する短冊形地割にあたる。

府内城下町は太平洋戦争末期の空襲による被災や近年の都市再開発により城下町の面影を偲ばせる景観がほとんど失われ、城下町内で使用されていた47の町名も昭和38年に施行された新地番表示により公式には使用されなくなった。しかし城下町の東南部分にある旧米屋町とその周辺は、白壁の商家や蔵、瓦葺きの伝統的な町屋が少数ながら点在し、城下町らしいたたずまいが辛うじて今も残っている地域である。



第6図 現在の米屋町

参考文献

- 大分市史編纂委員会 1987『大分市史』上巻、中巻
- 大分市教育委員会・中世都市研究会 2001『南蛮都市・豊後府内 都市と交易』
- 木村幾多郎 2001『豊後府内町移転と旧府内町』『大分・大友土器研究会論集』
- 大野康弘 2001『府内城・城下町の曲輪間段差とその意義について』『大分・大友土器研究会論集』

第2章 調査の成果

1 調査の概要

今回の発掘調査により出土した遺構面は府内城築城に伴う近世初頭の整地層を挟み、中世及び近世遺構面の2面に大別される。(第7図)中世の遺構面では、戦国時代の溝等が検出され、上位の遺構面では、近世の町屋に伴う遺構群及び府内城の外郭を形成していた土塁の基底部が検出された。なお、近世の遺構面は、一部の建物遺構に伴う部分的な整地により、さらに上位の遺構面が存在したことも確認されているが、平面的な広がりを把握するに至らなかったため、本報告では異なる遺構面として記述してはしない。

近世の遺構については、出土遺物により以下の3時期に分けて報告する

近世1期：16世紀末～17世紀末（1590年代～1690年代）

肥前陶磁編年¹⁾Ⅰ～Ⅲ期

近世2期：17世紀末～18世紀末（1690年代～1770年代）

肥前陶磁編年Ⅳ期

染付広東碗出現以前

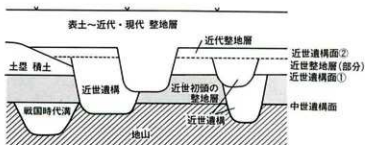
近世3期：18世紀末～19世紀中葉（1780年代～1860年代）

肥前陶磁編年Ⅴ期

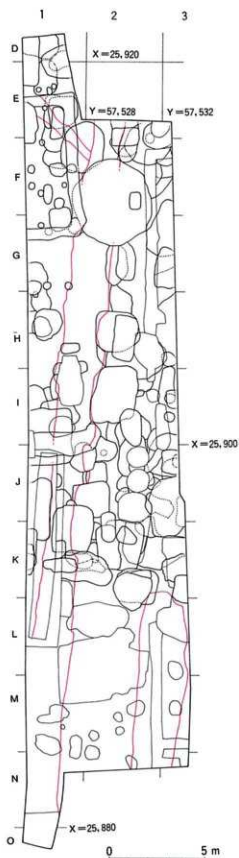
明治印判染付出現以前

明治以降の遺構については、調査時に攪乱として扱って調査対象としなかったものが多く、個別遺構面の図示は行わなかった。

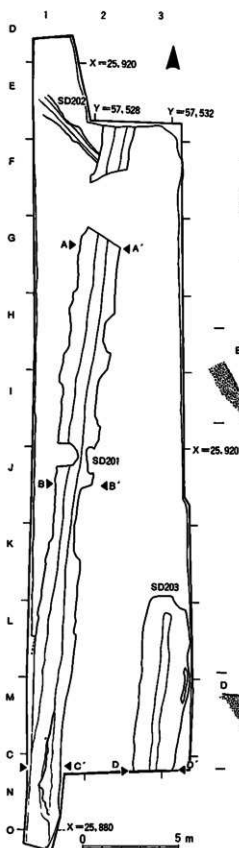
調査の結果検出された遺構は、中世遺構面では溝（SD）3条、近世遺構面では土塁基底部（SF）1、建物基礎（SF）1、井戸跡（SE）4、土坑（SK）90、性格不明遺構（SX）3、ピット（SP）10である。



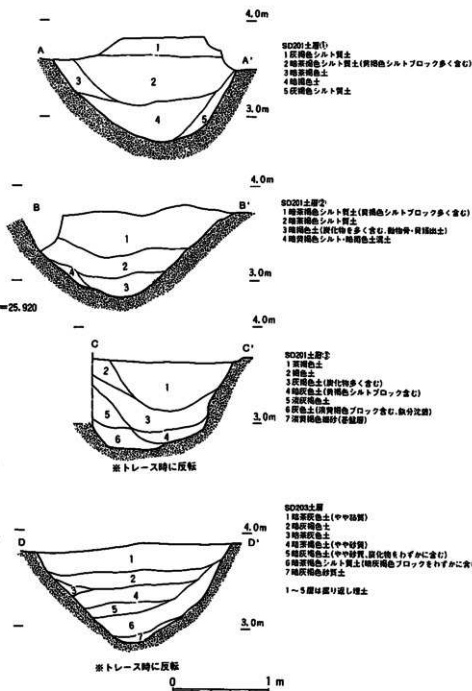
第7図 調査区西壁土層概念図



第8図 検出遺構略図 (1/200)



第9図 中世遺構配置図 (1/200)



第10図 SD201・SD203土層断面図 (1/40)

2 遺構と出土遺物

① 中世の遺構と遺物

1597年に始まる府内城築城に伴う整地層よりも下層で検出された遺構であり、溝3条が検出されている。

SD201・SD203（第9図、土層：第10図）

SD201は、最大幅幅約2.4m、最大深約1.1m、の溝で調査区をほぼ縦貫してN-6°-E方向に延びている。末端および屈曲部は検出できていない。土層観察によれば2回ないし3回の掘り返しを認めることができる。溝埋土のうち最上位の土層は、府内城築城時の整地層と類似するものであるため、16世紀末の府内城築城開始時までは完全に埋まりきっておらず、浅い窪地状を呈していたことが考えられ、府内城築城時の整地により、完全に埋め立てられたものと考えられる。

なお、L-1区内の灰褐色土層（第10図SD201土層③の3層に相当）上部で、イノシシ、シカ、ウシ、ウマの獣骨及びサザエを主体とする貝殻がまとまって出土した。獣骨の詳細については、第4章付篇2で分析されている。

SD203はSD201の東側に並行する溝で、最大幅約2.5m、最大深約1.1m、同じくN-6°-E方向を指向する。この溝は調査区南端からおよそ9mのところで収束していることが確認された。土層観察では少なくとも1回の掘り返しが認められるがSD203は府内城築城時までに完全に埋積していたものとみられる。

二条の溝は、同一方向に平行して延びており、その間の空地が道路状遺構である可能性も考えられたが、溝と溝の間に版築等の地業は認められなかった。このため、これらの溝を側溝とするような道路の可能性もなお捨て切れはしないものの、現状では何らかの区画溝としてとらえておくに止めたい。

SD202（第9図）

調査区北西端付近で検出された溝である。幅40cm～80cm、最大深約30cmと小規模なものであり、SD201に切られている。SD201に先行する遺構であるが、土器の碎片が出土したのみであるため時期及び性格は不明である。

SD201出土遺物（第11図）

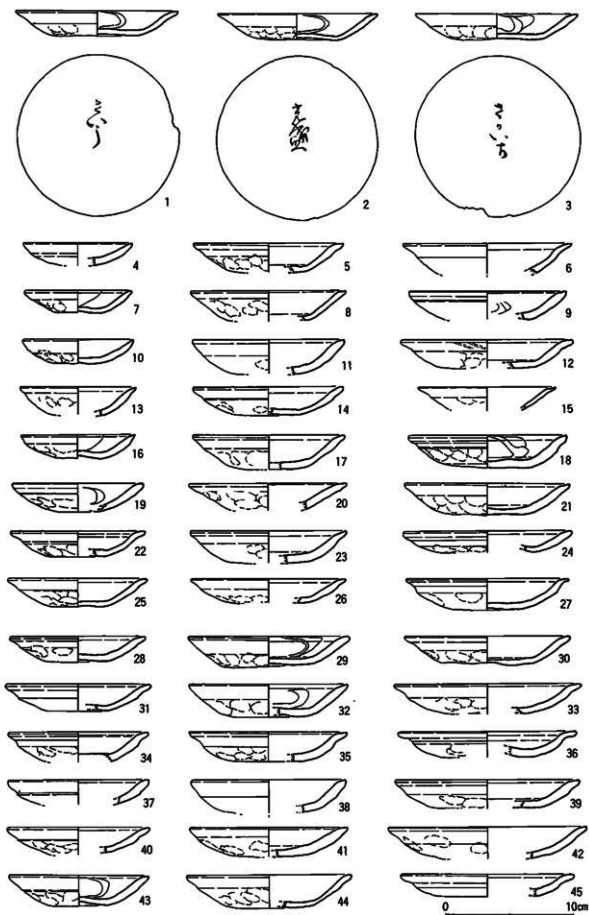
1～74はロクロを使用しないで成形されたいわゆる京都系土師器である。これらは概ね明灰褐色～明灰黄褐色を呈し、微細な金雲母や石英粒を僅かに含むものの、粒子の少ない精良な胎土を使用している。また、小皿以外の皿には、右回りのナデの最後にナデの方向を反転させる、いわゆる「2」の字ナデが施されているものが認められる。

1～3は底部に墨書が確認された皿でいずれも口縁部には「2」の字ナデが施される。1は「さい良」と墨書されており、「良」は男性の人名に使用される「郎」を示す字であることから、人名の可能性はある。2は「光盛」、3は「さかい寺」と判読できる。これらは京都系土師器小皿7及び16とともにL-1区の下層（第10図SD201土層③4層に相当する土層）から一括出土したが、残念ながら出土状況の写真、図面等を残すことができなかった。15は出土した京都系土師器中で最も薄いものであるが胎土は他の京都系土師器よりもやや精良かと思える程度で大差ない。65・72は底部に板状の王痕が認められる。68は復元口径5.3cmで最も小型の小皿であり、底部は「へそ皿」状に凹められている。

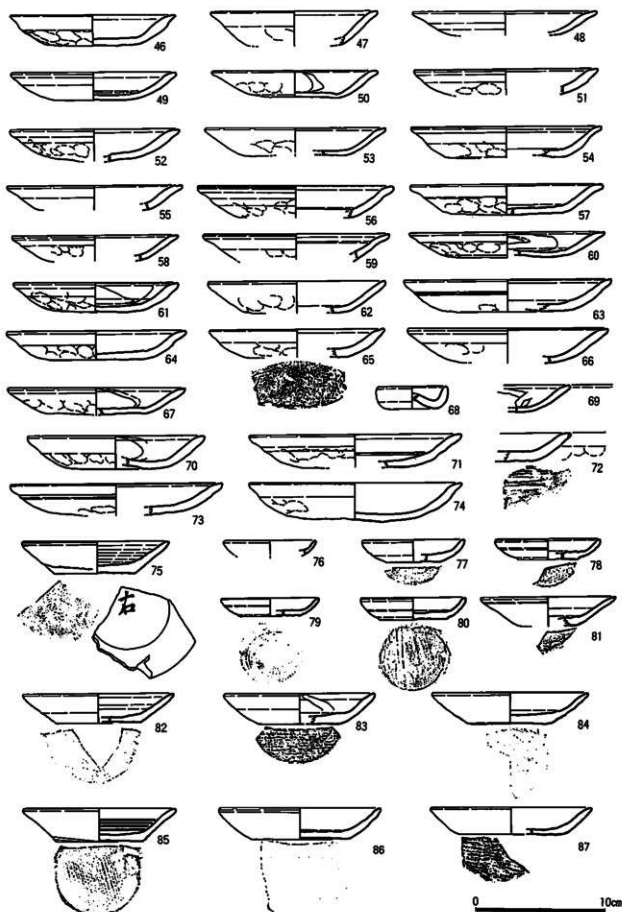
76は白色に近い胎土を使用したロクロ成形の小皿で、いわゆる「大内系」のものに類似する。おそらく搬入品であろう。

75・77～100・104・118・119はロクロにより成形された土師器杯および小皿であるが、色調や含有粒子の少なさの点で京都系土師器と非常に類似した胎土を使用したものである。75は底部に「右」の墨書がある杯で、内面に不明瞭な段が認められる。83は底部に蓮目状の王痕を有する。意図的なものではない可能性もあるが、内面に「2」の字ナデ状の痕跡が見られる。

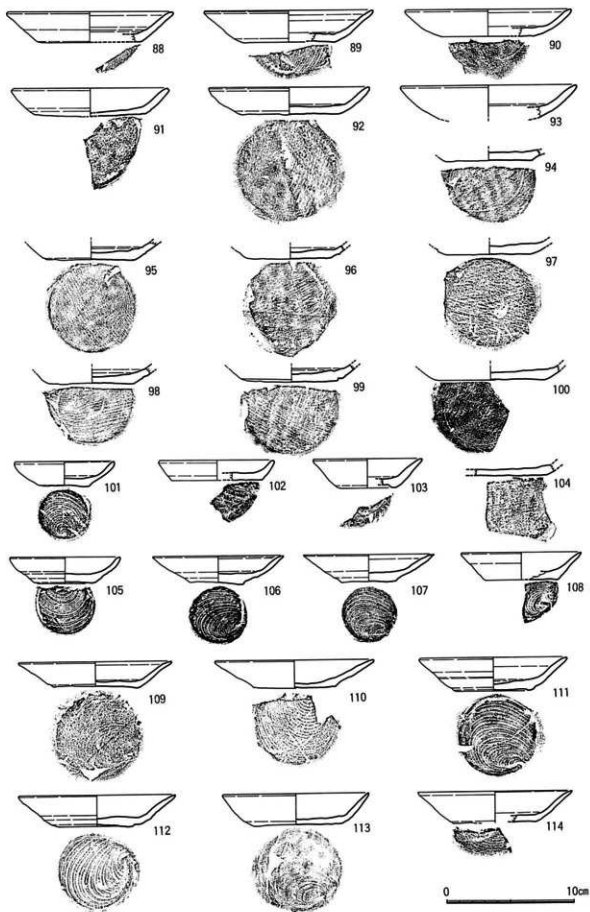
101～103、105～117、120～136はロクロ成形の土師器杯および小皿で、橙褐色～赤褐色を呈する赤色系の胎土を使用したものである。石英や角閃石、赤褐色の粒子等多量の粒子を含有するものが多い。



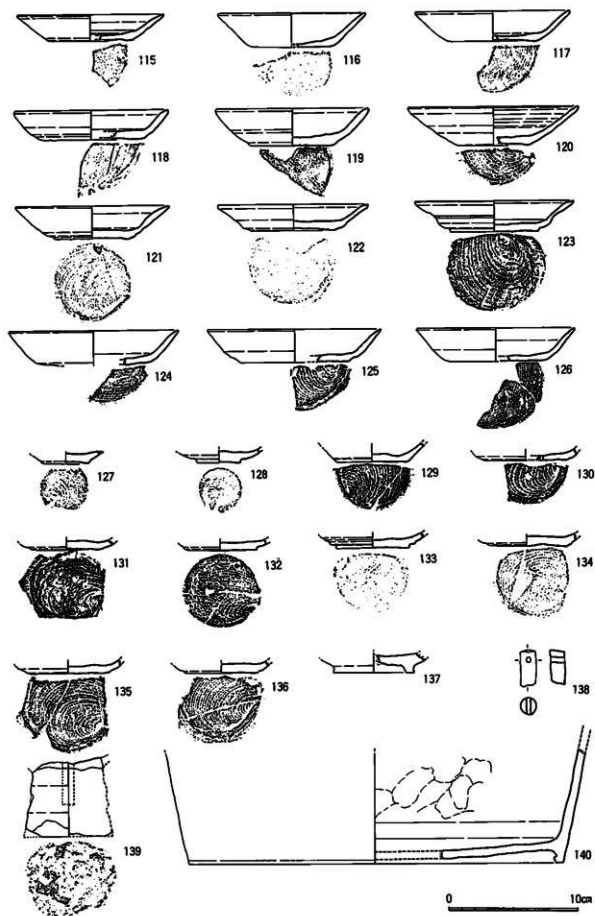
第11図 SD201 出土遺物実測図1 (1/3)



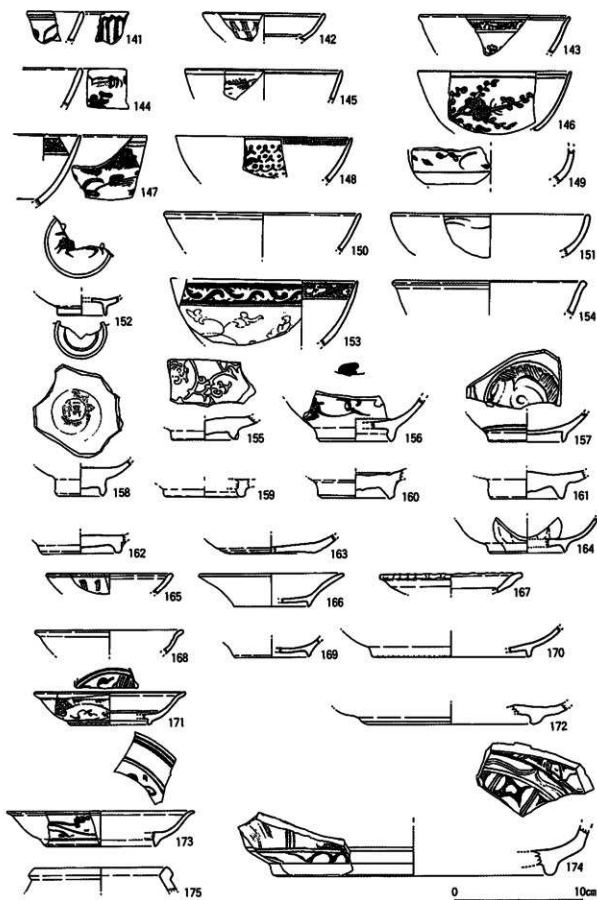
第12図 SD201出土遺物実測図2 (1/3)



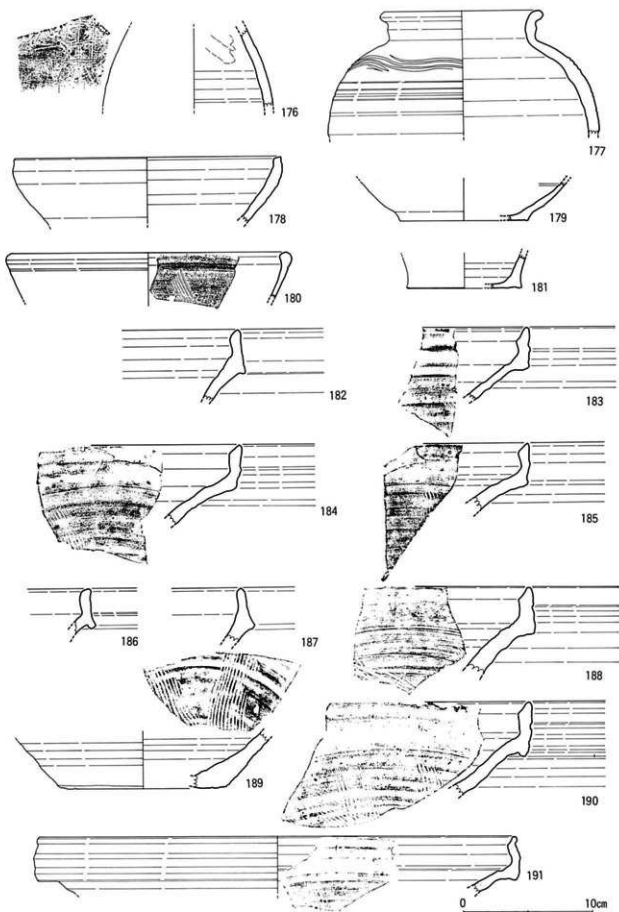
第13図 SD201出土遺物実測図3 (1/3)



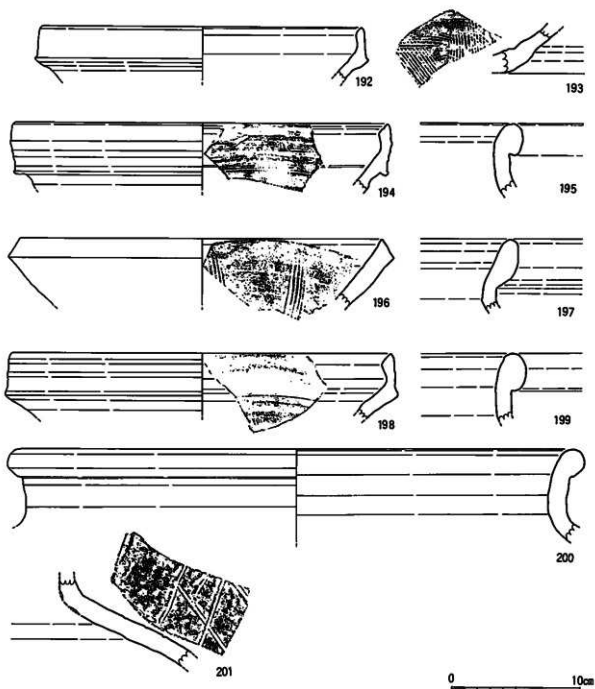
第14図 SD201出土遺物実測図4 (1/3)



第15图 SD201出土遗物实测图 5 (1/3)

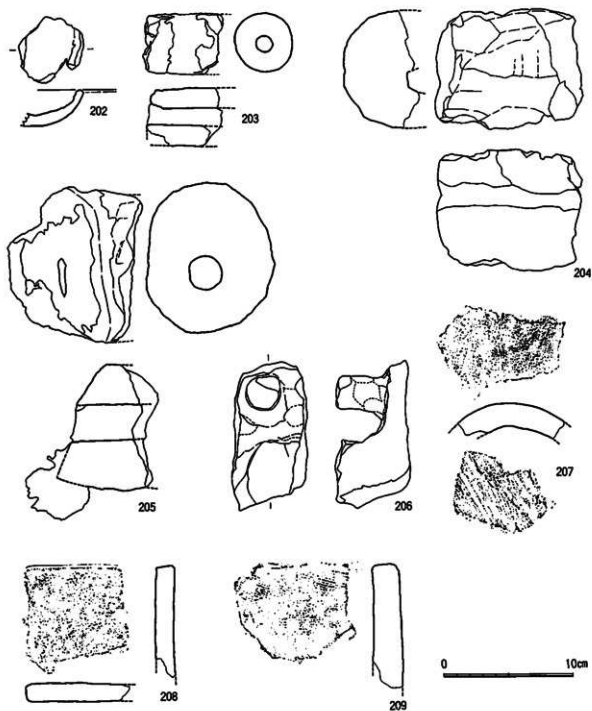


第16図 SD201出土遺物実測図6 (1/3)



第17図 SD201出土遺物実測図7 (1/3)

137は、土師器碗で白色に近い胎土で内面を研磨した、いわゆる研磨土師器である。高台の形状から12世紀代のものと推定される。138は土鍾である。139は土師質土器灯火具で、底部は剥落が著しいが僅かに糸切り痕を残す。京都系土師器と共通する胎土が使用されている。140は瓦質土器火鉢である。141は外面に剣先状の蓮弁文がヘラ彫りされる青磁碗であるが、内面にもヘラ彫りの文様が施文されている。142は外面に梵字文を描く青花皿C群で、165も同様のものである。143～145・148は青花碗C群、156・157は碗C群の底部である。146・147は青花碗E群と推定されるものである。152は青花碗E群の底部で、見込に蟹を描く。149は漳州窯系の青花碗である。150は白磁碗である。151は青磁碗で口縁部に退化した雷文が描かれている。153は青花碗で、口縁部外面に唐草文、内面に四方棒を描く。また、体部外面には唐草文が陰刻される。154は口縁部が外反する青磁碗である。152も青磁碗で「福」字と花卉状の文様をスタンプする。155は枢府系の青白磁碗で14世紀代に比定される。159・161・162



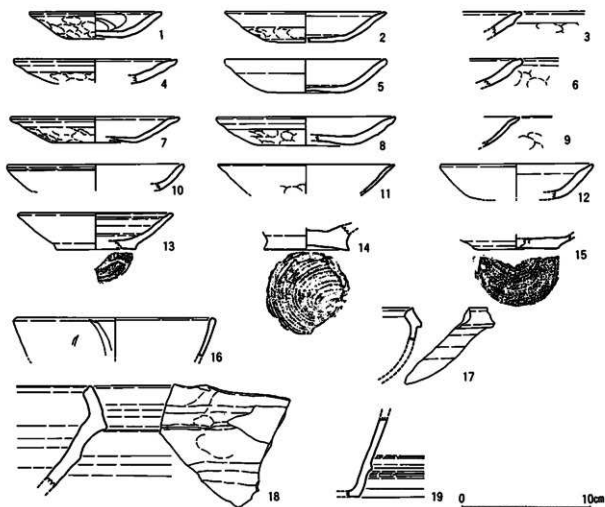
第18図 SD201出土遺物実測図 8 (1/3)

は青磁碗の底部である。160は白磁の底部であり、口縁部内面に顕著な段を有するもので、朝鮮王朝産の可能性もある。41は見込無軸の白磁皿である。164は白磁菊皿。165は外面に梵字文を描く青花皿C群である。166は白磁皿で体部が大きく外反する器形である。167は青磁皿で、口縁部は輪花となる。168～170は白磁皿、171・173は青花皿の小野分類B 1 群である。172は青磁皿、174は青磁盤で内外面にヘラ状工具により文様が陰刻される。175は中国産と推定される蜀軸陶器壺の口縁部である。176は備前焼瓶、177は外面に櫛描波状文を有する備前焼壺、178は備前焼の鉢と思われる。179～181は中国製と推定される焼締陶器である。179は鉢の底部である。180は口縁部が内側に張り出した玉縁状になる襷鉢であり、中世大友府内町跡第3次調査地点SX210⁽²⁾より出土したものに続

き2例目となる。181はほぼ黒色に発色するきわめて緻密な胎土を持つもので、瓶あるいは壺と推定される。ベトナム産長胴瓶とも思われたが、胎土・焼成・器形など諸属性が異なっているため、中国産ではないかと推定される⁽³⁾。182～191は備前焼播鉢である。187・196のように古相のものも僅かに含まれるが、188・190・193のように交差する摺り目を有する乗岡編年近世1期bに比定されるものも確認された。195・197・199・200・201は備前焼の甕である。201は肩部の破片でヘラ記号が認められた。202は土師質土器のトリペで、内面に銅滓と推定される赤紫色～暗緑褐色のガラス状物質が付着する。203は土製羽口で外径4.6cm、内径1.4cmをはかる。204は阿蘇塔結凝灰岩製羽口であり復元外径約9.3cmをはかる。外面には鑿跡が残る。内孔は方形状を呈し、2.0cm程度の内径と推定される。205は凝灰岩製の羽口先端部で内径は2.6cmである。この他、図示していないが鉄滓が約1kg出土した。また炉壁片と思われるものも出土している。206は鬼瓦である。207は丸瓦で内面に糸切り痕を有する。208・209は平瓦で糸切り痕が認められる。

SD203出土遺物（第19図）

1～9・11・12は京都系土師器である。このうち9・11は際だって器壁が薄く、胎土も粒子をほとんど含まない精良なもので、色調も他のものに比べやや白っぽい。豊後における京都系土師器の編年上では最も古く位置づけられると思われ、搬入品の可能性もあると考えられる。10・13～15は口ロ成形の土師器坏である。このうち10は、京都系土師器と共通する粒子の少ない明灰褐色系の白っぽい胎土である。16は青磁碗、17は中国産と推定される焼締陶器鉢で、口縁部が緑帯状になるものである。18は備前焼播鉢、19は瓦質土器火鉢である。



第19図 SD203出土遺物実測図（1/3）

②近世1期の遺構と遺物

整地層（土層：第21図）

近世初頭（府内城築城時）の整地層

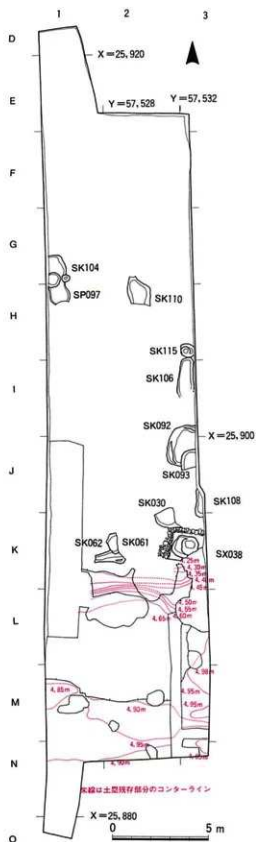
1597年に始まる府内城築城時に行われた大規模な整地地業跡であり、土塁積み土の下層を含め、調査区全域で検出された。中世の遺構を直接覆っている整地層であり、近世の遺構はすべてこれよりも上から掘り込まれている。第21図9層～11層がこれに当たり、灰褐色～暗褐色の堅く締まったシルト質土からなる。出土遺物のうち最も新しいものは17世紀初頭のものであるが、これは1597年に府内城築城が開始され、1607年までには中世の府内町から町屋が移転し城下町が完成したとされることと矛盾しないものである。整地層からの出土遺物の中には12世紀代の白磁碗や和泉型瓦器碗、さらには古代に遡ると考えられる土師器坏片等も散見される。

その他の近世整地層

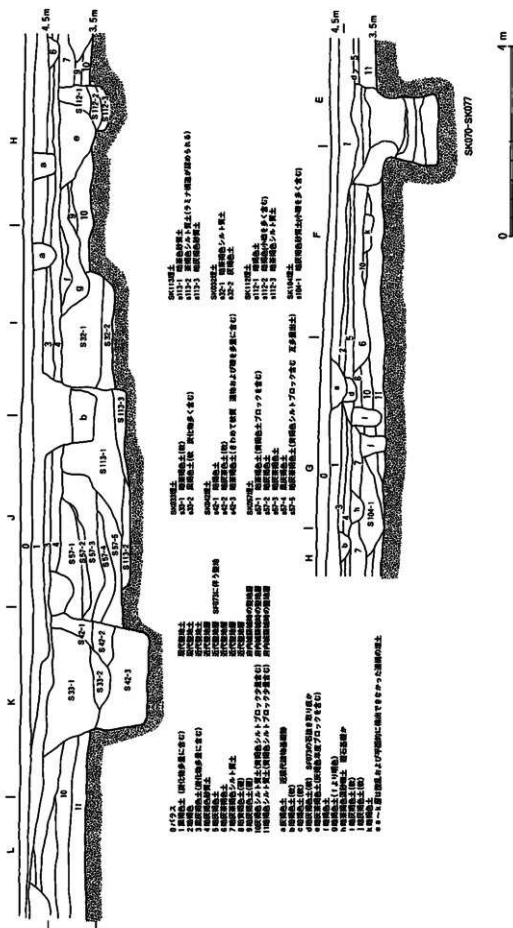
今回の発掘調査においては、近世初頭の整地層上面まで掘り下げて検出された遺構が多くを占めるが、調査区北西部のE-1区、F-1区、G-1区、H-1区においては近世でもより新しい時期の整地層が存在することが確認された。（第21図4～8層）これらのうち5層は建物基礎SF073に直接伴う整地層である可能性が高いが、他の整地層については、これに伴うと考えられる建物やその基礎は検出できなかった。しかし、これらのグリッドにおいては遺構分布がきわめて疎であることや、繰り返し整地されていることから、SF073以外にも継続的に礎石あるいは石列基礎を有する建物が営まれていた場所ではないかとも考えられる。

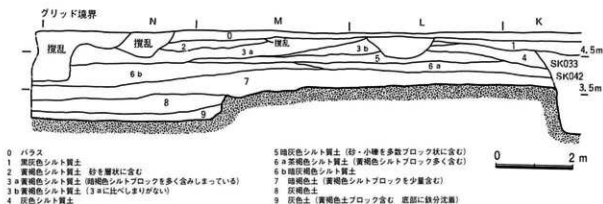
府内城外曲輪土塁（第20図、土層図：第22図）

試掘の際既に確認されていたが、今回の発掘調査では調査区南端部分において南北幅約14mにわたって検出された。土塁の南側裾部については、調査区西壁沿いにサブトレンチを設定して検出しようと試みたがこれは検出できなかった。おそらく、サブトレンチの南端より南側約1mの地割境界付近に存在するものと推定される。北側裾部については、石列等明確な遺構は検出できていない。しかし、土層の観察結果からはK区中央付近に積み土の端が推定できること、またK区中央付近より南側で近世の遺構がないことから、SK033・SK042付近からSK062さらにSK038南辺を結ぶ線付近が北側裾部にあたると推定できる。土塁は削平されているため、最も高い部分でも約50cmしか残存しておらず、基底部のみ残っている状態であったが、近世初頭の整地層（第7層）の上に質の異なる土を斜めに積み上げている状況が確認できた。

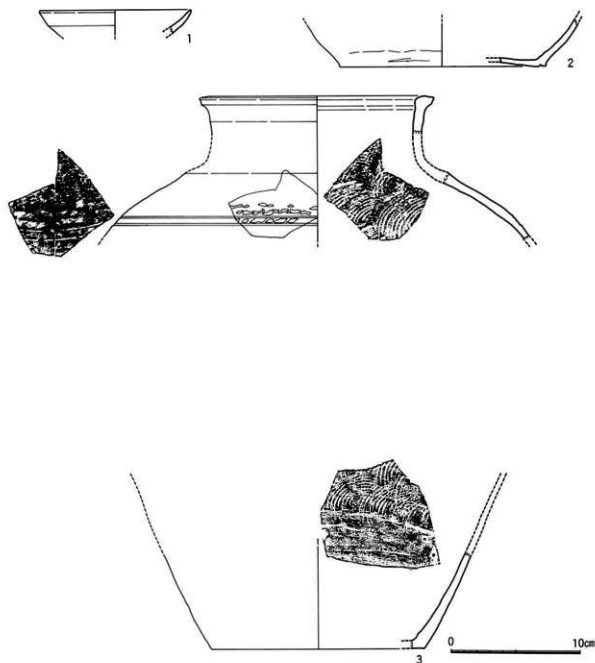


第20図 近世1期遺構配置図（1/200）

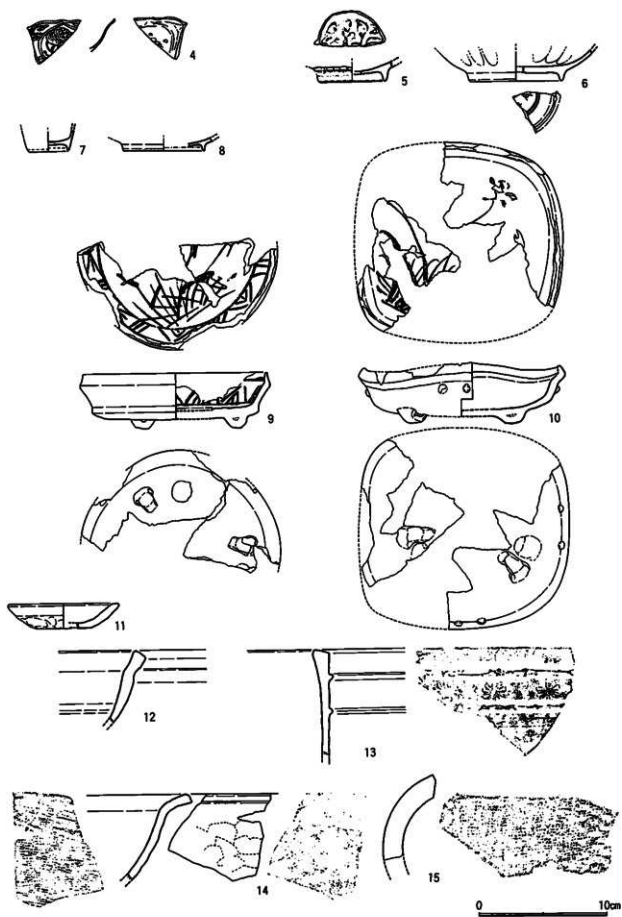




第22図 土塁土層断面図 (1/100)



第23図 近世初頭整地層出土遺物実測図1 (1/3)



第24図 近世初頭整地層出土遺物実測図2 (1/3)

近世初頭の整地層出土遺物 (第23・24図)

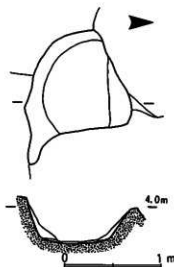
1は炭灰釉の掛かる肥前陶器皿である。2は中国産と推定される焼締陶器鉢の底部である。3は胴部内面に同心円状のタキ痕が見られ、内・外面に緑褐色の釉が掛かる陶器の甕で、16世紀末～17世紀初頭の肥前もしくは九州産であろう。口縁部はSK022、底部はSK007からの出土である他、胴部破片が調査区全域の近世遺構から少数出土しているが、1個体の可能性が高いと思われる。整地層からも散漫に出土しているが、整地層下の中世遺構からは全く出土していない。このため、本来は整地層中に包含されていた可能性が最も高いと推定される。4はいわゆる芙蓉手の青花皿であり、型打成形できわめて薄く作られている。17世紀初頭の製品であろう。5は青花碗で小野分類C群の底部である。6は白磁菊皿で、高台内に二重圈線と「□□年製」銘が呉須により描かれる。7は白磁小杯、8は白磁皿で、いずれも中国製である。9・10は志野向付である。9は一部がSK031の甕内から出土したが、多くの破片は整地層中から出土し、1個体分と推定される。見込に鉄絵による草花文、口縁部内面に幾何学的な文様を配する。底部には三足が貼り付けられる。10は、F区を中心とする整地層及びSE064から出土したもので1個体分である。四隅をゆがめて隅丸形状に整形され、側面の各面には2点ずつの貼付文がある。見込には鉄絵で草花が描かれる。いずれも17世紀初頭の製品である。11は京都系土師器で16世紀後半のものであろう。12・14は土師質土器の鍋、13は瓦質火鉢である。15は丸瓦で、内面には糸切り痕を残す。

SK030 (第25図)

K-2区で検出された廃棄土坑である。SK018、SK031および近代以降の擾乱により切られているため、ごくわずかしが残存していなかった。出土遺物から17世紀後半に比定される。

出土遺物 (第26図・第27図)

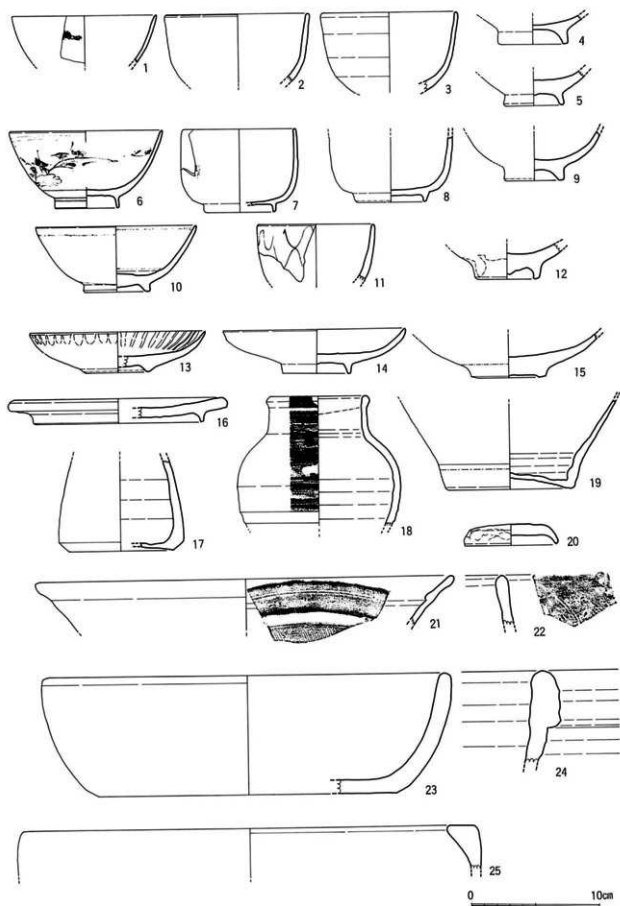
1・6は1660年代～80年代に比定される染付碗で外面に山水文が見られる。2～5・9・12は肥前陶器碗である。7・8は京焼風陶器碗であるが高台内に刻印は確認できなかった。10は漳州窯系の青花碗であり、呉須により内・外面に圈線のみを施す。16世紀末から17世紀前半の所産であり混入品の可能性がある。11は一重編目文の染付碗で1640～1650年代に比定される。13は青磁菊皿で17世紀前半～中頃に比定される。14は見込みを蛇の目軸刺ぎする青磁皿で1660年代～80年代に比定される。15は砂目積みの肥前陶器皿である。16は焼締陶器で、水差しや甕であろう。18は刷毛目唐津二彩手の甕である。19は中国産の可能性のある褐釉陶器甕で器壁は非常に薄く、底部は無軸である。17は備前焼徳利である。20は焼塩甕の甕である。21は肥前陶器の描鉢で、外面から11線内面にかけて鉄軸がかけられている。ロクロ成形である。22は土師質の焙烙で外面にタキ痕を残すものである。17世紀前半～中頃に位置づけられる。23は瓦質土器の鉢、25は同じく火鉢である。24は備前焼大甕の口縁部で、27の大甕底部に対応するものと思われる。25、26は土人形で、26はホテイを表すものであろう。



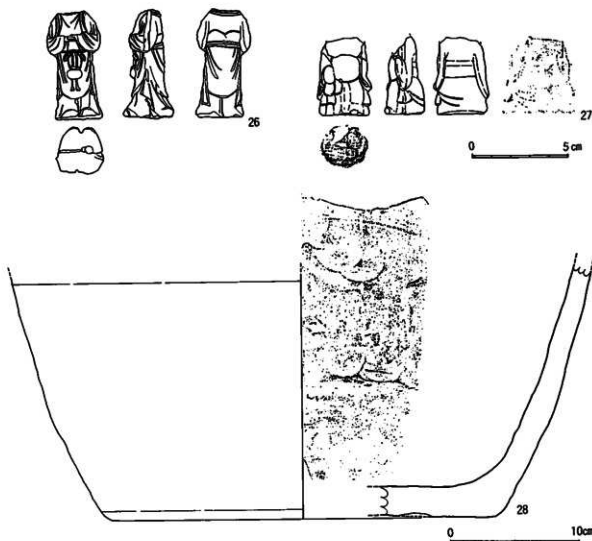
第25図 SK030
平面・断面図 (1/40)

SK061 (第28図)

K-2区で検出された土坑で、SK062を切って掘削されている。長軸1.1m、短軸0.6m、深さ0.2mをはかる。SK002・SK007・SK008・SK022に切られているため、一部しか残存していない。出土遺物から17世紀前半～中頃、1640年代までに位置付けられる。



第26図 SK030出土遺物実測図1 (1/3)



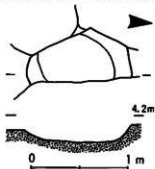
第27図 SK030出土遺物実測図2 (1/2、1/4)

出土遺物 (第29図)

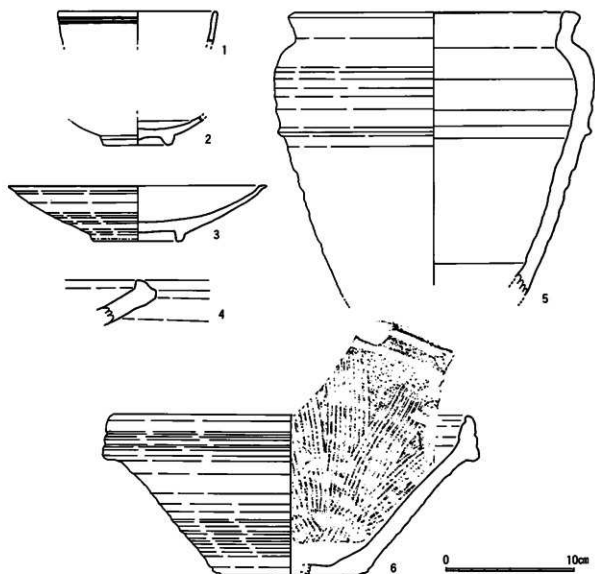
1は染付碗で口縁部外面に2本の圈線を廻らせるものである。いわゆる初期伊万里で、製作年代は1620年代から30年代にかけてである。2は砂目積みの唐津皿である。3は初期伊万里の白磁皿である。口縁部には鍋状の稜線を有し、端部は外反する。1630年代から40年代に製作されたものである。4は備前焼平鉢片、5は備前焼水屋甕である。6は備前焼播鉢で乗岡編年近世2期aに比定される。

SK062 (第30図)

K-2区で検出された溝状の土坑である。外曲輪土塁の北側裾部に沿って東西方向に掘削されたものであるが、SK061をはじめ、SK002・SK007・SK008・SK022に切られているため、全形は不明である。現状で長さ1.6m、最大幅0.7m、最大深0.4mを測る。土塁北側裾部に沿っていることから土塁に伴う溝等であることも考えられるが、その延長上に連続すると判断できる遺構が全く検出されなかったため、土坑としてとらえている。出土遺物は初期伊万里と砂目積み段階の肥前



第28図 SK061
平面・断面図(1/40)

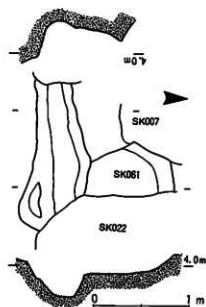


第29図 SK061出土遺物実測図 (1/3)

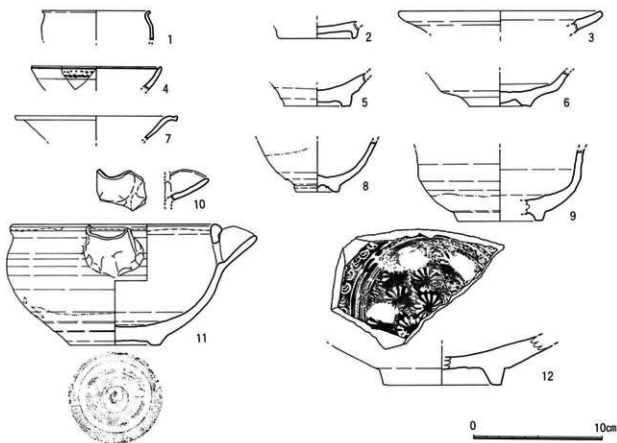
陶器類であり、17世紀前半、1620年代から30年代に比定できよう。

出土遺物 (第31図)

1は17世紀前半の陶器碗で天目形を呈するものであろうか。4は青花皿C群の口縁部である。3・6・7は肥前陶器皿で6は砂目跡が見られる。7も砂目積みの溝縁皿である。5は碗で全面に灰軸を施す。8は灰色に発色する軸が施された肥前陶器碗である。9は藁灰軸が施された肥前陶器鉢である。10は全面に鉄軸が施された肥前陶器片口鉢の片口部である。11は片口鉢で内面および外面上半に暗緑褐色に発色する灰軸が施されている。高台は糸切り雕しの後に浅く削り出されている。類似の片口が鶴崎御茶屋跡で出土しており⁽⁴⁾、高取手の内ヶ磯窯産とされているが、本資料は高台の成形や胎土より16世紀末～17世紀初頭の肥前陶器と考えられる。12は砂目積みの肥前陶器大皿もしくは鉢であり内面に鉄軸が掛けられており、その上から型紙摺りにより白土で菊花文等が施文されている。



第30図 SK062平面・断面図 (1/40)



第31図 SK062出土遺物実測図 (1/3)

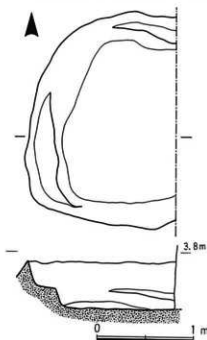
SK092 (第32図)

J-3区で検出された隅丸方形形状の土坑である。長軸2.25m、短軸1.5m + α で、検出面からの深さは0.5mである。埋土の上半部が掘り返し部分である。重複する別遺構の可能性も考えられるが、平面プランの検出ができなかったので掘り返しとしてとらえている。出土遺物から、下底部分の黒褐色土層から出土した遺物は17世紀前半～中頃、1640年代までに遡るが、掘り返し部分は17世紀後半代に帰属と思われる。

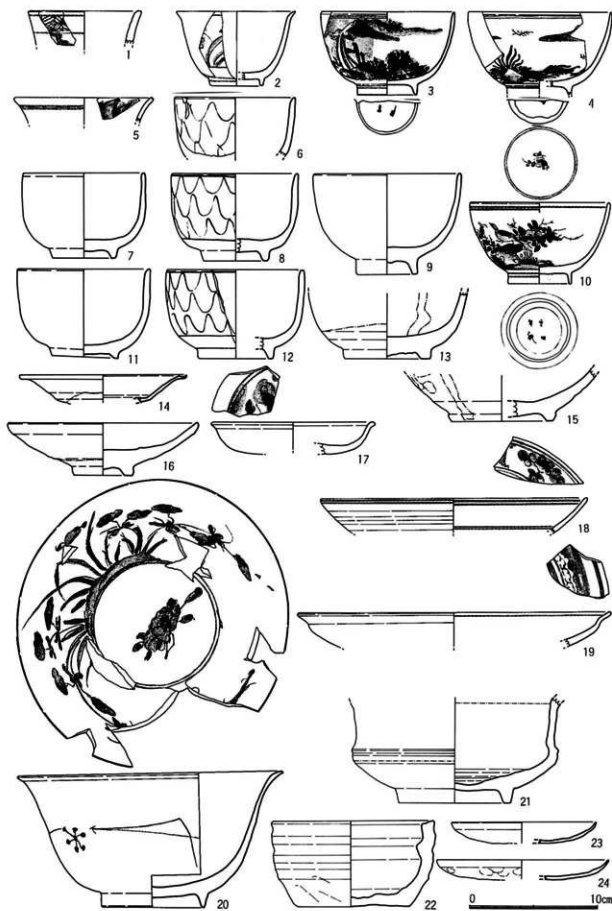
出土遺物 (上層出土：第33図・第34図、下層出土：第35図)

掘り返し部分を上層出土、下底の黒褐色土から出土したものを下層出土としている。上層出土遺物中には本来下層に帰属すると推定されるものも含まれるが、確実に下層から出土した遺物と接合関係を有するもの以外は上層出土として掲載した。

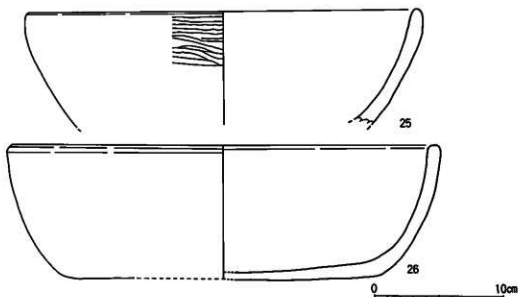
1・5は初期伊万里の碗で17世紀前半に製作されたものである。2は17世紀後半の染付碗。3・4・10は1660年代から80年代に比定される染付碗であり、山水+貝藻文(3・4)あるいは花鳥文(10)を外面に施文し、内面は無文である。10は高台内に「宣明年製」の銘が認められるが、3の高台内にも「宣」「年」が、4にも「明」字が確認でき、同じ銘があったと考えられる。6・8・12は一重綱目文の染付碗で1640年代に比定さ



第32図 SK092平面・断面図 (1/40)



第33図 SK092出土遺物実測図1 (1/3)



第34図 SK092出土遺物実測図2 (1/3)

れる。7・11は肥前産京焼陶器碗であるが高台内に刻印は無い。9は肥前陶器のいわゆる「呉器手碗」である。13～16・21は肥前陶器で、13・21は香炉、14はいわゆる溝縁皿、15は砂目積みの鉢、16は砂目積みの皿である。17～19は初期伊万里の皿で17世紀前半、1640年代までに比定されるものである。20は染付鉢で、内面に草花文と昆虫文、外面に折松葉文を施す。製作年代は17世紀後半に位置づけられる。22は備前焼水差しである。23・24は手づくね成形による薄手の土師器皿である。府内城三の丸遺跡で出土例があるが、16世紀から17世紀前半代まで豊後にみられる京都系土師器とは全く異なる器形で器高の低い皿状になるものである⁽⁵⁾。25・26は瓦質土器鉢である。

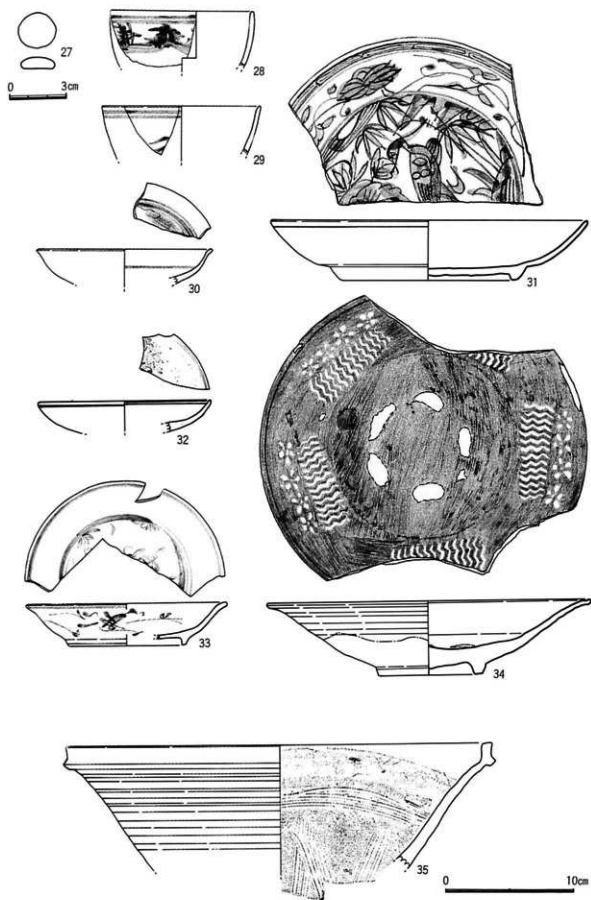
27～35は下層出土遺物である。27はおはじき状のガラス製品で、型を使用することなく、融解状態のガラスを平面上に落としただけのもののように見受けられる。近年中世府内町跡での類例が増加しつつあるが、これらのものに比べガラスの色がより明るい青色である点が異なる。28・29は、初期伊万里の碗、30は同じく皿であり、1640年代までに比定される。31は「呉須手」と称される漳州窯系の青花皿で見込に花鳥文を描く。底部に砂は付着していない。17世紀前半の製品である。30・32は初期伊万里の皿で、32は吹墨技法を併せ用いてウサギと月を描くものであろう。1630～40年代。33は青花皿で小野分類B1群にあたる。混入品の可能性もある。34は砂目積みの肥前陶器大皿で、鉄軸が刷毛目状に施され、型紙摺りで白土による文様が内面5箇所に施文される。35は産地不明の焼締陶器鉢で、4本を1単位とする摺り目が施され、口縁部に沿って横方向にも施文される。

SK093

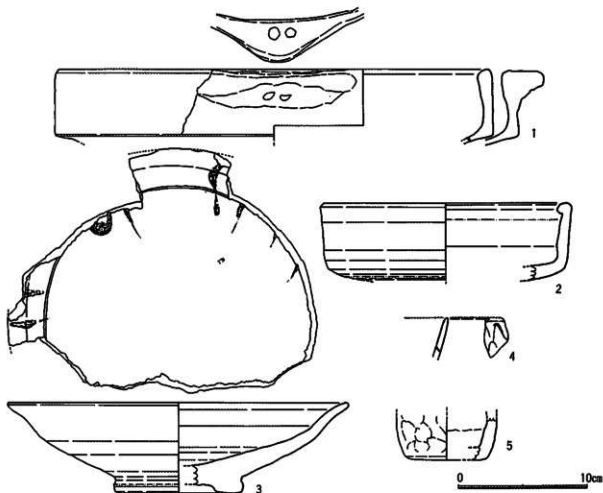
SK018北端の調査区壁面沿いで検出され、SK018の東側壁より東にある遺構の可能性が高い。壁面での確認にとどまり、平面図の作成が行えなかった。

出土遺物 (第36図、1～3)

1は土師質土器の焙烙で、2箇所に穿孔された耳が貼り付けられるものである。17世紀後半の製品であろう。2は肥前陶器の香炉で、外面には灰釉が掛かる。3は肥前陶器の大皿で、内面に鉄軸により文様を描くものである。16世紀末～17世紀初頭の製品である。



第35図 SK092出土遺物実測図 3 27(1/2)、28~35(1/3)



第36図 SK093・SP097出土遺物実測図 (1/3)

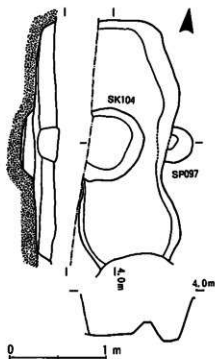
SK104・SP097 (第37図)

G-1区で検出された不正楕円形を呈する土坑である。遺構の中央部に落ち込みが認められ、墓等の埋設があった可能性も考えられるが、遺物は僅少であり、遺構の性格は不明である。近世の整地層(第21図第9層)上面で検出されたものであるが、調査区内のG-1区、H-1区、I-1区付近においては近世初頭の整地層よりも上位に整地層が確認できており、比較的遺構の分布が疎であることから、何らかの建物遺構が存在したことが考えられ、SK104もこれに関連する遺構である可能性が考えられる。

SP097はSK104を切って掘られたピットであるが、建物の一部かどうかは確認できなかった。

SP097出土遺物 (第36図、4・5)

4は一重網目文の描かれた肥前集付碗で1640年代～50年代の所産。5は焼塩壺で17世紀代のものであろう。



第37図 SK104・SP097平面・断面図 (1/40)

SK106 (第38図)

I-3区で検出された土坑で、長軸2.0m+ α 、短軸0.9m、最大深0.15mで浅い溝状の土坑である。南端の部分は擾乱に切られており、全形を知ることはできない。遺物は僅少であり遺構の性格は不明である。出土遺物は僅少であるが、17世紀前半代に位置づけられる。

出土遺物 (第39図1~5)

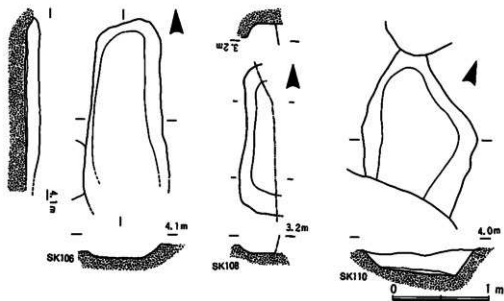
1は鉄軸のかかる瀬戸・美濃産天目碗であり、中世のものである可能性もある。2は京都系土師器皿で、17世紀前半の所産であろう。3は肥前陶器溝縁皿で砂目積み段階の製品である。4は胎土目積みの肥前陶器皿、5は瓦質土器火鉢で、底部の器表面に張り出す形で三足が貼り付けられるものである。

SK108 (第38図)

J-3区の調査区東壁沿いに所在する土坑である。SK108の底面で検出され、10cm程度しか残存していなかった。出土遺物は僅少であるが、17世紀後半代までに位置づけられるものと考えられる。

出土遺物 (第39図6~11)

6は肥前磁器染付の小杯で1630年代~40年代の初期伊万里であろう。7は型成形の色絵磁器製品で水滴であろうかと思われる。赤色顔料で上絵付けされている。17世紀後半の製品であろうか。8は砂目積みの肥前陶器皿である。9は肥前陶器碗で砂目積みの段階のものであろう。10は内外面に灰軸のかかる肥前陶器片口鉢であり、見込には



第38図 SK106・SK108・SK110平面・断面図 (1/40)

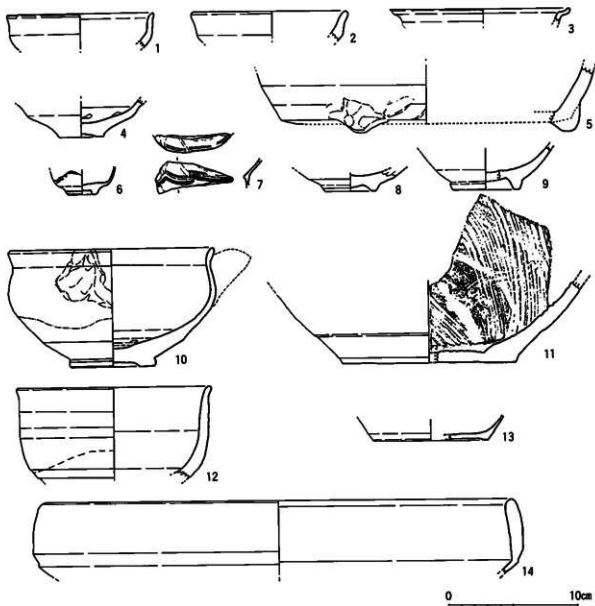
目跡が認められる。16世紀末~17世紀初頭の製品であろう。11は備前焼播鉢で、交差する摺目を有するものである。乗岡編年近世1期bもしくはcに比定される。

SK110 (第38図)

H-2区で検出された土坑で、SK105及びSE064に切られている。長軸1.7m+ α 、短軸1.2m、深さ0.3mをはかる。

出土遺物 (第39図12~14)

12は灰軸のかかる肥前陶器鉢であり、体部外面下半は無軸である。片口の可能性がある。13は産地の不明な陶器で、外面には、白化粧の後、いわゆる翡翠軸に類似する鮮やかな青色の釉が掛かる。内面には黄褐色の透明釉



第39図 SK106・SK108・SK110出土遺物実測図（1/3）

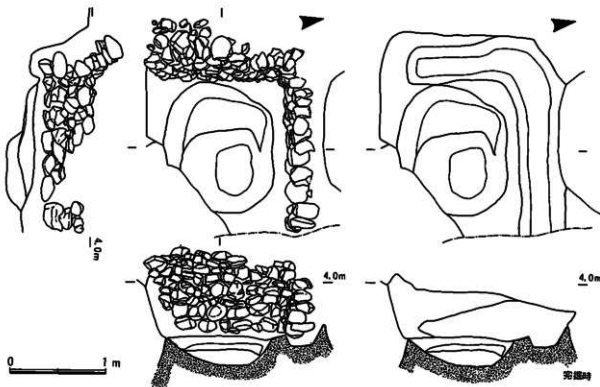
が掛かる。底部は露胎で浅く高台が削りだされている。青色軸の軸調や胎土は、16世紀後半の翡翠軸後花皿に類似するものであることから、中国南部の製品ではないかと思われる。ただ、遺構検出面付近での出土であるため、本遺構に確実に帰属するものか否か若干問題がある資料である。14は土師質土器の焙烙である。口縁部の小破片であるが、本来耳が付く形態のものと思われる。

SX038 (第40図)

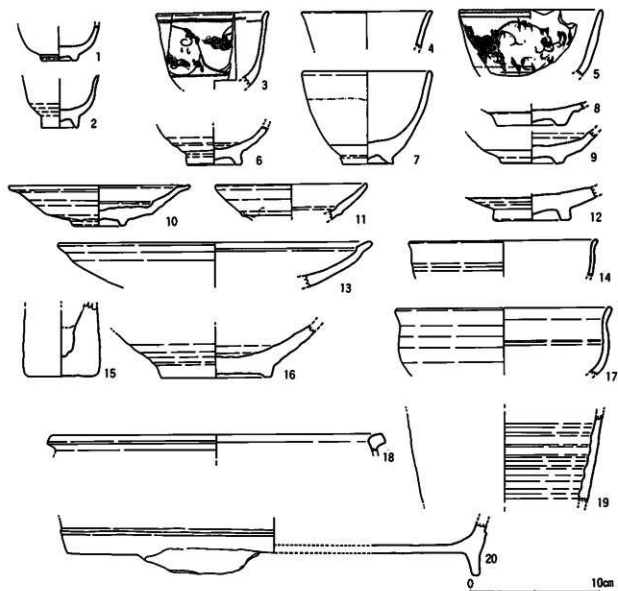
J-3区で検出された石組み遺構である。遺構の東端は調査区外のため不明であるが、外曲輪土塁の北辺に沿って南北約1.9m、東西2.0m以上の方形の土坑を掘削し、西辺と北辺に石積みを行っている。南辺側、すなわち土塁側には石積みは無く、撤去した形跡が見られないことから、元々石積みが無かった可能性が高い。石積みの下は深さ約0.2mの溝が廻っており、石を積む際、木材を敷く等基礎となる構造を形成していたと思われる。遺構の中央部分は浅い土坑となっており、壺等を埋設していたことも考えられる。出土遺物から、廃絶年代は17世紀前半代、1640年代までに収まるものと判断される。なお、この遺構の主軸方向は、N-10°-Eであり、ほぼ真南北方向を指向する府内城・城下町の町割り方向とは異なっている。また、整地層よりも下層の戦国時代溝SD201・SD203の主軸方向N-6°-Eとも異なっている。

出土遺物 (第41図・第42図)

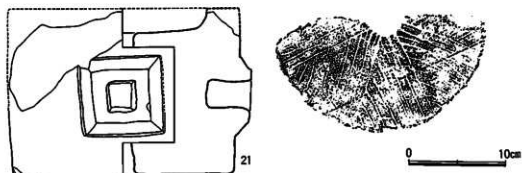
1は染付小坏で、底部には粗い砂が付着する。幅広の削出高台で、1630～1640年代の初期伊万里であろう。2は口縁部が外反する器形の初期伊万里白磁小坏であり、1630～40年代のものであろう。3・5は初期伊万里の碗である。17世紀前半代の所産であるが、5は呉須による文様が全体ににじんでおり、1610～1630年代に位置づけられるものであろう。4は灰釉のかかる肥前陶器碗。6は全面に鉄釉の掛かる肥前陶器碗である。7は灰色の釉が掛かる肥前陶器碗で、砂目積みの段階、1600年～1630年代に比定される。8～12は砂目積みの肥前陶器皿である。13は藁灰釉の掛かる陶器皿で、胎土が赤褐色に発色し、焼成が不良なものである。17世紀前半の福岡産であろう。14は銅緑釉の掛かる肥前陶器碗で1630年代以降に比定される。15は焼塩壺で17世紀前半代のものであろう。16は肥前陶器の鉢もしくは盤である。17は肥前陶器の鉢もしくは片口鉢である。18は緑褐色の釉が掛かる陶器鉢で、朝鮮王朝産もしくは肥前陶器である。19はベトナム産焼締陶器長胴瓶の胴部で、表面は暗赤褐色、内面は黄灰褐色に発色しており、。内面にはロクロによる成形痕が著しい。ベトナム中部産のものであろう。20は瓦質火鉢の底部で三足のつくものである。21は砂岩製の茶臼で、遺構北辺の石積みに転用されていたものである。



第40図 SX038平面・断面図 (1/40)

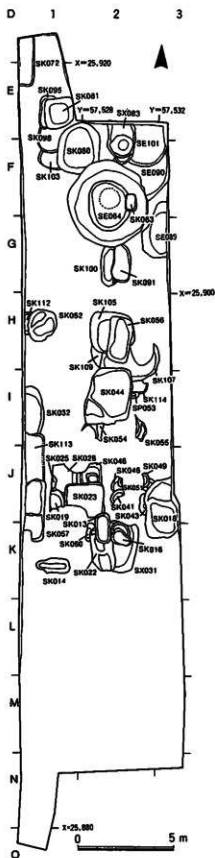


第41図 SX038出土遺物実測図 1 (1/3)



第42図 SX038出土遺物実測図 2 (1/4)

③近世2期の遺構と遺物



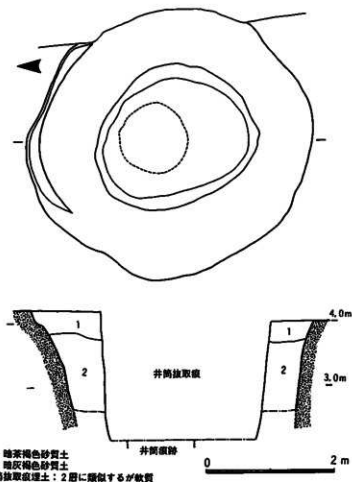
第43図 近世2期遺構配置図 (1/200)

SE064 (第44図)

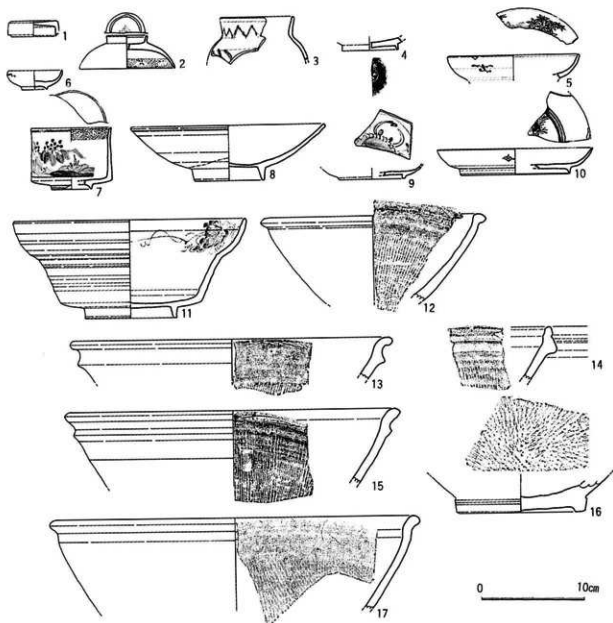
F-2区で検出された井戸跡である。掘り方の直径は約4.5mを測る大きなものであるが、中心付近で検出された井筒の痕跡は直径約1.1mである。井筒は廃絶時に抜き取られており、直径2.6mにおよぶ抜き取り痕が観察される。標高約2mのところまで水がわずかにわき始めることが観察されたが、これ以上掘り下げた場合、激しい湧水により周囲の遺構の維持が困難になることが懸念されたため掘り下げを断念した。出土遺物に青磁染付碗蓋があるため、埋没時期は18世紀後半で、広東碗出現以前と推定される。

出土遺物 (第45図)

1は京信楽系陶器の合子である。2は青磁染付碗の蓋、3は染付壺である。4は京焼風陶器の碗であり高台内に「清水」の刻印が認められる。5は染付皿で内面の紅葉文の部分はコンニャク印判により施文される。18世紀前半の製品



第44図 SE064平面・土層断面図 (1/60)



第45図 SE064出土遺物実測図 (1/4)

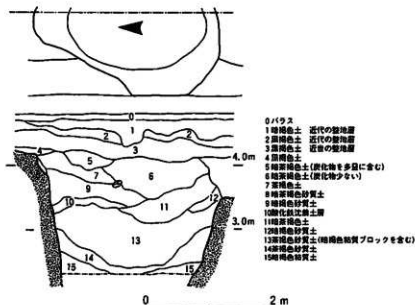
である。7は染付筒形碗、8は内面にハケ目波状文を有する肥前陶器皿である。9は17世紀前半の青花皿であろう。高台内は無軸で、カンナ削り痕がみられる。10は見込に貝藻文を描く染付皿で、17世紀後半～末のものと推定される。SK022で同一種の皿が出土している。11は京焼風陶器の鉢であり、内面に葡萄文を描く。12・13、15・17は肥前陶器の描鉢で、タタキ成形であり18世紀前半～中頃の特徴を示す。14は備前あるいは堺の焼締陶器描鉢である。16は産地不明の描鉢で、削り出し高台の内部にまで施軸される。胎土や釉調から、SK056出土の第80図5と同一個体の可能性がある。

SE089 (第46図)

G-3区で検出された遺構で、SK086及び近代の建物基礎により切られている。東壁沿いであるため一部しか検出できず、壁の安全確保が困難になったため十分に掘り下げられなかったが、埋土の状況が他の井戸跡に類似していることから井戸跡であると推定された。出土遺物から18世紀前半台と推定される。

出土遺物 (第48図)

1は青磁染付の合子蓋である。3は銅緑釉の掛かる碗で17世紀前半以降の肥前陶器である。4は16世紀代の青花碗、5は17世紀前半の漳州窯産磁器でいわゆる呉須赤絵である。6は陶胎染付碗。7は17世紀前半の初期伊万里皿であろう。8は灰釉の掛かる肥前陶器鉢で、17世紀前半。9は17世紀前半の漳州窯産青花で見込みには鳳凰文を描く。底部に砂は付着していない。破片の主な部分は明治時代の土坑SK026からの出土であるため、本来はSK026に切られている遺構SK092に帰属するものかもしれない。10は18世紀前半の肥前陶器鉢鉢。11は17世紀前半以前の備前焼鉢。12は肥前陶器で、二彩手の甕である。



第46図 SE089平面・土層断面図 (1/60)

SE090 (第47図)

調査区北東端部付近で検出された井戸跡で、SE064及びSE101に切られている。検出できた掘り方においては直径約3.0mをはかるが、十分な掘り下げができなかったことから、井筒の検出には至らなかった。出土遺物から18世紀前半と推定される。

出土遺物 (第49図1~4・6~11)

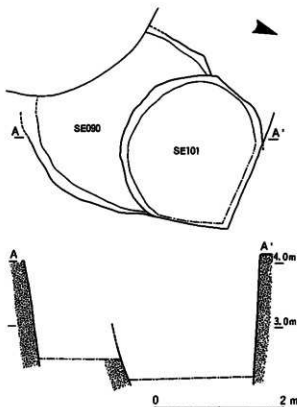
1は無文の磁器小坏である。2は17世紀末~18世紀前半の染付碗。3・4は京焼風陶器碗である。6は17世紀前半の肥前陶器小坏。7・8は肥前陶器の呉須手碗である。9は18世紀前半の染付碗。10は備前焼鉢鉢で口縁部にヘラ記号が認められる。17世紀前半のものか。11は砂岩製の砥石である。

SE101 (第47図)

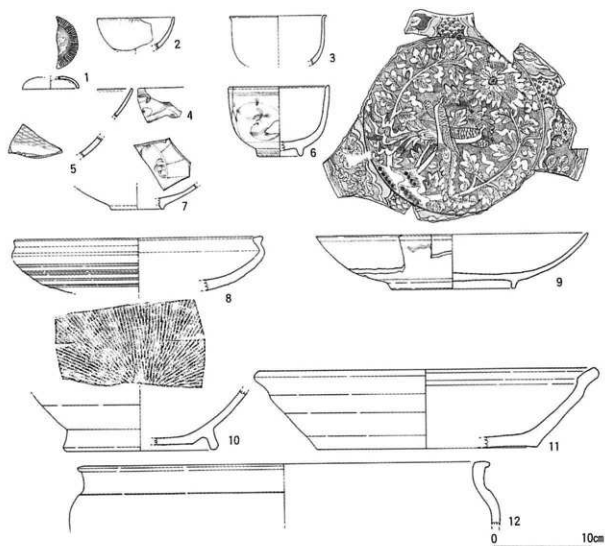
調査区北東端部で検出された井戸跡で、SE090を切って築造されたものである。直径約2.2mを測るが、井筒の検出には至らなかった。出土遺物はきわめて僅少であるが、切り合い関係から見て、18世紀後半までには埋められたものと考えられる。

出土遺物 (第49図5)

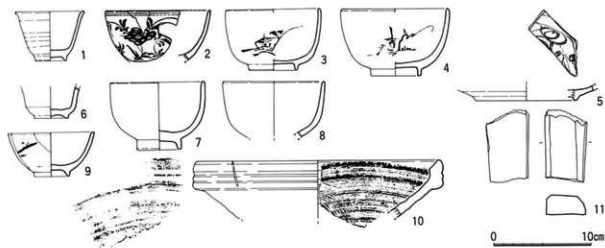
漳州窯産のいわゆる呉須赤絵皿で17世紀前半の製品である。



第47図 SE090・SE101平面・土層断面図 (1/60)



第48図 SE089出土遺物実測図 (1/4)



第49図 SE090・SE101 出土遺物実測図 (1/4)

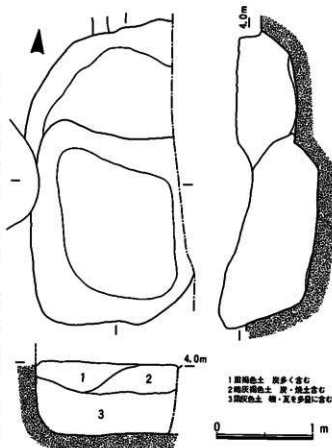
SK018 (第50図)

J-3区で検出された大型の廃棄土坑で、長軸約3.2m、短軸約1.6m+αの楕円形状を呈する。南半分がやや深くなっており最大深約0.75mをはかる。掘り返し、あるいは重複する遺構があった可能性もあるが確認できなかった。炭化物や焼土および礫を多量に含む土で埋められており、埋土からは焼けたものを含む多量の瓦や陶磁器が出土した。こうしたことから、火災処理坑である可能性が高いと考えられる。また、17世紀後半以前に通るものも出土しているが、SK030やSK092等、17世紀代の遺構と切り合い関係があることからこれらは混入品の可能性がある。

出土遺物から18世紀前半に位置づけられる。

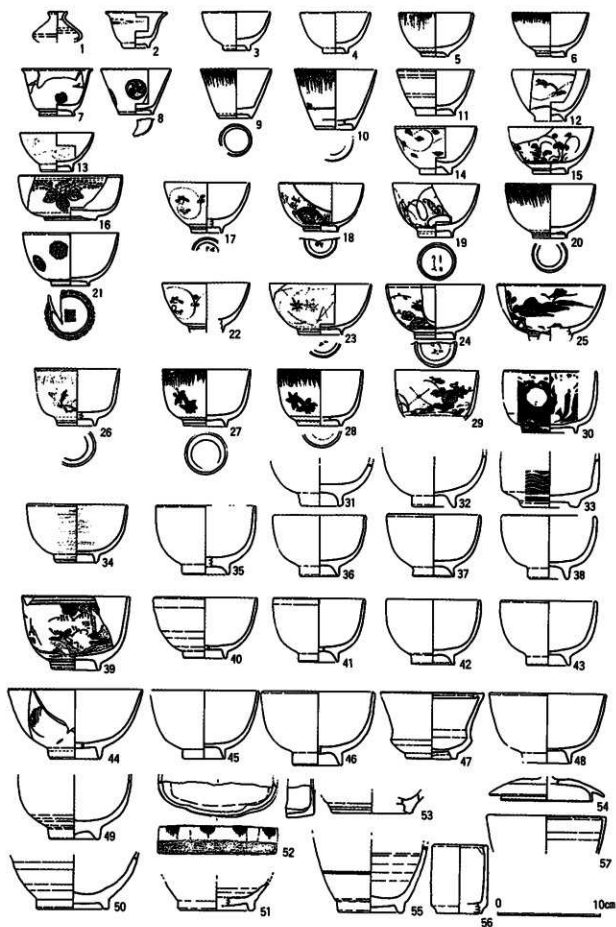
出土遺物 (第51図～第55図)

1は白磁小壺である。3・4は無文の磁器碗で、灰色の胎土であり波佐見産かと思われる。2・7は口縁部が外反する染付の小杯で、7は菊花文のみコンニャク印判で施文している。8～10は猪口である。8は巴文をコンニャク印判で施文する。11は羯軸の掛かる陶器小杯で、17世紀後半までの肥前もしくは福岡産と推定される。12・14は外面に唐草文を施文する染付小碗。13は陶胎染付の小碗である。16は、外面に桐花文を描く鉢で口縁端部が無軸であることから蓋がつくものと推定される。高台は幅広く蛇の目形となる。19は「くらわんか手」の染付碗で高台内に「大明年製」の簡略化された銘を有する。26～29は文様の一部にコンニャク印判が使用された染付碗で、29は菊花と葉のみコンニャク印判による。30は肥前陶器でいわゆる「蛸手」である。33は刷毛目文様の肥前陶器香炉、34は碗である。31・32、35～38、40～43、45・46・48・49は肥前陶器碗であり、高台部で数えることの遺構からは少なくとも40個体が出土している。47は肥前陶器の香炉で、外面に鉄軸がかかる。56は青磁の火入れで、高台は幅広く蛇の目

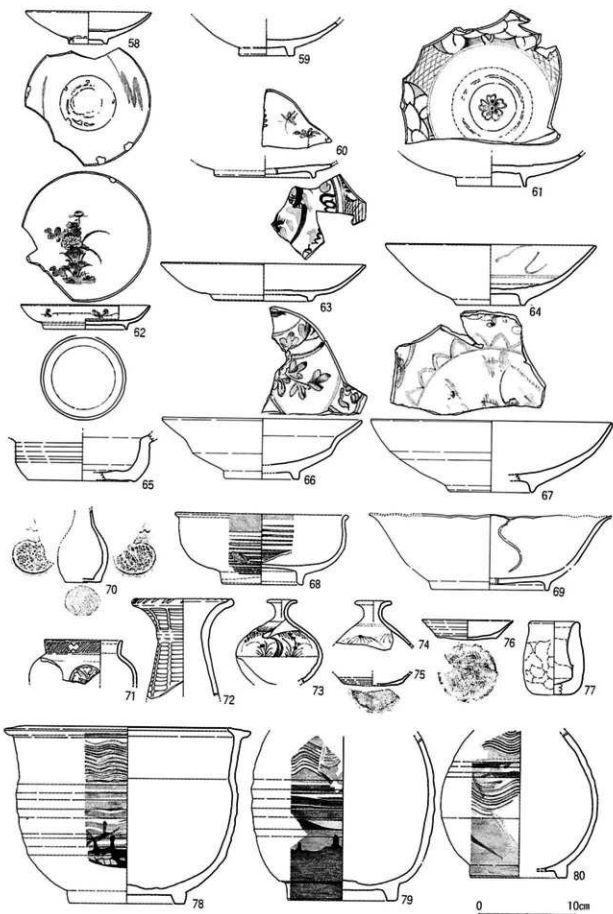


第50図 SK018平面・断面図 (1/40)

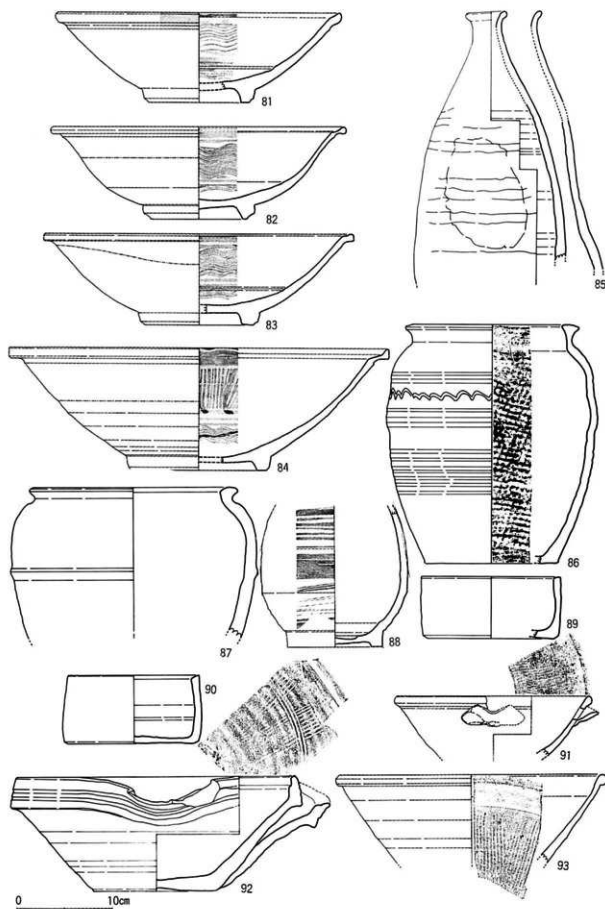
状になるようである。57は青磁香炉である。54は焼締陶器の蓋である。50は肥前もしくは福岡産の陶器壺と思われる。内外面に羯軸を施すものである。51・53・55は磁器の瓶である。52は、型作りの鬚だらひと思われるが、口縁端部が無軸であるため、蓋物の可能性もある。平面形は木瓜状を呈し、外面上半には雨降り文が夤須で描かれ、下半には鉄軸が塗られている。17世紀末～18世紀初頭。58・61は見込みを蛇の目軸刺ぎする磁器皿で、波佐見産のものである。61は内面に蓮華文と格子状の文様を描き、見込みに花文を描くもので、17世紀後半に比定される。波佐見産の可能性もある。59は内野山系の陶器皿で、見込みを蛇の目軸刺ぎし、内面に銅緑軸を施軸する。60は見込みに草花昆虫等を描く染付皿で、17世紀後半～末の製品であろうか。62は見込みに草花文を描く染付皿で、見込み文様の余白が大きく17世紀後半～末の製品と考えられる。63は涼州窯系の色絵皿で、いわゆる呉須赤絵である。17世紀前半代のものである。64は陶胎染付の鉢で、内面は蛇ノ目軸刺ぎをする。66は17世紀前半の初期伊万里皿で、破損後に漆によって修理していた痕跡があり、伝世されていた可能性がある。67は17世紀前半の初期伊万里染付鉢である。65は備前焼鉢。68は肥前陶器の刷毛目鉢である。69は型作りの白磁鉢で内面には如意状の文様が陽刺される。「濁し手」の色調を呈し、柿右衛門様式の色絵素地とみられる。70は型作りの白磁瓶で、外



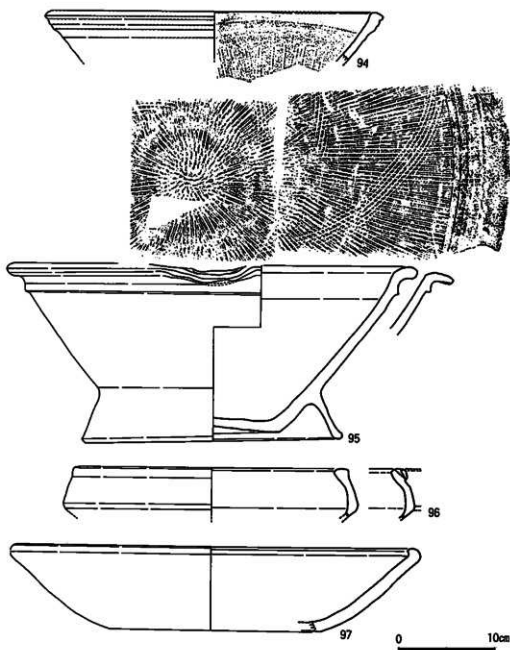
第51图 SK018出土器物实测图1 (1/4)



第52図 SK018出土遺物実測図2 (1/4)

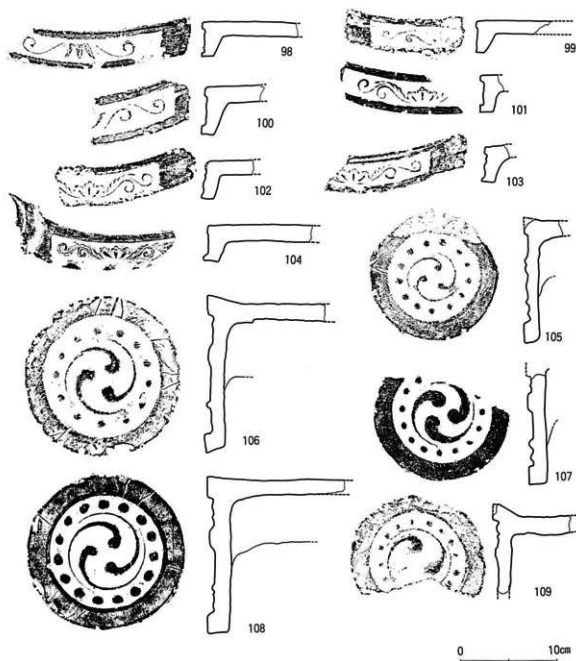


第53図 SK018出土遺物実測図3 (1/4)



第54図 SK018 出土遺物実測図4 (1/4)

面に波状文+花文及び波状文+魚文が陽刻される。71は染付壺で、口縁端部は露胎である。72は青磁の瓶で外面には文様が陽刻される。73・74は染付小壺で、油壺と考えられる。75・76はロクロ成形の土師器皿で、底部に糸切り痕を残す。77は焼塩壺で17世紀代の製品であろう。78-84・88は刷毛目で文様が描かれた肥前陶器でいわゆる二彩手である。78は鉢、79・80・88は瓶、81-84は鉢である。鉢の高台は全て面取りされており、18世紀前半の特徴を示す。87は備前焼水屋甕である。89・90は備前焼と推定される鉢（火容）である。91は内面に鉄軸がかかる肥前陶器摺鉢で、口縁部には片口がつくられている。92は備前焼摺鉢で、乗岡福年近世1期b-cと思われ、内面の摩滅が著しい。93は玉縁の口縁部に鉄軸を施す肥前陶器摺鉢である。94は焼締陶器の摺鉢であるが産地が不明なものである。胎土には白色細粒を多く含む。95は肥前陶器摺鉢で、タタキ成形のものである。胴部下半に



第55図 SK018出土遺物実測図5 (1/4)

大きく踏ん張る形の高台が貼り付けられており、18世紀前半代に比定される。96は土師質土器の焙烙である。口縁部には耳の痕跡が認められる。97は備前焼平鉢である。98～103は軒平瓦である。98は府内城三の丸の軒平瓦C類に類似した桐葉文を中心飾りとするものであるが、唐草が1単位である点などが異なるものである⁽⁶⁾。99・100は府内城三の丸のD類に当てはまるものと思われる。101～103は、府内城三の丸のE類、「府内城系列」の瓦である。104は棧瓦で、中心飾りは府内城三の丸E類に類似するものの、唐草が二重線で表現される点が異なる。105～109は軒丸瓦で、いずれも巴文である。105は珠文13で、瓦当径13cmと小型のものである。106は珠文13で、瓦当径16.2cmである。107は珠文15と推定され、瓦当径は14.2cmである。108は珠文15瓦当径16.4cm。109は珠文16と推定され、瓦当径は14cmである。

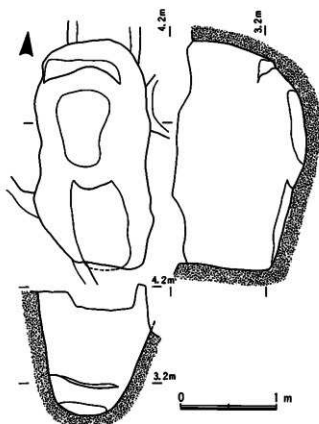
SK022 (第56図)

K-2区で検出された大型の廃棄土坑で、SK060-062、SK031を切って作られている。長軸約2.4m、短軸約1.2m、深さは約1.2mを測る。埋土からは多量の瓦や陶磁器が出土しているが、これらとともに人頭大の円礫も多量に出土した。出土遺物から18世紀中頃に位置づけられる。

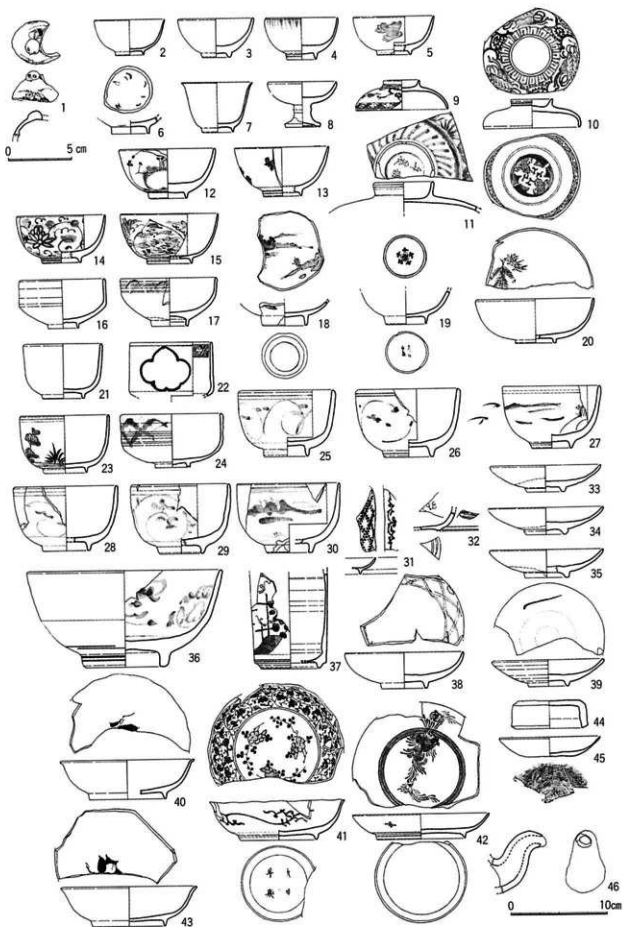
出土遺物(第57図～第59図)

1は色絵烏形水滴である。2は白磁の小碗、3は胎土が灰色の磁器碗で、無文である。4・5は染付碗で、5はコンニャク印判による施文である。6は色絵碗で、外面に呉須による文様があり、内面には上絵付けによる赤色の文様が確認できる。7は、口縁部が外反する白磁碗で、口縁部に口鋳を施す。8は無文の磁器仏飯器。9・10は染付碗の蓋である。10は外面に唐草と宝文を描く。11は染付鉢の蓋で、ツマミ部の内側に「大明年製」の銘を有する。12はいわゆる「くらわんか手」の染付碗である。13・14はコンニャク印判を使用した染付碗で13は鶴文を施文する。14は蓮華文の部分のみ印判で施文し、唐草は手描きによる。15は外面に山水文を描く染付碗。18は見込みに山水文を描く染付碗で17世紀後半のものか。16・17・20・24は京・信楽系の陶器碗である。19は青磁染付碗で、見込には手描きの五弁花が描かれる。21は京焼陶器碗であるが高台内に刻印は認められない。22は色絵素地と考えられる染付碗である。25～30は陶胎染付碗である。31は型打ちの染付小皿で、内面の文様は型紙糊りで施文される。SK105出土品に同一種のものがある(第78図39・40)。32は色絵で、内面の文様のみ赤色で上絵付けされる。33～35は見込を蛇目軸刺ぎする磁器皿で、39のみ簡単な文様が染付される。36は陶胎染付の鉢である。37は、外面に竹垣と蔓草が描かれた染付碗である。38はいわゆる「くらわんか手」の皿である。40・43は同一種と思われる皿で、呉須は思はずく発色している。41は内面に唐草文と枝花文を描く輪花の皿で、高台内に「大明年製」の銘がある。42は内面に貝藻文を描く染付皿で、17世紀後半～末の所産であろう。44は器種不明の土師質土器である。46は陶器土版の注口部で、S字状に湾曲し、18世紀代の特徴を示す。47は17世紀前半の青花芙蓉手皿。48は型打により口縁部が輪花となる染付皿である。49は成形後口縁部を細かく窪ませて輪花にしたもので、内面には花唐草文と風景を描く。50は備前焼碗の口縁部である。51は信楽焼と考えられる陶器四耳壺で外面には黒褐色の釉がかかる。52は内外面鉄軸がかかる肥前陶器の甕である。53は土師質土器の焙烙である。口縁部は大きく外反し胴部外面には指押さえ痕が著しい。蹟岐の御蔵、あるいは備中の大原で生産された焙烙⁷⁾と形態的に類似しており、当該地方から搬入された可能性が高い。54は土師質火消煮壺である。56・57は在地の土師質土器焙烙である。耳の痕跡である穴が見られるが、いずれも貫通しておらず痕跡化している。18世紀前半に位置づけられるものである。58は瓦質土器の火鉢で、脚部には穿孔されている。59・60・62は肥前陶器描鉢である。61は備前もしくは堺の描鉢と推定される。

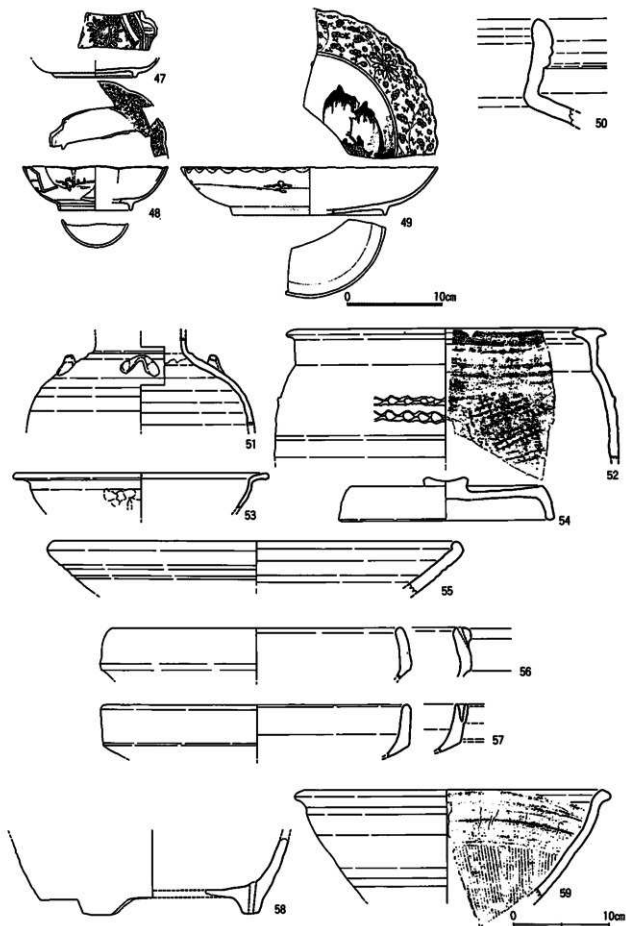
63～65・67・68は軒平瓦である。63は桐葉文の中心飾りが確認でき、17世紀代に遡ると考えられる。64は中心飾りが府内城三の丸におけるE類「府内城系列」の瓦に類似するが、唐草文は通常の唐草であり、異なっている。66は花菱文がスタンプされた土師質の製品であるが、器種は不明である。67・68は府内城三の丸のF類に当たる



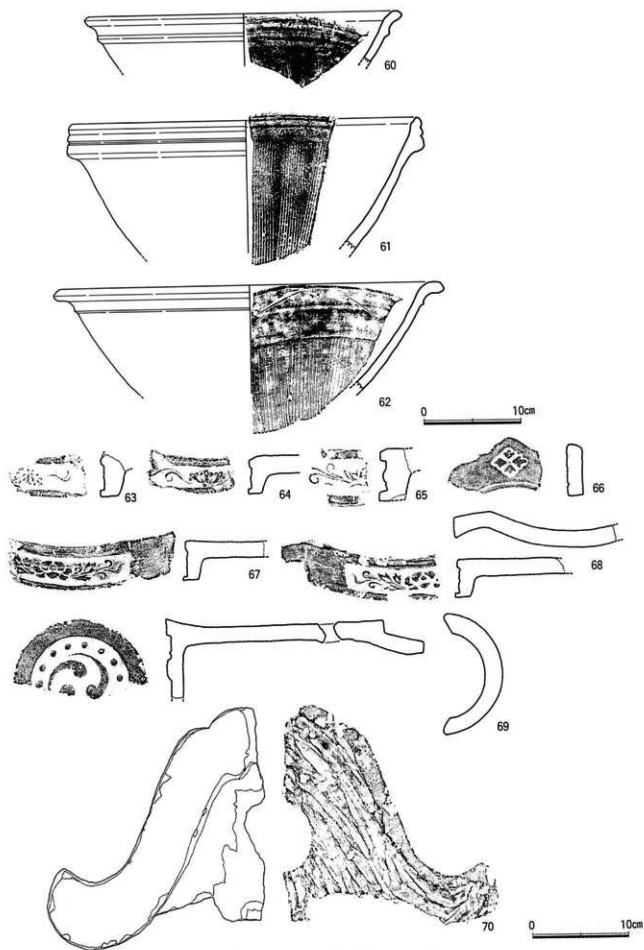
第56図 SK022平面・断面図(1/40)



第57图 SK022出土遺物実測図1 (1:1/3 2~46:1/4)



第58図 SK022出土遺物実測図2 (1/4)



第59図 SK022出土遺物実測図3 (1/4)

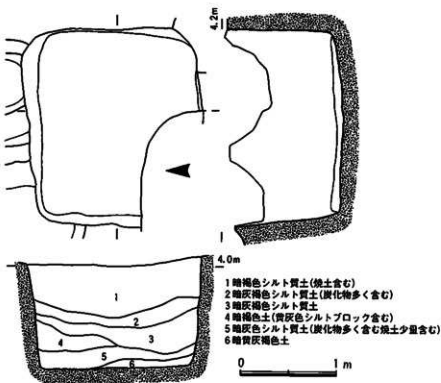
ものであるが中心飾りや唐草の表現が微妙に異なり、分類にないものである。これは府内城三の丸出土品が本瓦であるのに対し67・68が棧瓦であることと関係していると思われる。69は巴文の軒丸瓦で珠文は16～17と推定される。瓦当径は約14cmに復元される。70は鬼瓦で、正面の文様部分が失われている。

SK023 (第60図)

J-2区で検出された方形の廃棄土坑で、長軸約2.1m、短軸1.9m、深さ約1.1mをはかる。SK007によって切られている。埋土の土層観察によれば6層から2層にかけて徐々に埋積した後、多量の土が投入されて(1層)埋め立てられた状況がうかがえる。出土遺物に広東碗が含まれないことから、18世紀後半に位置づけられる。

出土遺物 (第61図～第62図)

1は緑釉のかかる産地不明の陶器で口縁部が輪花となる鉢と考えられるものである。胎土は土師質といってよいほどの軟質である。内面にヘラ描きにより篋状の沈線が施文される。2は遺構検出時に出土した類似の資料で、内面には布目が見られ、内型により成形されたことを示す。外面はケズリによる調整痕が見られる。3は単配形の染付水滴で、裏面には型作りの布目が残る。4は型押しした紅皿、5は染付の紅皿である。6は無文の磁器小碗、7は信楽系陶器の碗である。8は碗の蓋で外面は青磁釉がかかる。9は色絵の小杯で赤色顔料と金彩が外面に上絵付けされる。10はいわゆる小広東碗で外面に梵字を意匠化した文様を描く。18世紀後半に比定される資料である。11はいわゆる「くらわんか手」の碗。12は漳州窯系の青花碗で17世紀前半の所産であることから混入品の可能性もある。13は18世紀前半～中頃に比定される染付碗の蓋である。14は青磁染付碗の蓋である。16は17世紀前半に比定される初期伊万里の皿、17はいわゆる芙蓉手の青花皿で17世紀前半に位置づけられる。18は陶器皿で、外面高台部周辺に鉄釉が薄く塗られている。19は京焼と推定される陶器皿である。白濁し、貫入の著しい釉がかかり、文様はすべて上絵付けされる。20は染付瓶である。21は陶器土瓶注口部で、18世紀中頃～後半台の特徴を示す。22は「口淡伊織」の刻印が押された焼塩壺である。23・25は鉄軸のかかる陶器鉢である。24～31は陶器播鉢である。24・30は福岡産、27は備前もしくは堺産と思われる。26・28・29・31は肥前系の播鉢であり、29・31には高台が貼り付けられている。

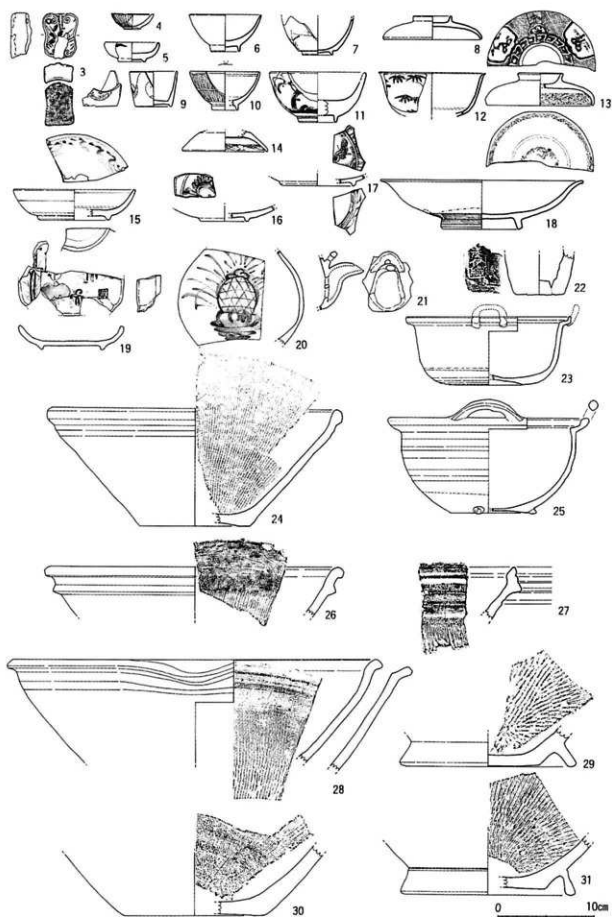


第60図 SK023平面・断面・土層断面図 (1/40)

る。4は型押しした紅皿、5は染付の紅皿である。6は無文の磁器小碗、7は信楽系陶器の碗である。8は碗の蓋で外面は青磁釉がかかる。9は色絵の小杯で赤色顔料と金彩が外面に上絵付けされる。10はいわゆる小広東碗で外面に梵字を意匠化した文様を描く。18世紀後半に比定される資料である。11はいわゆる「くらわんか手」の碗。12は漳州窯系の青花碗で17世紀前半の所産であることから混入品の可能性もある。13は18世紀前半～中頃に比定される染付碗の蓋である。14は青磁染付碗の蓋である。16は17世紀前半に比定される初期伊万里の皿、17はいわゆる芙蓉手の青花皿で17世紀前半に位置づけられる。18は陶器皿で、外面高台部周辺に鉄釉が薄く塗られている。19は京焼と推定される陶器皿である。白濁し、貫入の著しい釉がかかり、文様はすべて上絵付けされる。20は染付瓶である。21は陶器土瓶注口部で、18世紀中頃～後半台の特徴を示す。22は「口淡伊織」の刻印が押された焼塩壺である。23・25は鉄軸のかかる陶器鉢である。24～31は陶器播鉢である。24・30は福岡産、27は備前もしくは堺産と思われる。26・28・29・31は肥前系の播鉢であり、29・31には高台が貼り付けられている。



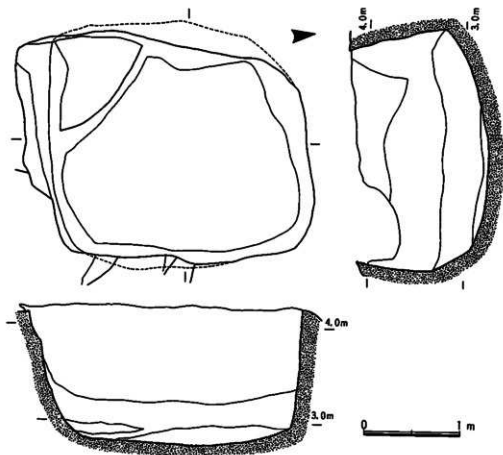
第61図 SK023出土遺物実測図1 (1/4)



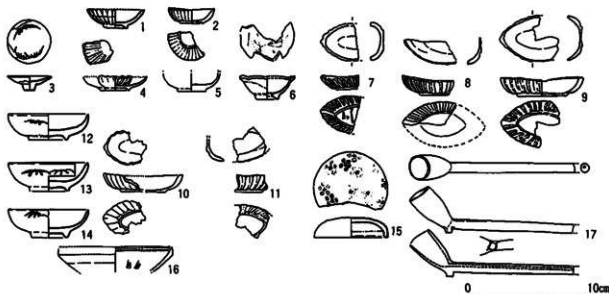
第62図 SK023出土遺物実測図 2 (1/4)

SK044 (第63図)

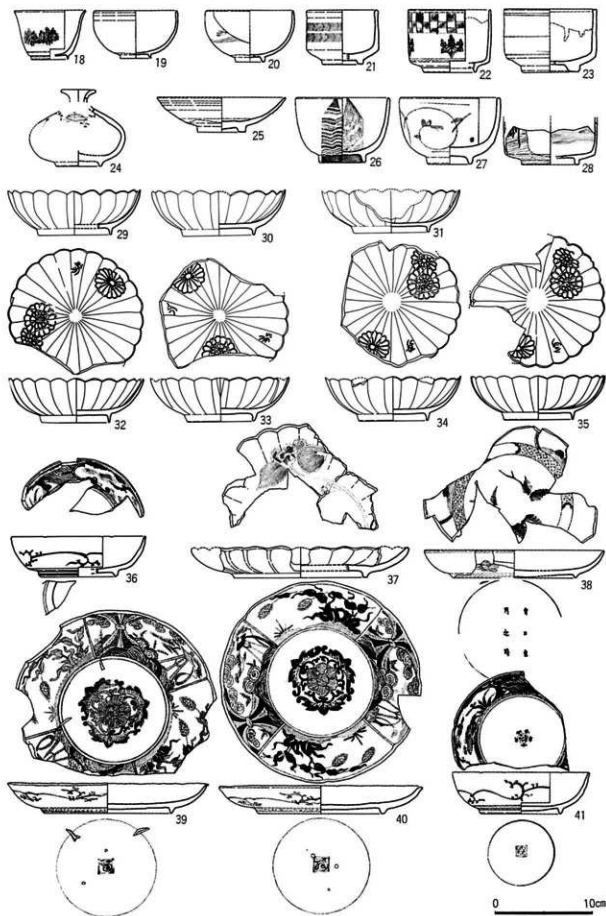
調査区中央のI-2区で検出された。長軸約3.0m、短軸約2.4mの不正方形プランを呈する土坑である。最深部で深さ約1.4mをはかり、壁面はややオーバーハングしている。埋土は多量の炭化物と焼土を含む土であり、火災処理のために一度に埋められた可能性が高いと判断された。埋土中からは多量の瓦および陶磁器が出土しており、陶磁器の中には焼けたものもいくつか認められた。出土遺物からは、18世紀中頃に位置づけられ、寛保の大



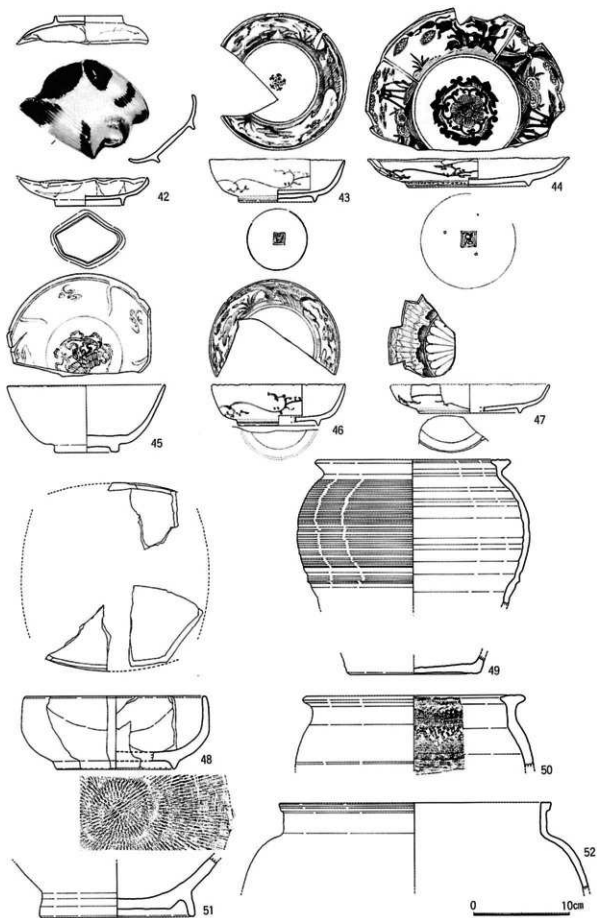
第63図 SK044平面・断面図 (1/40)



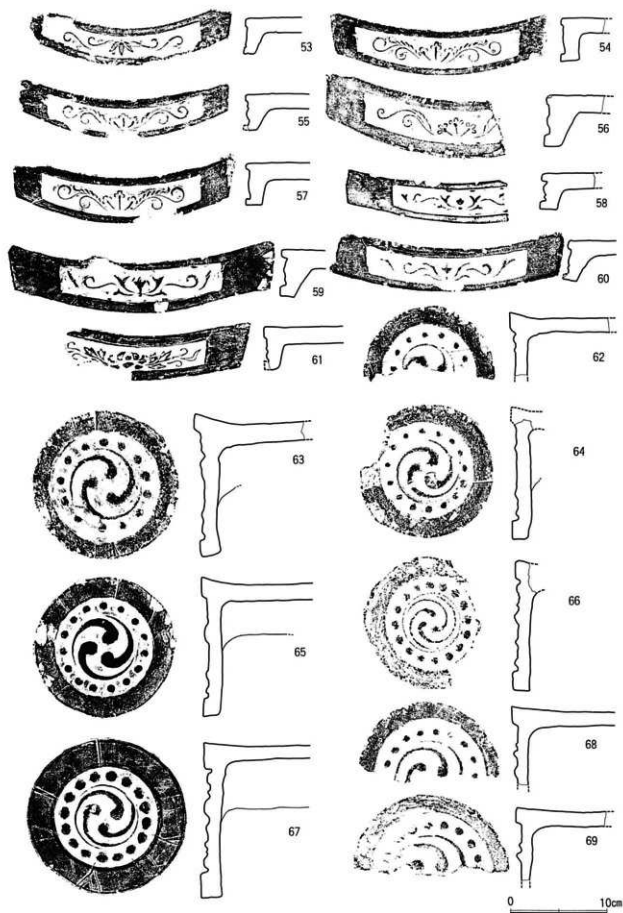
第64図 SK044出土遺物実測図1 (1/3)



第65図 SK044出土遺物実測図 2 (1/4)



第66图 SK044出土遺物実測図3 (1/4)

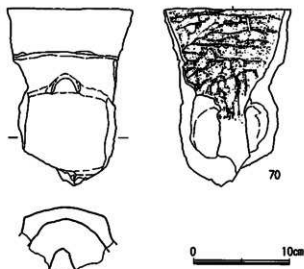


第67図 SK044 出土遺物実測図 4 (1/4)

火(1743年)に伴う火災処理坑である可能性が考えられる。

出土遺物(第64図～第67図)

1・2・4は型押し成形の菊皿である。3は、高台にあたる部分が断面台形のツマミ状に作られた染付皿で、あるいは蓋であるかもしれない。内面には笹葉文が描かれる。5は薄手の小坏状の白磁である。6は口縁部が輪花状になる小坏で、内面には呉須により簡単な文様が描かれる。あるいは飯事道具の一種であるかもしれない。7～11は舟形を呈する型押しの白磁皿で、7の裏面には「三」の字が墨書されている。12～14は染付の紅皿である。15は京焼と推定される陶器合子蓋で、外面には梅花文が上絵付けされている。16はミニチュアの陶器播鉢であり、口縁部外面には鉄釉が



第68図 SK044 出土遺物実測図5(1/4)

施される。飯事道具の可能性もある。17はクレイパイプで、ステム(柄)が途中で折れている。オランダ・ゴータ地方で生産されたものと推定される。江戸や長崎で出土例が報告されているものである。クレイパイプの編年では1730年～40年に位置づけられるものに最も類似する¹⁸⁾。海馬+王冠とみられるヒールマーク¹⁹⁾が確認できる(写真図版8-42)。18はコンニャク印判で桐文を施文した染付碗である。19・20は京・信楽系陶器碗である。21は関西系陶器の筒形碗である。22はコンニャク印判を使用した筒形碗で口縁内面は露胎である。23・27は陶胎染付で、23は香炉である。24は染付油壺で2次の被熱が著しい。25は銅緑釉の掛かる、見込み蛇の目釉刺ぎの肥前陶器皿。26は、肥前陶器の刷毛目碗である。28は赤褐色と黄白色の胎土を使用した、いわゆる「練り上げ手」の碗である。外面には鉄絵が施される。関西系の陶器であろう。29から35は型押しの菊皿で、色絵茶地とも考えられるものである。29～31は無文のもので、32～35は菊花文が陽刻される。各5個体以上が確認されているが、ここには7点のみ図示した。17世紀末～18世紀前半に生産されたものであろう。36・41・43・46は同一種と思われる染付皿で41および43は見込に手描きの五弁花が認められる。高台内に「筒江」銘があり、筒江窯産と判断される。37は型押し成形された京焼と考えられる陶器皿で、貫入の著しい半透明の釉が厚く掛けられ、内面に上絵付けで花文が施文されている。2次的に火を受けているようで文様が失われたり、銅を含む顔料が火によって還元されて、赤銅色に変色している部分もある。38は色絵茶地とも考えられる染付皿で高台内に「奇玉宝鼎之珍」銘が認められる。39・40・44は同一種と考えられる染付皿で、5個体出土しておりこのうち3点を図示した。口縁内面は4分割され、麦穂や松などを描く。高台外面は圓線の間を○×で埋めている。18世紀前半～中頃。42は糸切り細工の鳥形を呈する変形皿である。柴田コレクションに類品が存在し²⁰⁾、1680年～1720年代に位置づけられる。45は中国龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で、見込にはスタンプにより雲鶴文を施文している。12世紀後半に生産されたもので、骨董品として所有されていた可能性も考えられる。47は内面に菊花文と矢羽根文を描く染付皿で、二次的に被熱している。48は方形と考えられる青磁鉢で、口縁部外側面は半月状に面取りされる。49は信楽焼と考えられる陶器蓋で、外面には赤みがかった茶褐色に発色する鉄釉が掛けられる。口縁部上面には凹線が廻る。50は肥前陶器の鉄釉壺、51は同じく播鉢である。52は肥前陶器の二彩手甕である。53～60は軒平瓦である。53は府内城三の丸におけるC類である。54～57はE類で、いわゆる府内城系列の瓦とされるものである。58～60はF系に分類される。61はG類で、棧瓦の可能性もある。62～69は巴文の軒丸瓦である。珠文の数及び瓦当の直径によりいくつかのバリエーションが見られる。62は珠文14個と推定され、瓦当の直径も12.9cmと小型である。63は珠文13、瓦当径15.2cm。64・65は珠文15個で、瓦当径は、それぞれ13.8cm、14.5cm。66は珠文16個、瓦当径13.5cmである。巴文が圓線の内側に

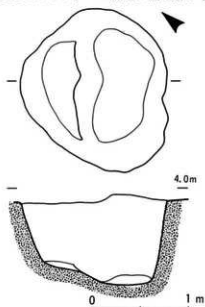
あり、巴文自体も細く他のものと異なっている。年代的に古い特徴を示す。67は珠文16個、瓦当径16.3cm。68・69は珠文16個以上と推定され、瓦当径はそれぞれ14.4cmと15.2cmに復元される。70は鬼瓦で、瓦当は小槌をかたどったものである。瓦当文様の裏面は中割りされ、把手状になっている。

SK052 (第69図)

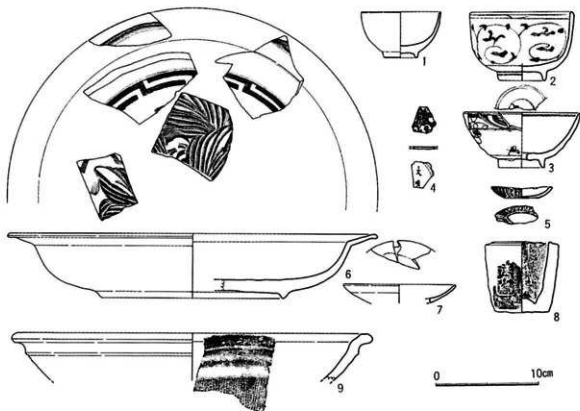
H-1区で検出された廃棄土坑である。長軸1.75m、短軸1.55m、検出面からの深さ0.95mを測る。この遺構は、近世初頭の整地層よりもさらに上層にある整地層中で検出された。先述したように、この付近は整地層が厚く、また遺構の密度が比較的疎の場所であるため、継続的に礎石建物等が建てられていた可能性もある。出土文物から、18世紀前半～中頃に位置づけられる。

出土遺物 (第70図・第71図)

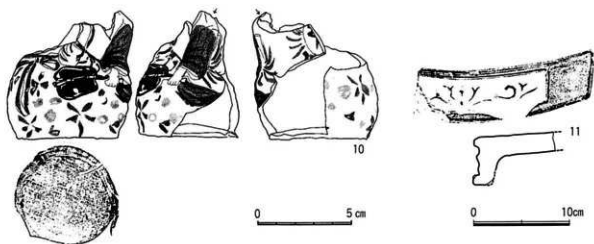
1は肥前染付碗である。2は陶胎染付の碗である。3は漳州窯産の青花碗で17世紀前半のものである。4は青花皿の底部で裏(高台内)には「大明」銘がある。16世紀後半～17世紀前半のもので混入品であろう。5は型打の白磁皿で、SK044でまともに出て出土しているものと同じ舟形の製品である。6は波佐見窯産の青磁大皿で、内面にはヘラ彫りで文様を描く。高台内には鉄釉が塗られており、茶褐色に発色している。1660年代～80年代。2は陶胎染付の碗である。3は漳州窯産の青花碗で17世紀前半～中頃のものである。7は波佐見産の染付皿である。8は焼塩壺で、「□湊伊織」の刻印がある。18世紀前半に位置づけられる。9は肥前陶器の描鉢である。10は色絵磁器人形である。軍配を持つ人物と思われ、型により成形した後、



第69図 SK052平面・断面図 (1/40)



第70図 SK052出土遺物実測図1 (1/4)



第71図 SK052出土遺物実測図2 (1/2・1/4)

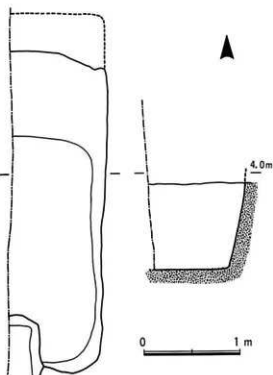
衣装や軍配の部分には上絵付けを施し、染付は使用されない。底部には布目を残す。図中「↓」部分には直径3ミリ程度の穿孔があるため、水滴の可能性もある。17世紀末～18世紀前半の製品であろうか。11は軒平瓦で、府内城三の丸のF類にあたる。

SK057(第72図)

調査区西壁沿いのJ-1/K-1区で検出された大型の廃棄土坑である。遺構の半分以上が調査区外になると考えられ、また、試掘時に上面が底部付近まで掘り下げられているため、本来のプランは明らかでないが、おそらく方形の大型廃棄土坑である。

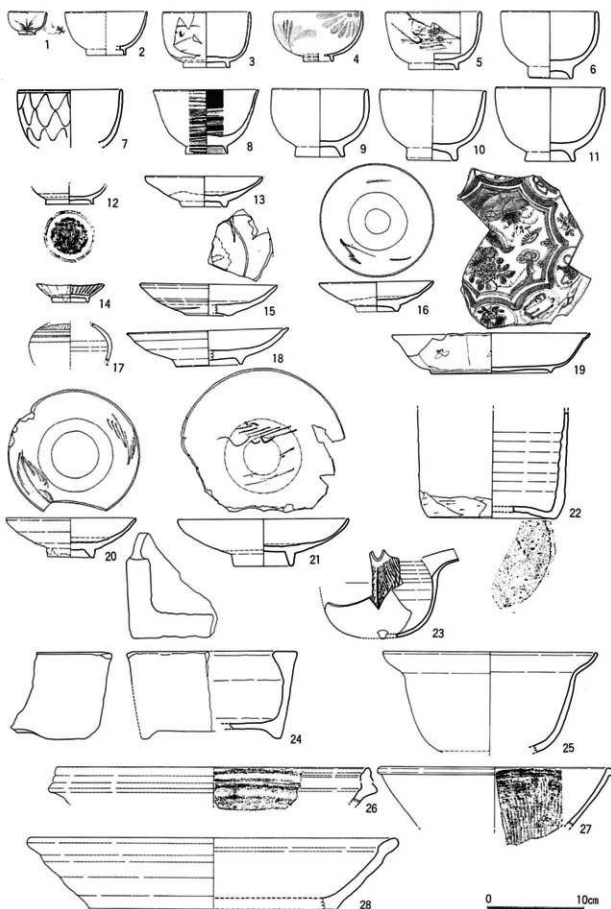
出土遺物 (第73図)

1は染付の飯事道具と考えられる。3・5・12は京焼風陶器碗であり、12の高台内には「清水」の刻印が確認できる。21は京焼風陶器の皿で、見込みを蛇の目輪剥ぎしたものである。4は京・信楽系の陶器碗で、器面に赤と緑の顔料で菊花文を上絵付けしている。6・9～11は「御器手碗」と呼ばれる肥前陶器碗である。13・14・20は見込み蛇の目輪剥ぎの磁器皿で波佐見産のものである。14は型打成形の白磁菊皿である。17は赤絵の磁器小壺で、髹付け油等の油壺として使用されたものと推定される。7は一重網目文の染付碗で1640年代から50年代に製作されたものであり周辺遺構からの混入品と思われる。15・18は砂目積みによる肥前陶器皿で15には鉄絵による松葉文が施文されている。1600

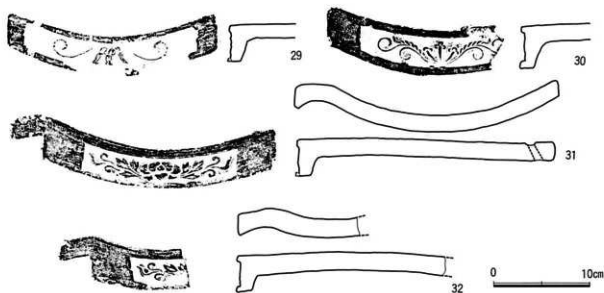


第72図 SK057平面・断面図 (1/40)

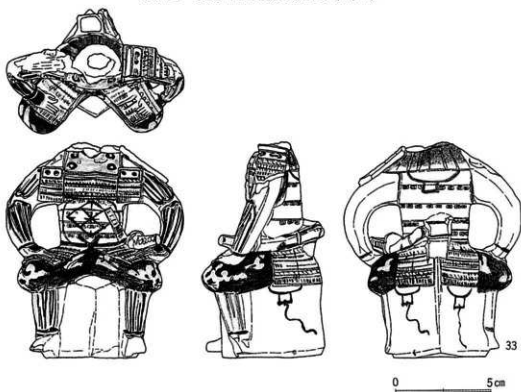
年から1630年代の製品であり混入品と見られる。17は中国製染付皿でいわゆる芙蓉手と称されるカテゴリーに属する。SK057の他、SK007およびSK023から出土した破片が接合した。17世紀前半に製作されたものであり、混入品の可能性がある。22は焼締陶器の瓶（德利）と推定され、備前もしくは丹波焼と考えられる。23は焼締陶器の急須で注口部周辺にへら描きで文様を描く。三足が取り付けられていたと推定される。産地は不明で、中国



第73図 SK057出土遺物実測図1 (1/4)



第74図 SK057出土遺物実測図2 (1/4)



第75図 SK057出土遺物実測図3 (1/2)

産の可能性がある。24は瓦質土器の鉢である。25は陶器鉢で肥前系の陶器である。26は備前もしくは堺産の播鉢、27は玉縁状の口縁を呈するロクロ成形の播鉢で、内外面に鉄軸が掛かる。17世紀代の肥前産であろう。28は備前の焼締陶器鉢で、17世紀前半までのものであるため混入品と考えられる。29～32は軒平瓦である。29は中心飾り桐葉文で1単位の唐草文を有し、SK018出土の第55図18と同類である。30は府内城三ノ丸のE類である。31は棧瓦で、瓦当文様はG類に類似するものであるが、中心飾りの花卉の数や唐草の表現が異なる。33は色絵磁器人形で頭部と甲冑の一部(大袖)を欠失している。型作りで成形され、全て上絵付けで彩色している。生地はいわゆる「濁し手」に類似する白色である。体部の背面には方形の穴があり、旗指物などを取り付けたものであろう。ほぼ同

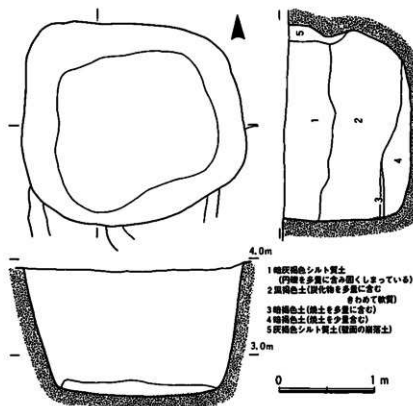
様のものが江戸遺跡においても出土している¹¹⁾。1660～80代に位置づけられる。

SK105(第75図)

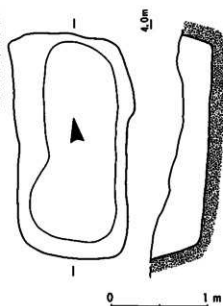
H-2区で検出された、隅丸方形プランを呈する廃棄土坑で、埋土中からは陶磁器・瓦の他、貝殻片や魚骨も出土しており、有機物も多く投棄されたものと考えられる。このため、焼土を多く含む土層も一部に認められるが、火災処理土坑とは考えにくい。埋土最上層の1層はきわめて堅く締まっている。SK056により切られている。出土遺物から18世紀後半、広東碗出現以前の1770年代までに位置づけられる。

出土遺物 (第78図・第79図)

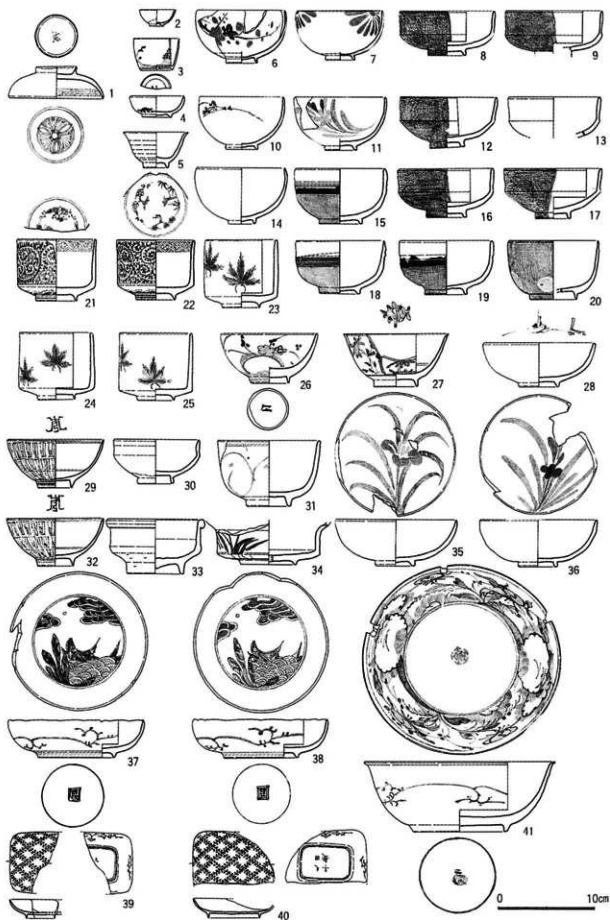
1は青磁染付碗の蓋である。ツマミ内にはやや崩れた渦福を描く。2は白磁小坏で化粧道具かと思われる。3は染付小坏で高台内に「大□年□」銘を有する。内面には鉄分が付着しており、お歯黒用に使用された可能性がある。4は染付紅皿、5は白磁小坏である。10・14・28・30は、京・信楽系の陶器碗である。10は外面に鉄絵を、28は見込に呉須により文様を描く。6・7・11も京・信楽系の陶器碗で、外面に花文を上絵付けにより描く。35・36は京・信楽系陶器の鉢(向付)で、内面に花文を上絵付けにより描いている。8・9・12・16・17は瀬戸・美濃産の陶器碗であり、鉄軸と透明釉を掛け分けている。13も同様の碗であるが鉄軸が掛かった部分の破片である。15・16・19は瀬戸・美濃産の陶器碗で外面の下半部にのみ鉄軸を掛けるいわゆる「腰焼碗」である。21～25は18世紀後半に比定される染付筒形碗で、21・22は外面に蛸唐草、見込に松竹梅を描くもので、23～25は外面に若松文を描く。26はいわゆる「くらわんか手」の染付碗で、高台内に「大明年製」の崩れ銘を描く。27は漳州窯系のもので推定される青花碗で17世紀前半の製品と考えられ、混入品の可能性が高い。29・32はいわゆる「小広東碗」で18世紀後半、1770年代までに位置づけられる。31は肥前の陶胎染付碗、33は肥前陶器香炉で、外面に鉄軸を施す。34は絵唐津向付で、17世紀初頭に位置づけられる。37・38は体部内面のみが青磁となる青磁染付皿で、高台内に



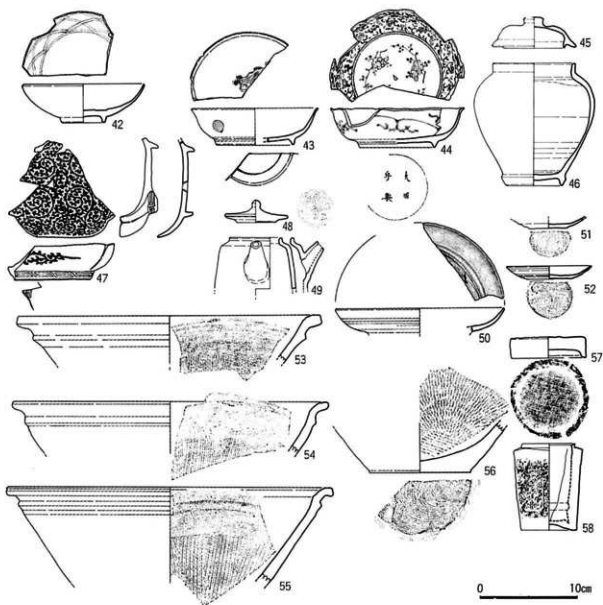
第76図 SK105平面・断面図 (1/40)



第77図 SK056平面・断面図 (1/40)

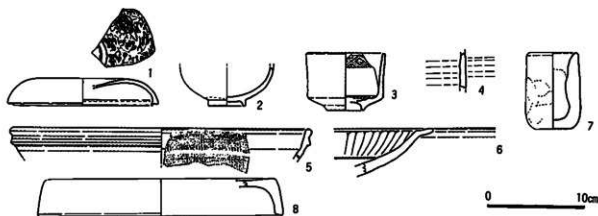


第78图 SK105 出土遺物実測図1 (1/4)



第97図 SK105 出土遺物実測図2 (1/4)

「筒江」銘がある。18世紀後半。39・40は型打の小皿で、口鏤を施し、内面の文様は型紙摺りによる。高台内には「大明年製」銘を描くものである。なお、焼成がやや不良なためか、呉須は黒っぽく発色する。41は大型の染付鉢で、見込みにコンニャク印判による五弁花を捺し、高台内に崩れた「渦福」を描く。18世紀中葉～後半の所産である。42は見込み蛇の目軸刺ぎする染付皿で、波佐見系のもの。44は口縁部が輪花になる皿で、内面に唐草文、見込みに梅花文を描く。高台内に「大明年製」銘を描く。18世紀前半～中葉か。45・46は蓋付きの白磁甕である。47は型打の皿で、内面に鎗唐草文を高台内には「渦福」銘を描いているものと推定される。18世紀前半～中頃の所産である。50は染付皿であるが、内面は圏線以外の部分を呉須により塗りつぶしており、どのような文様かは不明である。17世紀末～18世紀前半の所産であろう。49は外面に鉄軸の施された陶器油差しで、48はその蓋と推定されるものである。福岡産の陶器と推定され、胎土の特徴から高取系の可能性が考えられる。蓋には糸切り痕が見られる。51・52はロクロ成形の土師器皿である。53～55は肥前陶器擂鉢である。底部は出土していないが、高台がつくもので、タタキ成形である。56は底部に糸切り痕を残す焼締陶器擂鉢であり、あるいは17世紀代の肥前陶器擂鉢かもしれない。57・58は焼塩壺及びその蓋である。58の外面には「泉湊伊織」の刻印がみられ、18世紀前半～中頃の所産である。



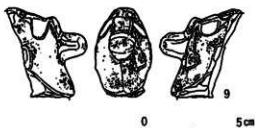
第80図 SK056出土遺物実測図1 (1/4)

SK056 (第77図)

H-2区で検出された廃棄土坑で、SK105を切って掘り込まれている。長軸約2.3m、短軸約1.2m、最大深約0.5mをはかる。出土遺物から、SK105と時間的に差のない時期に埋積した可能性が高く、18世紀後半の1770年代までに位置づけられる。

出土遺物(第80図・第81図)

1は染付蓋物の蓋で、18世紀前半の所産である。2は京・信楽系の陶器碗、3は青磁染付の筒形碗で18世紀後半に位置づけられる。4はベトナム産と考えられる焼締陶器長胴瓶の胴部破片であり、SX038出土のものと同一個体である可能性が高い。7は焼塩壺で、形態から17世紀後半の所産と思われる。5は産地不明の陶器鉢で、内外面に鉄軸がかかるが、焼成が不良なためか十分融解していない。胎土はスの多い緻密さに欠けるものである。6は青磁大皿で、17世紀後半の所産である。8は土師質の火消壺蓋と考えられる。9は色絵磁器人形の後頭部破片である。二次的被熱のため髪の部分に上絵付けされていた黒色の顔料が失われ、斑状に残るのみである。髪形は髻を結っているが、頭頂部には黒色顔料が塗られていなかったと思われる部分が見られることから男性の人形と考えられ、「若衆」人形と思われる¹²⁾。いわゆる柿右衛門様式の人形で1660～80年代に位置づけられる。



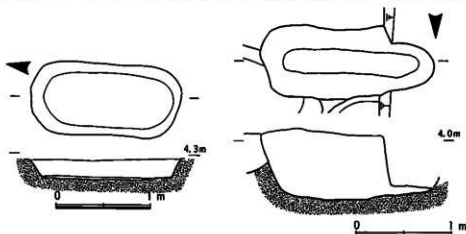
第81図 SK056出土遺物実測図2 (1/2)

SK013 (第82図)

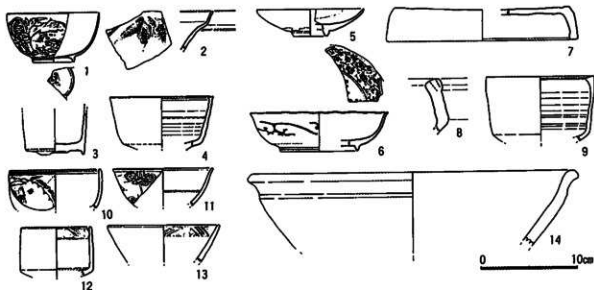
J-2区で検出された廃棄土坑で、SK022・SK023を切って掘り込まれている。長軸1.6m、0.75m、最大深0.22mの浅いものである。18世紀後半に位置づけられる。

出土遺物(第84図1～8)

1は18世紀前半～中頃に製作された染付碗で高台内には「渦福」銘を有する。2は京焼風陶器の鉢である。3は瑠璃釉の磁器香炉で、外面には金彩が施されていた痕跡が認められる。4は青磁香炉である。5は



第82図 SK013平面・断面図 (1/40) 第83図 SK014平面・断面図 (1/40)



第84図 SK013・SK014 出土遺物実測図 (1/4、1～8:SK013、9～14:SK014)

見込み蛇目軸刺ぎの皿で波佐見産、6は内面に唐草文を描く染付皿で、18世紀前半～中頃の所産。7は土師質土器火消壺の蓋である。

SK014 (第83図)

K-1区で検出された廃棄土坑で、長軸約1.85m、短軸約0.75m、深さ約0.7mをはかる。SK008とSK002に切られている。18世紀後半に位置づけられる。

出土遺物 (第84図9～14)

9は青磁香炉である。10は染付丸碗で、18世紀後半の所産。11は漳州窯産の青花碗と考えられるもので、外面にペンシルドローイング技法により施文されており、17世紀前半の所産と思われる。12・13は青磁染付で、18世紀後半の所産である。14は肥前陶器鉢鉢である。

SK043 (第85図)

SK018の底面で検出された遺構で、長軸1.6m、短軸0.9mであるが深さ0.3m程度しか残存していなかった。出土遺物はきわめて僅少であるが、陶胎染付があることから、17世紀末～18世紀前半のものと推定される。

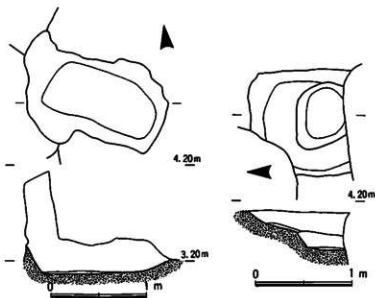
出土遺物 (第90図、1・2)

1は胎土目積みの肥前陶器皿である。

2は陶胎染付の碗である。

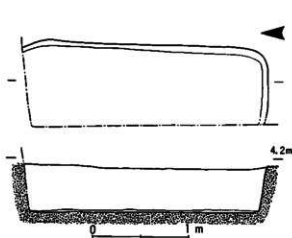
SK048 (第86図)

J-2区で検出された土坑で、長軸1.1m + α、短軸1.0m、深さ0.4mを測る。最深部は一段深くなっていた。SK015・SK023に切られている。出土遺物は僅少であるがSK023に切られていることから18世紀後半以降の所産であり、18世紀末



第85図 SK043
平面・断面図 (1/40)

第86図 SK048
平面・断面図 (1/40)

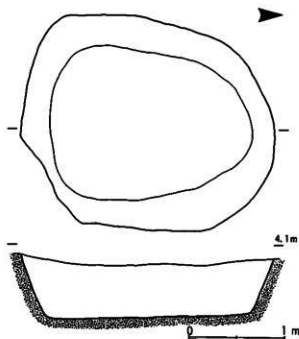


第87図 SK072平面・断面図 (1/40)

以降である可能性もある。

出土遺物 (第90図 3・4)

3は肥前陶器播鉢、4は染付皿で17世紀末～18世紀前半である。



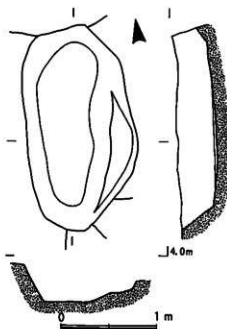
第88図 SK080平面・断面図 (1/40)

SK072 (第87図)

調査区北端部のD-1区で検出された土坑で調査区壁面沿いのため全形は不明であるが、長軸2.6m、短軸0.85m、深さ0.5mをはかる。出土遺物から、18世紀後半に位置づけられる。

出土遺物 (第91図)

1は白磁紅皿、2は染付紅皿である。4・6は京・信楽系陶器碗である。5はいわゆる「くらわんか手」の染付碗である。7は体部外面下半部に鑿跡のようなケズリが見られ、鉄軸が掛かる。京・信楽系の陶器か。8は18世紀前半～中頃の染付碗、9は内面に蛸唐草を描く染付碗で18世紀後半の所産である。11・12は肥前陶器播鉢で18世紀後半の特徴を有する。10は京焼風陶器鉢である。13は巴文の軒九瓦で、瓦当径14cm、珠文は18個以上と推定される。



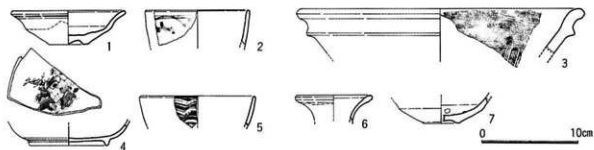
第89図 SK100平面・断面図 (1/40)

SK080 (第88図)

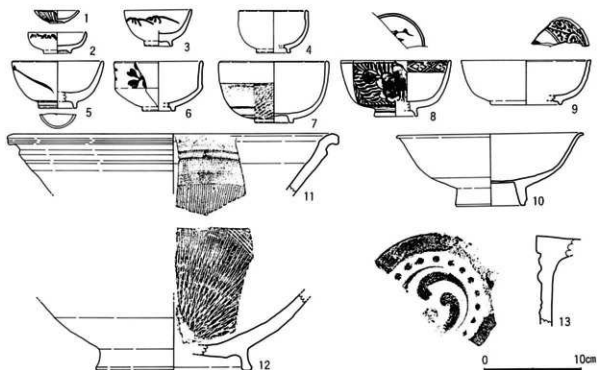
E-1区で検出された廃棄土坑である。建物基礎SF073およびこれに伴う整地層 (第21図5層) の下層で検出された。SE064に切られている。出土遺物は僅少であるが概ね18世紀前半までに収まるものと考えられる。

出土遺物 (第92図)

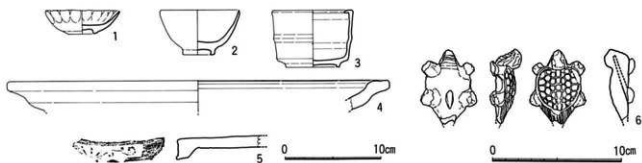
1は青磁菊皿で、17世紀前半の初期伊万里である。2は無文の磁器碗で、18世紀前半のものと思われる。3は青磁香炉で高台内には鉄軸が施される。17世紀後半から18世紀初頭の製品である。4は備前焼平鉢で17世紀前半以前のものである。5は軒平瓦で、府内城三ノ丸遺跡のD類にあたり、17世紀代のものである。6は土人形で亀をかたどっている。腹面から頭部にかけて穿孔されており、軸を通そうになっている。



第90図 SK043・SK048・SK100出土遺物実測図 (1/4)



第91図 SK072出土遺物実測図 (1/4)



第92図 SK080出土遺物実測図 (1～5:1/4・6:1/3)

SK100 (第89図)

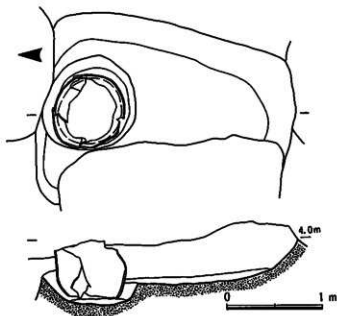
G-2区で検出された土坑である。SE064に切られており、SK091・SK110を切っている。出土遺物は僅少であるが、出土遺物中最も新しい遺物により、17世紀末から18世紀前半に位置づけられる。

出土遺物 (第90図5～7)

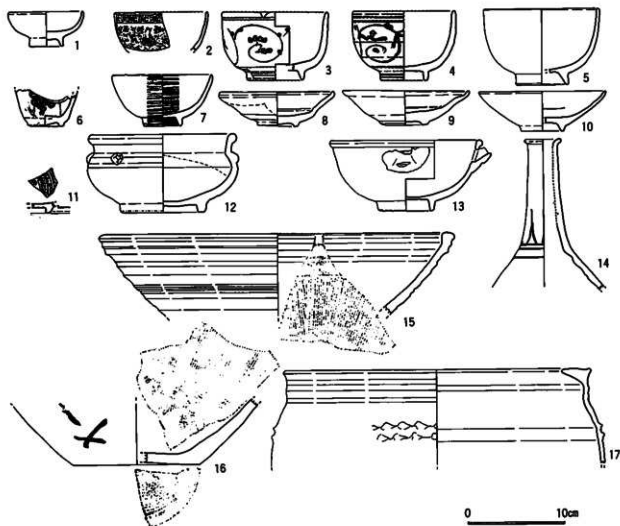
5は肥前陶器の刷毛目碗である。6は緑褐色釉の掛かる陶器瓶?で、朝鮮王朝産陶器舟徳利の可能性が考えられる。7は胎土目模みの唐津皿である。

SX031 (第93図)

K-2区で検出された、長軸約2.7m、短軸2.0m + αの略方形を呈する土坑である。その底部の一端には直径約1.0mの土坑があり、瓦質の大甕が埋設されていた。この甕は、方形の土坑と切り合い関係にあるものではなく、これに伴うものと判断されるが、底部が無く、廃絶時に破壊されたものである可能性も高いため、遺構全体としてどのような機能であったのかは不明である。出土遺物より18世紀前半代に位置づけられる。



第93図 SX031平面・断面図 (1/40)



第94図 SX031出土遺物実測図1 (1/4)

出土遺物 (第94図)

1は白磁皿である。2は外面に牡丹唐草文を描く染付碗で17世紀末～18世紀前半。3・4は陶胎染付の碗で17世紀末～18世紀前半の所産である。5は肥前陶器碗。6は初期伊万里の小坏で、外面に花文を描く。高台には多数の砂が付着している。1620年～1630年代。7は肥前陶器の刷毛目碗。8・9は肥前陶器皿で、内面に砂目積み痕を残す。1600年～1630年代。11は青花皿の底部である。整地層等からの混入品であろう。12は青磁香炉で口縁部下に貼り付け文がある。13は陶器片1鉢である。14は染付瓶。15は焼締陶器の搦鉢で、産地は不明である。16は焼締陶器の搦鉢で、底部には糸切り痕を残す。底部近くに「大」字の墨書がある。ロクロ成形による17世紀代の肥前陶器搦鉢の可能性もある。17は鉄軸の掛かる肥前陶器の甕で、肩部に突帯が貼り付けられるものである。口縁部の特徴から17世紀後半代に位置づけられる。18は土師質土器の埋甕から出土した軒平瓦で、瓦当幅19.6cmと小型のものである。中心飾りは府内城三の丸E類(いわゆる府内城系列瓦)に類似するものであるが、唐草文はE類とは異なり、通常の唐草文である。



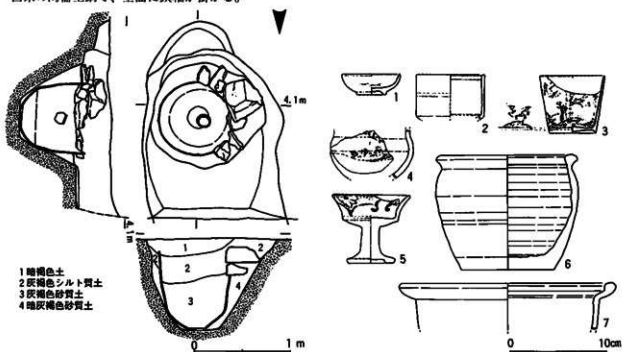
第95図 SX031出土遺物実測図 2 (1/4)

SK083 (第96図)

F-2区で検出された、瓦質大甕を埋設した遺構である。埋設された大甕は口縁部が欠損しているが、欠損の大きい部分にはこれを補うように石が積まれている。SE064に隣接する位置にあり、焼締時期も類似していることから、井戸にともなう水留等の機能が考えられる。なお、底部が抜かれているが、廃絶し埋め戻される際、抜かれたのであろうか。また、甕の中に小型の陶器壺が埋置されていた。出土遺物から18世紀後半～末に位置づけられる。

出土遺物 (第97図)

1は染付紅皿、2は染付筒形碗である。18世紀後半～末の所産であろう。3は染付の蕎麦猪口で18世紀前半代の製品であろう。4は陶器の甕もしくは鉢と思われ、胴部下半は露胎である。上絵付けにより文様が描かれており、京・信楽系と思われる。6は陶器の甕で、内外面に褐釉が施されている。福岡系の製品と考えられる。7は関西系の陶器土鍋で、全面に鉄軸が掛かる。



第96図 SX083平面・断面図 (1/40)

第97図 SX083出土遺物実測図 (1/4)

③近世3期の遺構と遺物

SF073 (第99図、土層:第21図)

F-1区からG-1区、H-1区にかけて検出された石組み遺構であり、建物の基礎部分と考えられるものである。石は主として角礫が使用されており、この遺構に伴うと考えられる整地層(第21図:第5層)上面に埋置されていた。石を埋置するにあたって溝が掘られているようで、西壁の土層断面観察の際、辛うじて確認できた。石組みは西側調査区外へ延びており全体の規模は不明であるが、その一辺は、約6.3mを測り、およそ3間半に相当する。石組みの中央付近に石の無い部分があるが、ちょうど同じ位置に近代以降の擾乱があるため、本来石が組まれていなかったかどうかは不明である。石組みに伴うと考えられる整地層から出土した遺物には染付広東碗が含まれているため、石組みが築造されたのは18世紀末～19世紀初頭以降と考えられる。この遺構の周辺は繰り返し整地されており、廃棄土坑などの遺構分布も疎であることから継続的に礎石建物等が営まれていた空間であったことが考えられる。

出土遺物 (第101図)

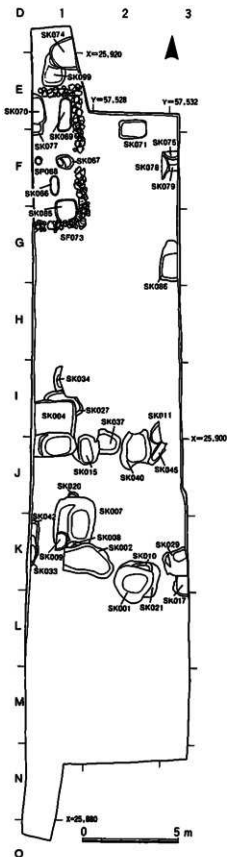
SF073に伴うと考えられる整地層から出土した遺物である。1は染付広東碗である。2は見込蛇目軸刺ぎする磁器皿、3は備前焼の盤で、17世紀前半以前のものであろう。4は陶器搥鉢で、内外面に鉄軸が施される。17世紀代の肥前産と思われる。

SK004 (第100図)

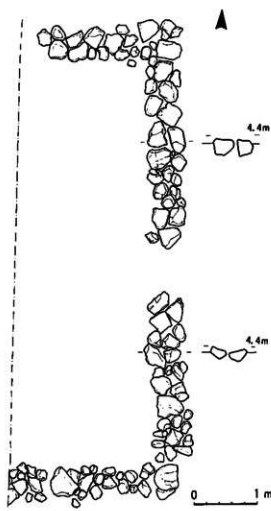
I-1区で検出された大型の廃棄土坑で、長軸約3.0m、短軸約2.2m + αをはかる。遺構の南半が特に深くっており、この落ち込み部分は本来別の遺構であった可能性が高い。南北方向での半截を行わなかったため明確に確認できていないが、掘り下げの途中にこの落ち込みが検出されなかったことから、落ち込みの方がより古い遺構であると考えられる。出土遺物の組成からも、18世紀後半と19世紀前半～中頃の遺構が重複している可能性が高いことを示す。

出土遺物 (第102図～第104図)

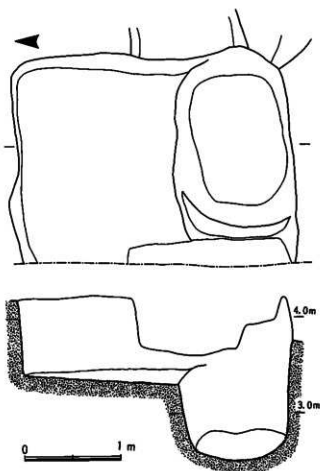
1～3は紅皿で、1は型打ちの白磁、2・3は染付である。4は白磁小坏。5は圈線のみ施文する染付小坏である。6は外面に笹文を描く染付小碗。7は外面に桐文を描く染付碗である。8・13はいわゆる「くらわんか手」の碗で13は高台内に「大明年製」の崩れ銘を描く。15はおそらく広東碗の蓋である。16は染付蓋物の蓋である。9は色絵碗で18世紀前半～中頃の所産であらう。10～12は信楽系陶器碗で、10は18世紀後半、11・12は19世紀前半の所産である。20は見込にコンニャク印判の五弁花を描く染付碗で、18世紀後半の所産であらう。21は平面形が八角形を呈すると推定される筒形の碗で、



第98図 近世3期遺構配置図 (1/200)

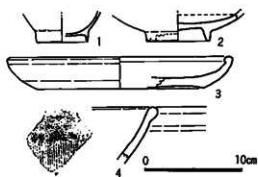


第99図 SF073平面図 (1/60)

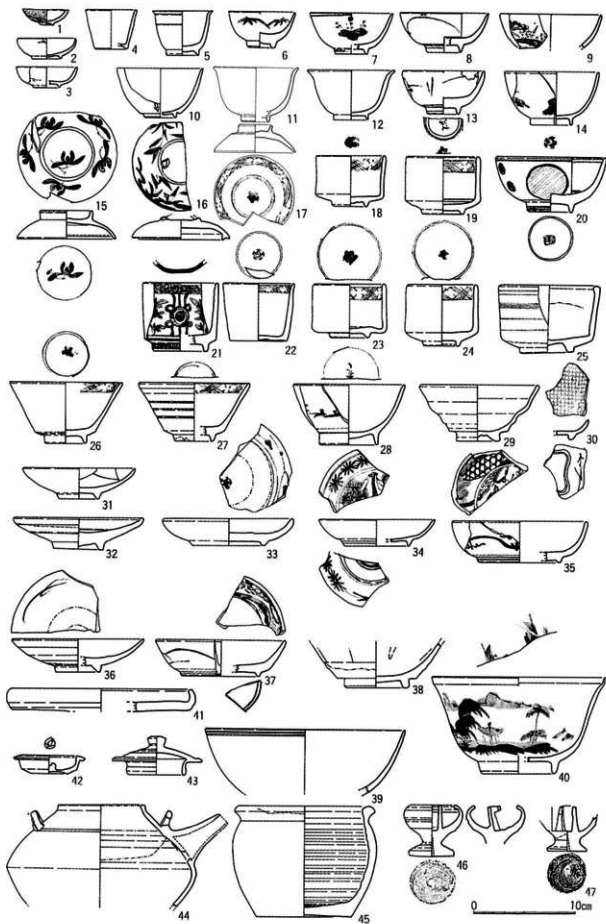


第100図 SK004平面・断面図 (1/40)

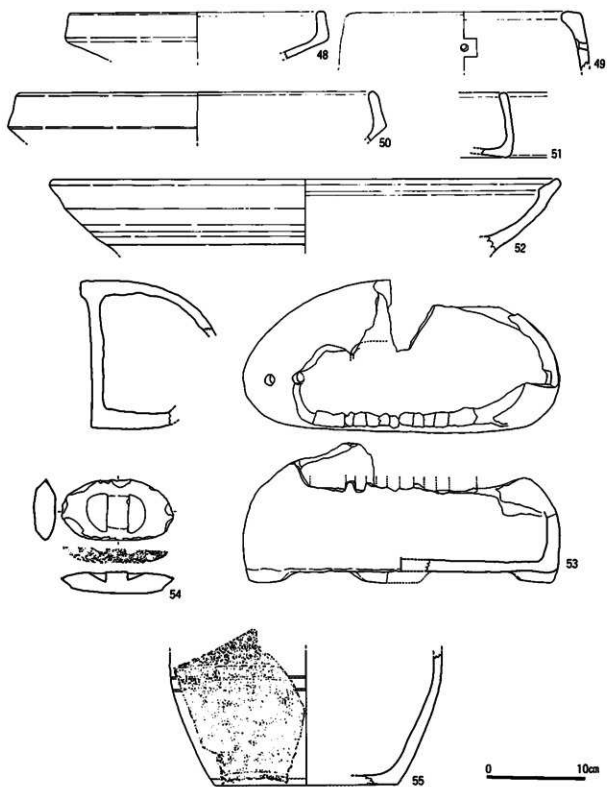
口縁部には口鋳を施す。19世紀前半の製品か。17～19、22～24、26・27は青磁染付で18世紀後半の製品である。22は蛇ノ口門形高台の蕎麦猪口、17は26・27の碗に伴う蓋であろう。25は陶胎染付香炉である。28は染付広東碗である。29は天目形を呈する萩焼の陶器碗で、高台部以外に薬灰軸が掛かる。30は17世紀末～18世紀初頭の製品で型紙摺りの手塩皿。31・33、36は見込み蛇ノ目軸刺ぎの磁器皿。34は16世紀後半の青花で、SD004と切り合っているSD201からの混入品かと思われる。35は18世紀前半～中頃の染付皿。37は18世紀後半の染付皿。38は萩焼の陶器鉢で高台部を除いて薬灰軸が掛かる。39は中国産と思われる青磁碗で、混入品の可能性もある。40は19世紀前半以降の染付鉢で、焼継ぎが認められる。焼継ぎ文字の痕跡があるが、判読できなかった。41は備前焼の盤で17世紀前半以前の所産であろう。42～44は関西系陶器の土版およびその蓋である。45は内・外面に褐釉の掛かる陶器壺で、福岡産か。46・47は底部以外に鉄軸の掛かる陶器灯火具、ひょうそくである。底部には糸切り痕を残す。肥前または福岡産と推定される。48・50は土師質土器焙烙、49は瓦質の坩堝である。51・52は備前焼で、51は火容、52は平鉢である。52は17世紀代の製品であり、混入品の可能性が高いと見られる。53は、瓦質土器の行火と考えられる。楕円形の器形で、前面には格子状のすかしが見られる。楕円形の蓋がつくようで、54がこれにあたる可能性が高い。54は縁の部分に輪違い文状の刻印



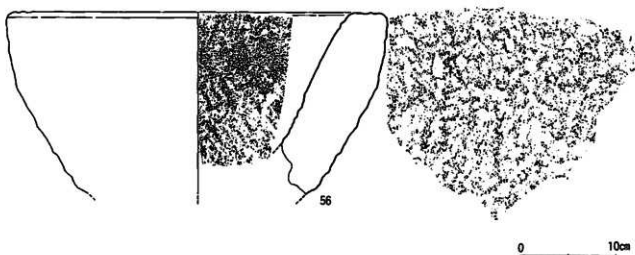
第101図 SF073整地層出土遺物実測図 (1/4)



第102図 SK004出土遺物実測図1 (1/4)



第103図 SK004出土遺物実測図2 (1/4)



第104図 SK004出土遺物実測図3 (1/4)

が見られる。55は、瓦質の火鉢と推定され、胴部には亀甲状の文様が陽刻される。56は石製の手水鉢で、鑿による成形の後、口縁部の内面は研磨されている。

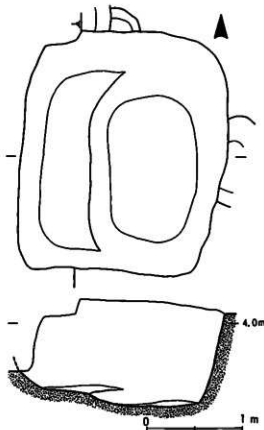
SK007 (第105図)

J-1区で検出された大型の廃棄土坑である。長軸約2.5m、短軸約2.3mの方形プランで、深さ約1.1mをはかる。東半がやや深くなっているが、掘り返しは確認できなかった。SK023、SK019、SK020、SK061、SK062等を切って掘り込まれている。

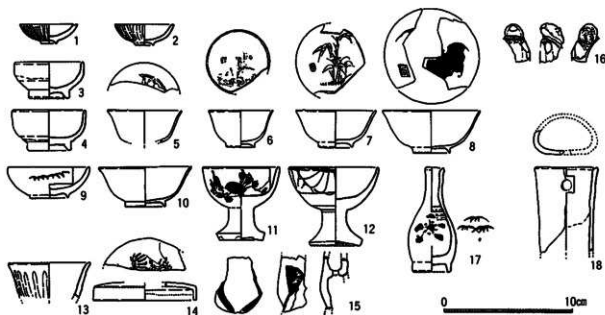
焼酎を有するものを含む多量の陶磁器の他、日常生活で使用する坩堝等の瓦質土器類も多数出土している。SK023を切って掘り込まれていることから、18世紀後半以前に位置づけられる遺物も多く含まれるが、染付端反碗が出土していることから、遺構の年代は19世紀前半～中頃に比定できよう。なお、瀬戸・美濃産の染付は出土していない。

出土遺物 (第106図～第111図)

1・2は白磁紅里である。3・4は陶器小皿で、灰軸が掛けられており、瀬戸・美濃産と推定される。5～8・10はいわゆる「薄手酒杯」で5～8は上絵付けにより内面に文様が描かれている。5は口縁部に金泥が施される。8は銅粉を含む顔料を使用して蝙蝠文を描いている。11・12は染付仏飯器。13は、外面に鎗状のヘラ彫りを有する小坏で、17世紀前半の初期伊万里で、混入品と思われる。14は、京・信楽系陶器の合子蓋で、文様は鉄絵と呉須による。15は赤の顔料で上絵付けされた色絵磁器の水注と思われる。18は磁器掛け花入れで鉄軸がかかる。19～22は染付碗の蓋である。19は外面に蛸唐草文を描き、ツمام内には「乾」を描く。20～22は、端反碗の蓋で、35と組み合わせるものである。23～27は19世紀前半～中頃に比定される筒丸碗である。28～30は、信楽系の陶器碗で

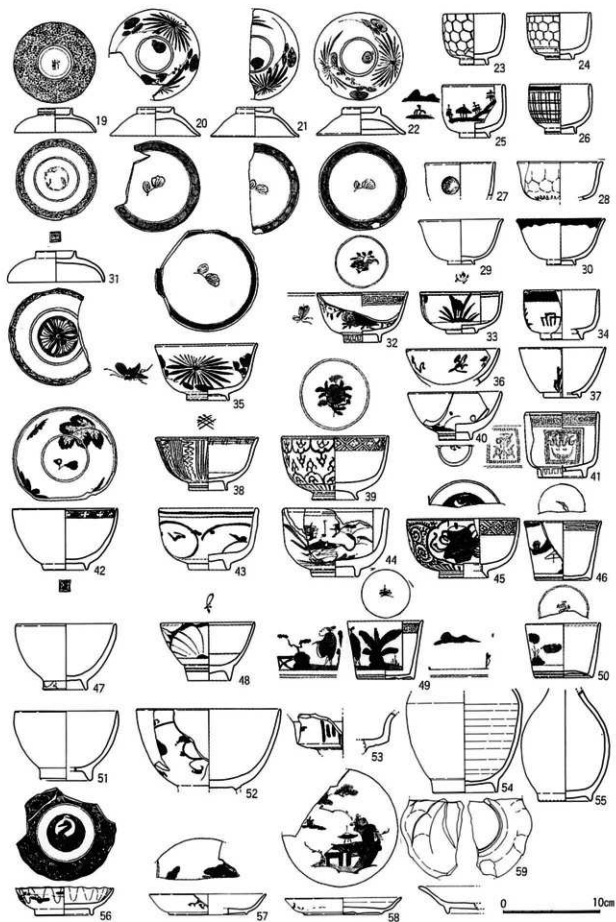


第105図 SK007平面・断面図 (1/40)

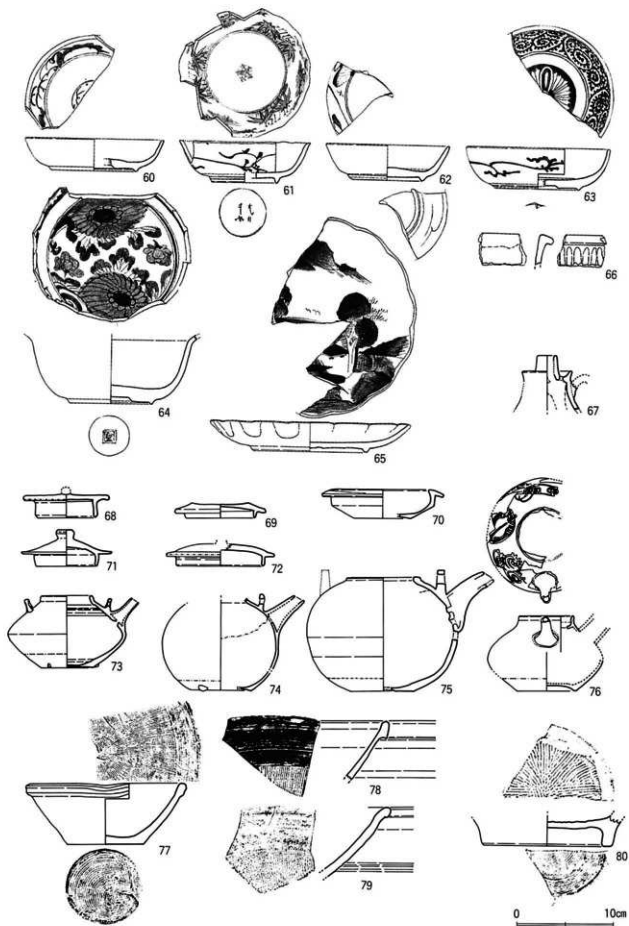


第106図 SK007出土遺物実測図1 (1/3)

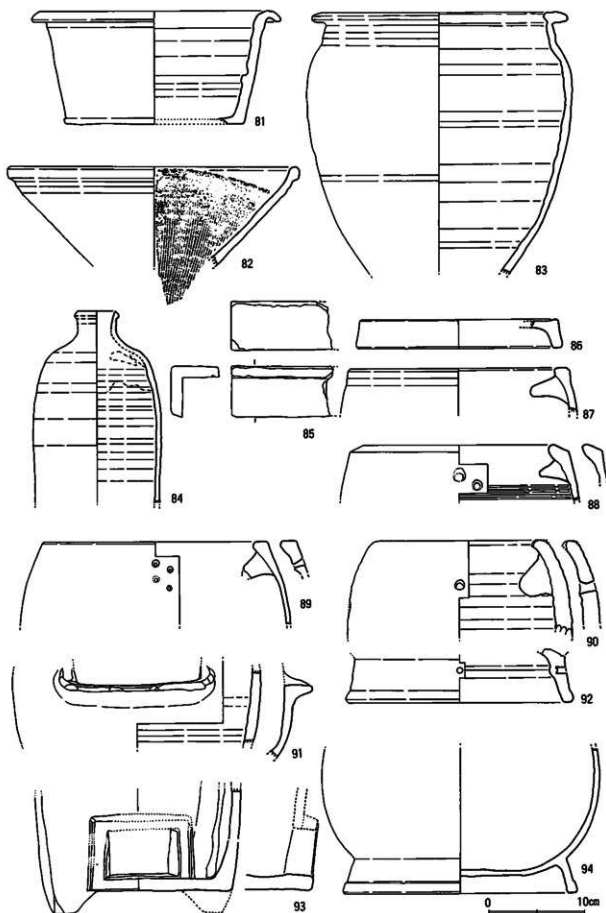
ある。28は、器表面に亀甲状の陽刻が施され、体部の下半には鋳状の沈線が彫り込まれる。29は無文、30は口縁部内外面に銅緑釉を掛けるものである。32は染付端反碗で外面には唐草文等の他、軍配を描く。36は「お笹紅」と判読できる文字が外面に呉須で描かれており、文化・文政年間に流行した「笹紅」の紅緒口である。39は外面に簡略化された輪花繁文を描く染付碗で、蓋がつくものと思われる。製作年代は、18世紀中頃に比定される。文様は異なるが、45もこれに類似する器形の染付碗である。41はペンシルドローイング技法により施文された染付筒形碗で、外面に盾状の文様が描かれる。19世紀前半～中頃の製品であろう。42は青磁染付碗で、高台内に「過福」を描く。43・44は陶胎染付碗。47・51は黒褐色の釉が施された陶器碗で、見込に4箇所目の跡が残る。器形は42のような青磁染付碗に類似する。福岡産と思われる。46・49・50は蛇ノ目凹形高台の蕎麦猪口で18世紀末以降の製品と考えられる。53は絵唐津の向付で混入品であろう。54は無文の磁器瓶で、波佐見系の製品であろう。55は陶器瓶で胎土・輪調が29と類似しており、倡楽系の製品と思われる。56は型打の皿で、内面に墨弾き技法により松竹梅と亀を描き、見込には鶴を描くものである。57・58は同一種と思われる染付皿で、蛇ノ目凹形高台である。18世紀後半以降の製品であろう。59は型打の白磁皿で、口縁部は輪花となり、内面にも文様が陽刻される。17世紀後半から18世紀前半の製品と思われる。60・63・65は蛇ノ目凹形高台の染付皿で、63は高台内に「過福」を描く。61は内面文様の一部（笹文）と見込の五弁花をコンチャク印判により施文した染付碗で、高台内に「大明年製」銘を有する。64は蛇ノ目凹形高台を有する青磁染付の鉢で、高台内に「簡江」銘を描く。18世紀後半～末の製品であろう。66は銅緑釉の掛かる陶器鉢で、外面には鋳状のヘラ彫りが施される。瀬戸・美濃産と推定される。67は鉄釉がかかる陶器油徳利で福岡産と思われる。68～72は関西系陶器土瓶の蓋、73～76は関西系陶器土瓶である。76はきわめて薄手の作りで、外面にイッチン掛けにより宝尽くし文を描く。77は小型の焼締陶器指鉢で、底部に糸切り痕を残す。九州産のものであろうか。78は福岡産、79は肥前産、80は産地不明の指鉢で、鉄釉が内外面に掛かる。80は底部糸切りの後、高台を貼り付けているのがわかる。81は瓦質土器の鉢で植木鉢の可能性もある。82は福岡産陶器指鉢、83は同じく甕である。84は外面に黄緑色に発色する灰釉が掛かった陶器瓶で、瀬戸・美濃産のいわゆる「貧乏徳利」である。85は用途不明の土製品で、建築材料ではないかと思われる。86は土質瓦器火消壺の蓋である。87～90は瓦質土器瓶で、91はこの焚き口部、92・94・95はこれらの底部である。府内城三ノ丸の焔炉a¹³にあたる。93・99～102は府内城三ノ丸の焔炉b¹⁴にあたる二重構造の瓦質焔炉で、96・103がこれ



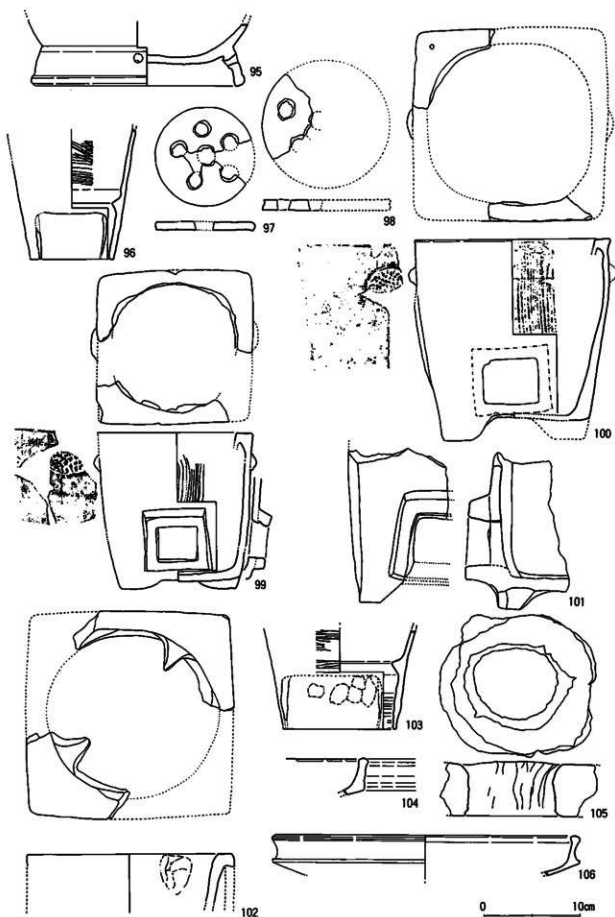
第107图 SK007出土遗物实测图2 (1/4)



第108图 SK007出土文物实测图3 (1/4)



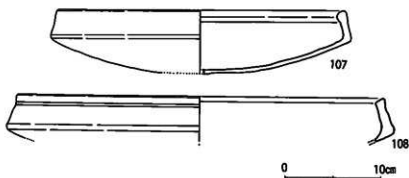
第109图 SK007出土文物实测图4 (1/4)



第110図 SK007出土遺物実測図5 (1/4)

らの内側につく筒状の部分、97・98はこれらに伴う中敷き（いわゆる「サナ」）である。104・106～108は土師質土器の焙烙である。105は瓦質の土製品で輪状になるものと思われるが、外側が失われており器種不明である。

この他焼継文字を有する陶磁器が3点出土している（第135図）



SK015（第112図）

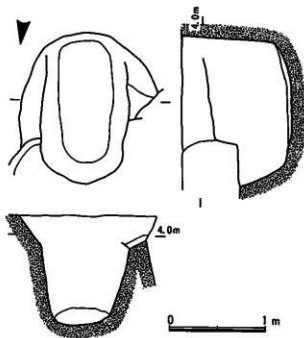
第111図 SK007出土遺物実測図 6（1/4）

J-1区で検出された廃棄土坑で、SK028・SK037・SK048を切っており、SK004と明治時代の廃棄土坑SK003に切られている。中央部分が長楕円形状に深く落ち込み形状となっており、落ち込みより上は掘り返しもしくは重複する遺構の可能性がある。

出土遺物（第113図）

図示した遺物は落ち込み部分より出土したものである。

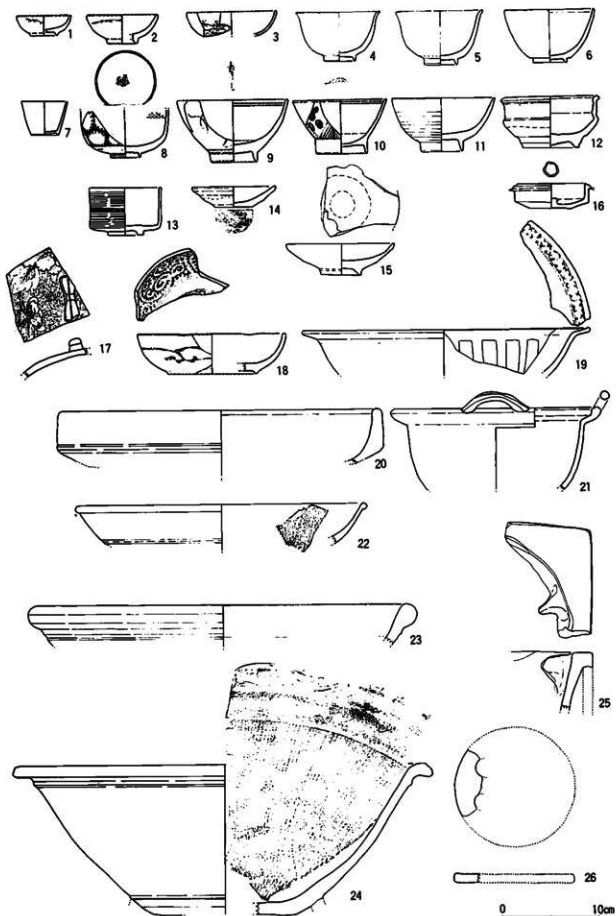
1・2は染付紅皿である。3は外面に上絵付された色絵皿で18世紀前半代の所産であろう。4・5は信楽系陶器の碗であり、19世紀前半以降の所産であろう。6も信楽系陶器碗であるが18世紀後半のものである。7は白磁小坏。8は見込手描き五弁花の染付碗で18世紀中頃～後半。9・10は染付広東碗である。11は無文の磁器碗（白磁？）。12は肥前系陶器の香炉で外面上半に鉄軸が掛かる。13は外面に鉄軸で圏線を描く肥前磁器筒形碗。14は砂目模みの肥前陶器皿。15は波佐見産の磁器皿で18世紀前半。16は関西系陶器土瓶の蓋である。17は段重の蓋であろう。18は蛇ノ目凹型高台の染付皿で18世紀末～19世紀前半。19は染付鉢で内面にはへう彫りが見られる。20は土師質焙烙である。21は関西系陶器の鍋である。22は肥前産と思われる陶器播鉢で、内外面に鉄軸がかかる。23は19世紀前半の福岡産陶器播鉢、24は18世紀前半～中頃の肥前陶器播鉢である。25は瓦質の二重構造焼炉で19世紀前半～中頃の所産である。26は25に伴うサナである。



第112図 SK015平面・断面図（1/40）

SK017（第114図、土層：第115図）

K-3区の調査区東壁沿いで検出された廃棄土坑である。遺構全体の半分以上は調査区外にあると考えられるため、全形を知り得ないが、長軸1.4m、短軸0.8m $\times$ a、深さ1.8mをはかる。SK029と共に、府内城土塁の裾部を浸食して掘り込まれている。土層断面の観察によれば、この土坑は17層から15層にかけては徐々に埋積したと考えられるが、13層には極めて多量の陶磁器が一括廃棄され、その後埋め戻されていることが判明した。出土した陶磁器は1000点を超えており、遺構が完掘されていないことを考慮すると、さらに多くの陶磁器が投棄されていたことが推測される。これらの中には二次的に焼けた陶磁器が多く見られ、火災等により焼けたことが考えら

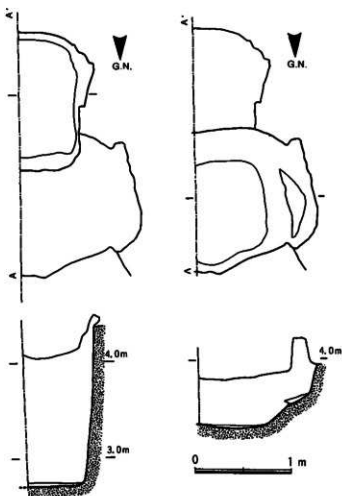


第113图 SK015出土遗物实测图 (1/4)

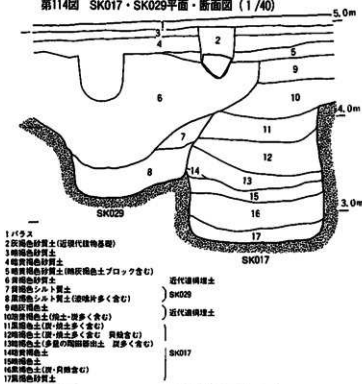
れる。また、後述するように、焼継ぎを施された陶磁器を多く含んでおり、の中には文字が朱書きされたものも数多く見られた。遺構の年代は19世紀中頃と推定される。

出土遺物 (第116図～第125図)

1～11はいわゆる薄手酒杯であり、このうち2と10は上絵付による色絵で他は染付である。1・6・8・11には焼継ぎが見られる。13は鷹をかたどった鳥形の土笛で、完形品である。14は馬形の水筒で、馬のたてがみと目の部分のみ呉須で描いている。16は無文の磁器(白磁)碗で胎土が灰色をしており、液佐見産であろうか。15・17・18、21～23は小型の肥前産染付碗で、概ね18世紀後半以降の製品である。22には焼継ぎが見られる。19・20・25・26・32は萩焼の碗で、19は器面上に横方向のヘラ彫り沈線が見られ、ここに褐色の透明釉が厚く掛かり文様効果を出しているものである。他は白と黒の軸葉を網目状に掛けたいわゆる「ビラ掛け」の陶器碗である。27～31・33は染付筒丸碗で1820年～60年代。27は焼継ぎされている。34・35・37は染付丸碗、38は染付筒形碗で、18世紀後半～19世紀初頭の製品であろう。36は、肥前産と思われる陶器碗。39は無文の陶器碗で、京・信楽系の陶器と思われる。40は長崎県亀山窯産の染付碗で、幅広の高台内に、「亀山製」の銘がある。19世紀前半以降の製品であろう。焼継ぎ痕がある。41は三田青磁と考えられる青磁碗で、高台は断面三角形、皿付けは露胎であり、全体に釉が厚く掛かる。19世紀前半以降に位置づけられる。42は染付碗であるが、高台が幅広く、蛇ノ目状を呈するものである。43は小型の染付端反碗であるが、見込に見られる袋様の文様はコンニャク印判によるものである。44は全体に瑠璃釉が厚く掛かる陶器香炉である。表面には花文が陰刻される。焼継ぎされている。45～53は染付碗の蓋で、おそらく端反碗もしくは広東碗の蓋であろう。46・48・50は焼継ぎされている。54は染付鉢で、外面に花菖蒲と鳥、見込に鳥を描く。同一種の染付鉢には焼継ぎ文字を有するものが2個体ある(第129図49・50)。55は型造りの青磁鉢で、口縁部は輪花となり大きく外反する。内面には花文を陽刻しており、全体に

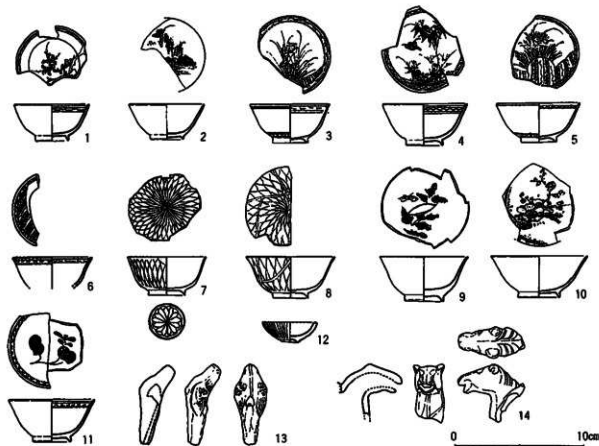


第114図 SK017・SK029平面・断面図(1/40)

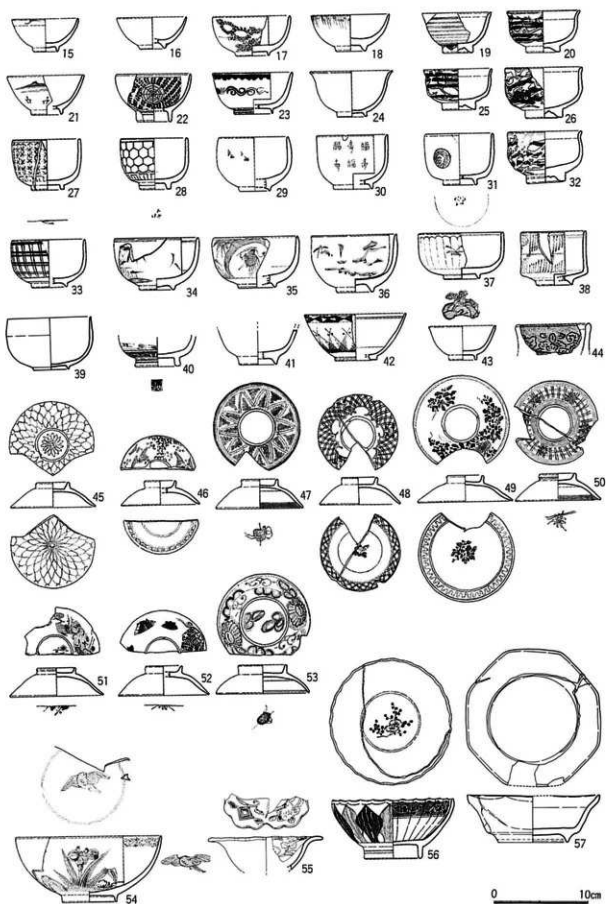


第115図 SK017・SK029土層断面図(1/40)

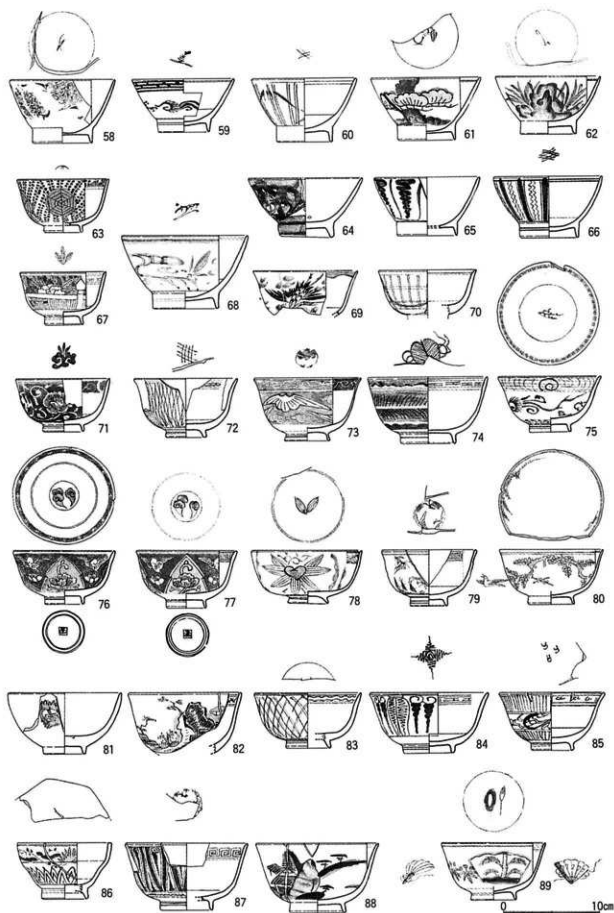
厚い青磁釉がかかる。三田青磁と推定される。56は遺構の下底部から出土した型打の染付碗で、口縁部は輪花となる。外面に連弁状の文様を描くが、脈状の筋を墨弾きにより表現している。また口縁部内面の文様帯においても墨弾き技法によって梅花文などを描く。18世紀末以降の製品か。焼継ぎされている。57は青磁八角鉢で、18世紀後半～末に肥前で生産されたものである。焼継ぎが行われているが、2次の被熱のため表面がすりガラス状に荒れており、焼継ぎによる接合部がずれている。58～62・65・66・68は肥前産染付の広東碗である。63・67・69～77・79・80・82～85・87～89は肥前産染付の端反碗である。63・69～71・82は焼継ぎされている。64は広東碗形であるが、陶器碗で、内面に鉄軸、外面には鉄軸と葉灰軸を掛ける。外面には軸の掛け残し部分があり、これにより文様効果となっている。見込みには3箇所の目跡が残る。胎土や釉調より18世紀末～19世紀前半の福岡産と考えられる。81は外面にコンニャク印判による文様を描くもので、18世紀中頃に製作されたものであろう。90～98は蛇ノ目凹形高台の皿である。97・98は高台内にそれぞれ「渦福」、「筒江」銘が描かれており、18世紀後半の所産であろう。また、91は墨弾き技法により鳥文などが描かれている。高台が比較的高く、19世紀前半～中頃のものであろう。95・96も高台が比較的高く、同様の時期の所産であろう。99・100は見込に四弁花を描くもので1680年～1690年代に製作されたものである。両方とも焼継ぎが施されている。101は蛇ノ目凹形高台の染付皿で、見込には山水図を描く。全体に二次的な焼成が著しい。底部中央が下がっているが、これは焼成時のヘタリによるものであろう。102・103は志田西山窯産と推定される染付皿で、呉須による絵付けに先立って白化粧付けを行ったことが観察できる。19世紀前半～中頃の製品である。104は肥前系の陶器と考えられる皿で、口縁部はロクロによる成形のち手で曲げて、波状に作り出したものである。内面に鉄絵を描く。105は型打の染付皿で、18世紀後半～末の所産と思われる。106は型打の染付大皿で、見込に鳥文を描く。高台内に「大明成化年製」銘がある。



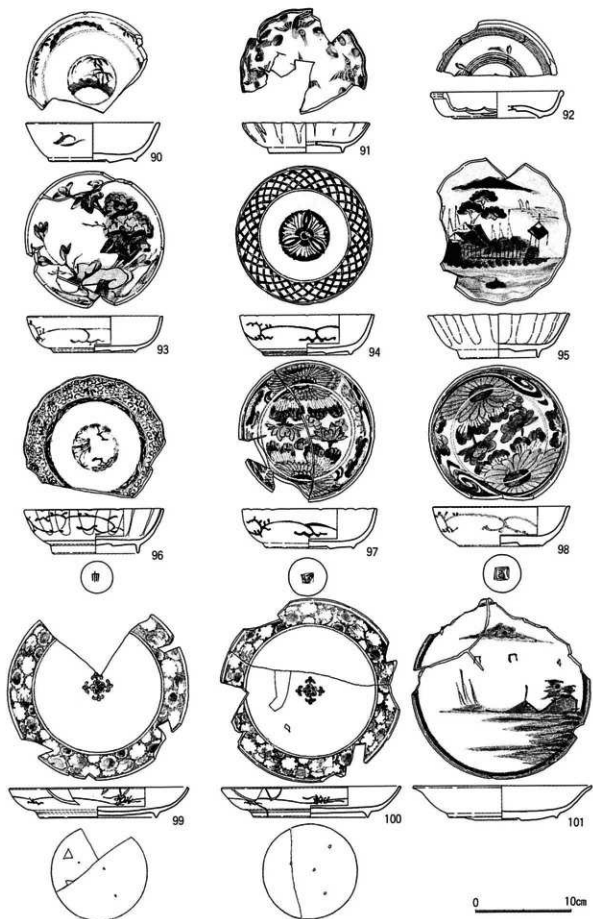
第116図 SK017出土遺物実測図1 (1/3)



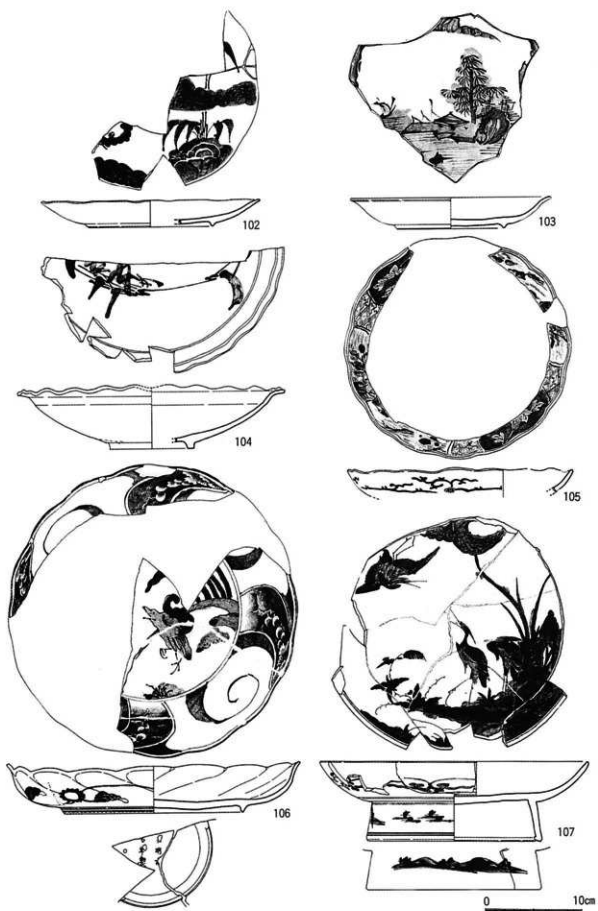
第117图 SK017出土遺物実測図2 (1/4)



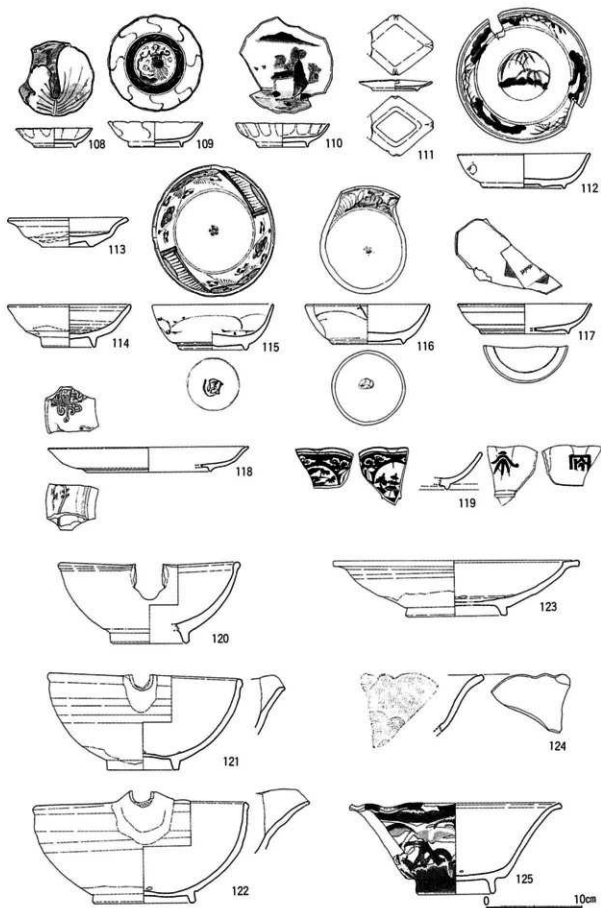
第118圖 SK017出土遺物実測圖3 (1/4)



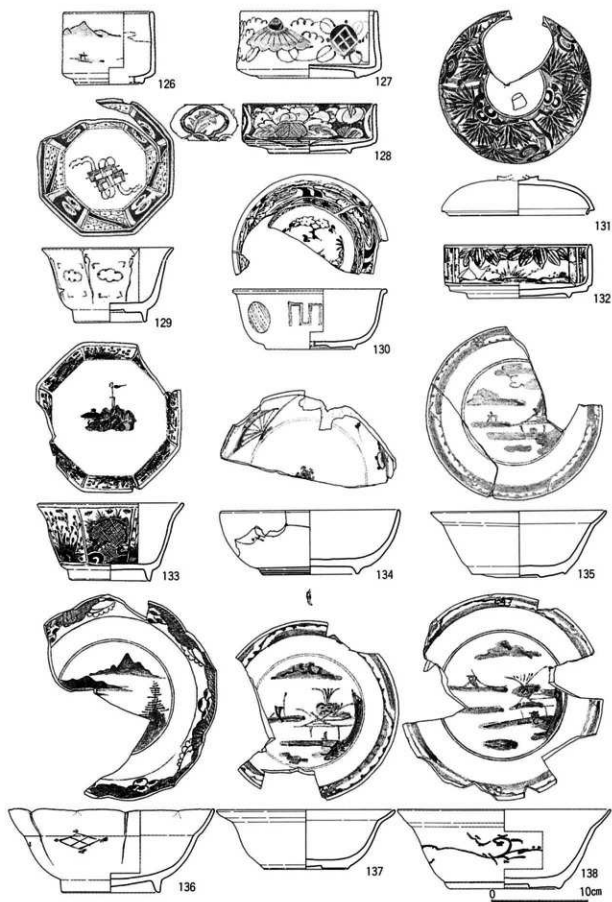
第119図 SK017出土遺物実測図4 (1/4)



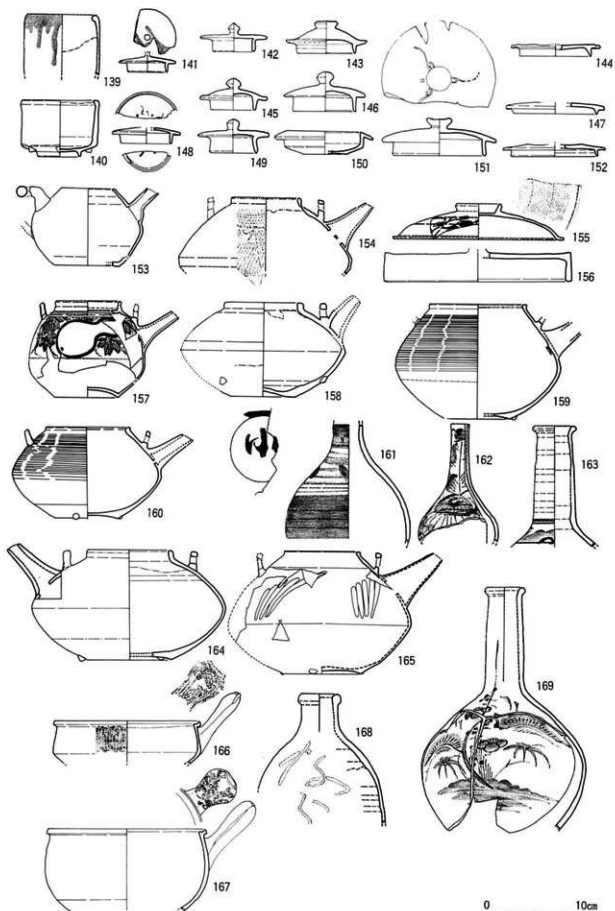
第120図 SK017出土遺物実測図 5 (1/4)



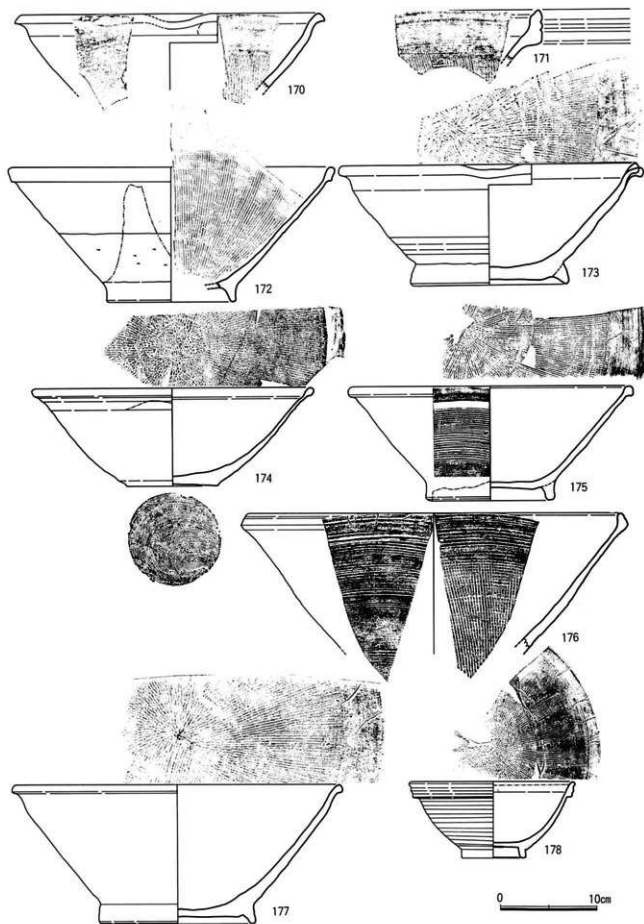
第121图 SK017出土遗物实测图6 (1/4)



第122図 SK017出土遺物実測図7 (1/4)

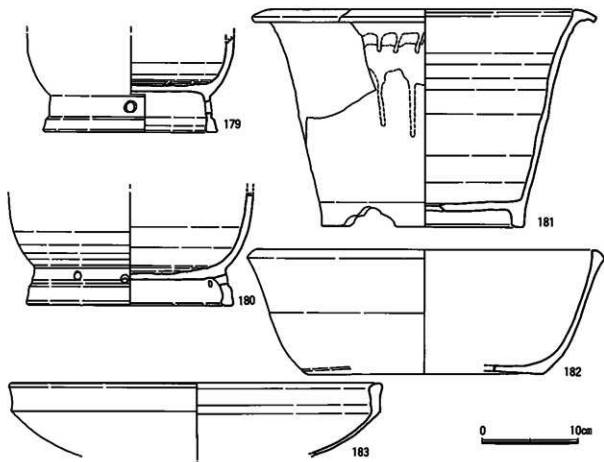


第123図 SK017出土遺物実測図8 (1/4)



第124図 SK017出土遺物実測図9 (1/4)

柴田コレクションに同じものがあり⁹⁵、1760～1780年代の製品である。107は内面に鷺文を描く台付皿で、台の外面には帆掛け船等を描く。17世紀後半～末に製作されたものであろう⁹⁶。108～110は肥前産染付の輪花皿で、18世紀後半以降に製作されたものである。109は見込に団意文を描き、その周りの文様帯に墨弾き技法を用いている。111は型打の白磁菱形皿で、17世紀末～18世紀前半の製品であろう。112は蛇目凹形高台の皿で、焼成が不良のため、黄色っぽく発色している。18世紀末～19世紀前半。113・114は下底より出土した陶器皿で、113は砂目積みの肥前陶器皿で混入品の可能性があるが、114は高台部以外に鉄軸がかかる陶器皿で、18世紀後半以降の肥前陶器と考えられる。115・116は波佐見系と考えられる染付皿で、見込にコンニャク印判の五弁花、高台内に退化した「渦福」銘を描く。18世紀後半～末。117は見込に色紙様の文様を描く染付皿で17世紀後半～末頃の所産であろう。118は内面に図案化された「寿」字等を描く染付皿で、18世紀後半に位置づけられよう。119は口縁部が輪花となり口縁が施される大皿と考えられるもので、18世紀後半～末のものである。120～122は萩焼の片口鉢で、見込には121に4箇所、122に5箇所の目跡が認められる。高台部以外には灰色～明黄灰色を呈する萩灰軸が掛かる。123は、萩焼の皿で、見込には5箇所の目跡が残る。口縁部は屈曲し、水平につくられる。高台部周辺以外に灰白色の萩灰軸がかかる。124は三彩陶器の鉢と考えられるものである。型作りと考えられ、内面には青海波状の文様がある。外面は緑色、内面には黄色と緑色の軸がかかる。胎土は軟質で土師質といつてよいほどのものである。近世後半の低火度焼成による三彩陶器としては源内焼や尻平焼が知られているが、確定できなかった⁹⁷。125は陶器鉢で、見込には3箇所の目跡が残る。口縁部は成形後に手で曲げて波状に作り出している。内外面に鉄軸が掛かるが、体部外面には鉄軸、緑軸、黄軸を掛け、掛け残し部分と相まって文様効果を上げるもので萩焼のビラ掛けに類似する。胎土や釉調から福岡産のもので18世紀末～19世紀前半の所産であろうと推定される。126は染付香炉で、おそらく蛇ノ目凹形高台になるものと推定される。129・133は八角鉢で、129は蛇ノ目凹形高台である。いずれ



第125図 SK017出土遺物実測図10(1/4)

も19世紀前半以降のものであろう。127・128・131・132は段重及びその蓋である。128は染付に上絵付けした色絵で、19世紀前半以降の製品か。134は見込みにコンニャク印判の五弁花を描く肥前産染付鉢で18世紀中頃～後半のものである。135・137は青磁染付鉢で、18世紀後半～末。136は口縁部が輪花となる染付鉢で、胎土が灰色を呈し、波佐見産かと思われる。139は11緑部外面に銅緑軸が掛かる陶器灰落として信楽系陶器と思われる。141はこれに伴う蓋と思われる。140は外面に鉄軸の掛かる陶器香炉で形式的な三足が貼り付けられている。肥前陶器と思われ、18世紀後半以降のものであろう。148～152は関西系陶器の土瓶蓋である。148は内面に墨書があるが判読できない。153は陶器急須である。赤褐色の精細な胎土できわめて薄く成形され、器表面は入念に磨かれている。断面円形を呈する把手は、注口と対称の位置に貼り付けられている。中国宜興窯の製品と思われる¹⁰⁸。154は関西系陶器の土瓶、155は行平の蓋で、いずれも外面には「イッチン掛け」による文様が見られる。156は、土師質土器火消し壺の蓋である。157～160・164・165は関西系陶器の土瓶である。157は外面に呉須により瓢箪の文様を描く。158の底部には「一少」と判読できる墨書が認められる。161は肥前陶器の瓶で刷毛目による文様が描かれる。18世紀後半以降の所産であらう。162・163・169は肥前磁器の瓶である。166・167は関西系陶器の行平で、把手には人物文(166)、雲龍文(167)が陽刻される。168は外面鉄軸のいわゆる貧乏徳利で外面には「なら」と判読できる文字が施軸後に描かれる。170～177は陶器描鉢である。171は備前の描鉢で、17世紀代のもと思われる、混入品であらう。170・173・177は肥前系の陶器描鉢で、タタキ成形のものである。19世紀前半に位置づけられる。174は肥前系の描鉢であるが、ロクロ成形のもので、18世紀前半以前のものであるため、混入品の可能性もある。172・175・176は福岡産の陶器描鉢である。内外面に薄い鉄軸が掛けられ、ロクロ成形の後高台を貼り付けるものである。178は大谷焼の描鉢¹⁰⁹で、外面には鉄軸がかかる。179・180は遺構下底部で出土した土師質土器規矩である。181は、瀬戸・美濃産の槇木鉢で、口縁部と胴部上半に鉄軸と蕨灰軸を掛ける。182は瓦質土器の鉢、183は土師質土器焙烙である。

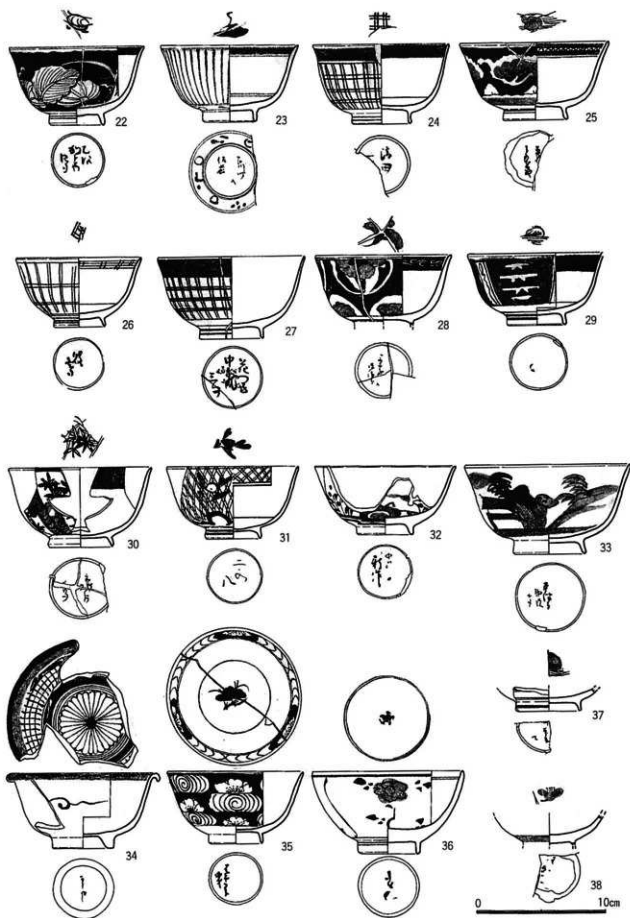
焼継文字を有する陶磁器（第126図～第134図）

SK017から出土した陶磁器のうち85点に朱書きあるいは墨書による焼継文字が認められた。以下、これらの資料を紹介する。なお、文字の大半は高台内に書かれた朱書きであるが、墨書等、朱書き以外の文字がある場合は特に別記する。書かれた文字の中には、地名と思われるものがあり、現地比定が可能なものも多数見られた¹¹⁰。

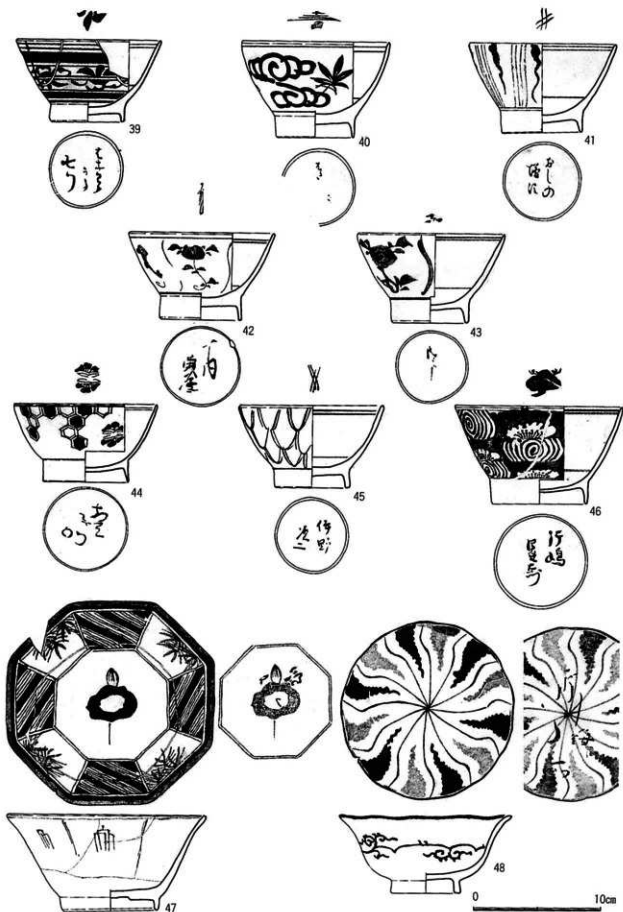
1～6・8・9はいわゆる薄手酒杯で、製作年代は19世紀前半以降である。1は色絵で、内面に上絵付けで牡丹文を描く。焼継文字は判読できない。2は色絵で内面に浮世絵風の美人面を描く。焼継文字は「みとや」で屋号と推定される。3は染付で内面に鶴亀を描き、焼継文字は「門田 是□」。門田は臼杵藩領門田村に比定できる。4は色絵で内面に枝花を描く。焼継文字は「米(連)寺」で、府内城下町の外であるが南東に隣接する位置にある米連寺に比定される。5・6は白磁小杯で焼継文字は、それぞれ「牧 小兵衛」、「寿」。牧は、府内藩領牧村に比定できる。8は内面に呉須で風景を描くもので、焼継文字は消えてしまっており判読できない。また高台の周辺にも朱書きが認められるが、判読できない。9は内面に金銀彩で文様を描くものである。焼継文字は「へつきおかや」。へつきは臼杵藩領戸次市村に比定される。7は色絵小杯で、外面に鳳凰と花文を描く。焼継文字は「原ノ 天のをや」か。原は村名と思われるが、臼杵藩領に2箇所、幕府領に1箇所存在する。このうち最も地理的に近いのは幕府領の原村である。臼杵領の原村はどちらも農山村であるのに対し、幕府領原村は海岸部にあり、港湾を有することから「天のをや」を屋号とする商家が存在した可能性がより高いと考えられることから、幕府領の村と考えたい。10は、口縁部が端反になる小碗で、外面に青の顔料で花文が上絵付けされ、文様は黒で縁取りされている。11緑端部は無軸である。中国徳化窯の製品であらう¹¹¹。第123図153の急須とセットで、煎茶用に使用されたものと推定される。焼継文字は「(波)田氏 式久」。11～14は染付端反碗である。11の焼継文字は「は」としか判読できない。12には文字は認められないが、見込に三本の平行する線が墨書されており、これは焼継後に記入されたと考えられる。13は外面に金魚を描く染付である。焼継文字は「(善)巧寺」。城内に所在する善



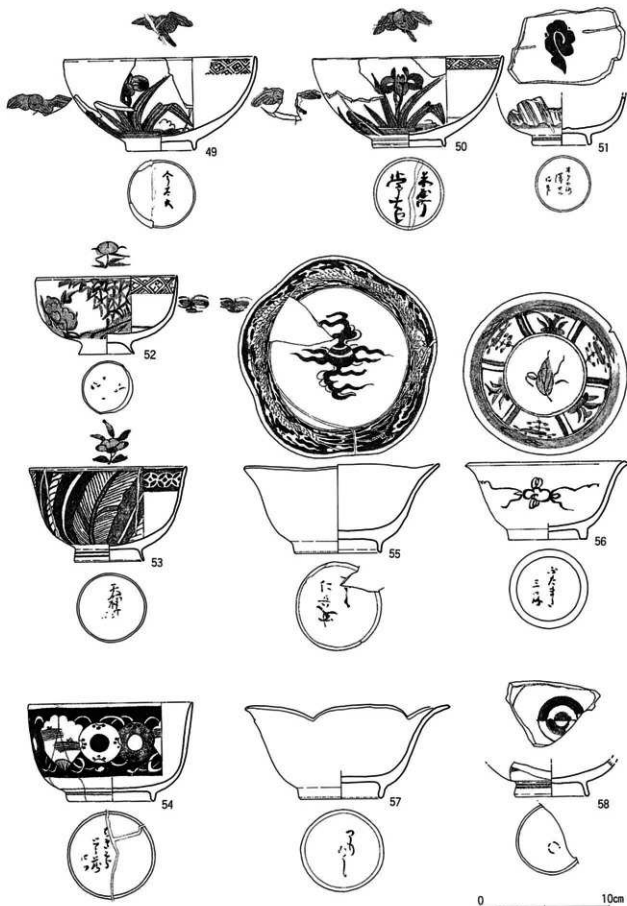
第126図 SK017出土の焼継文字を有する陶磁器実測図1 (1/3)



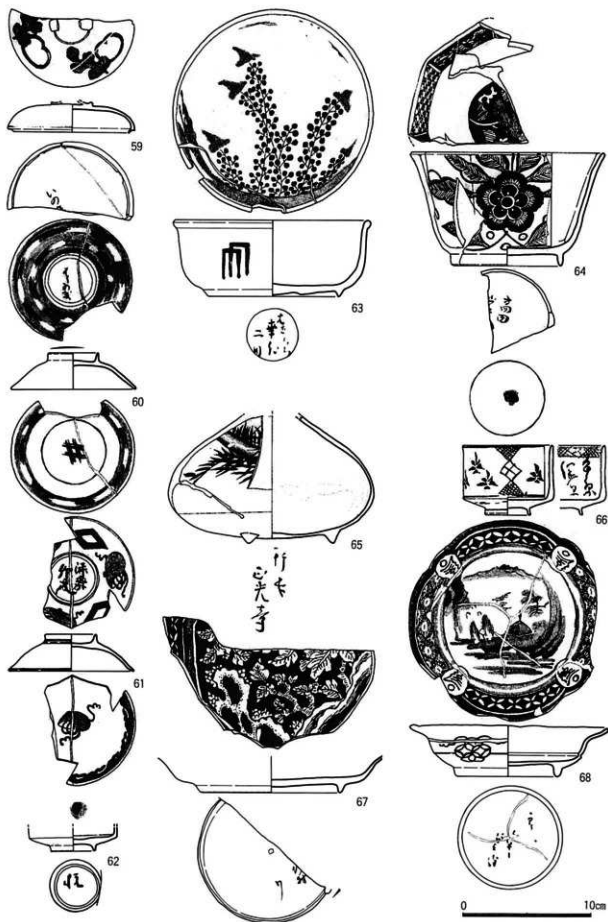
第127図 SK017出土の焼継文字を有する陶磁器実測図2 (1/3)



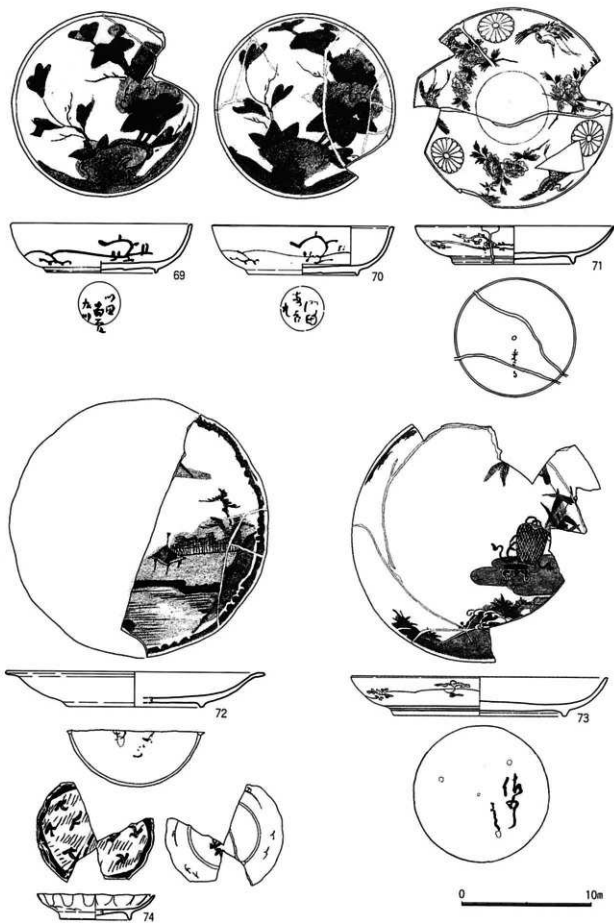
第128図 SK017出土の焼継文字を有する陶磁器実測図3 (1/3)



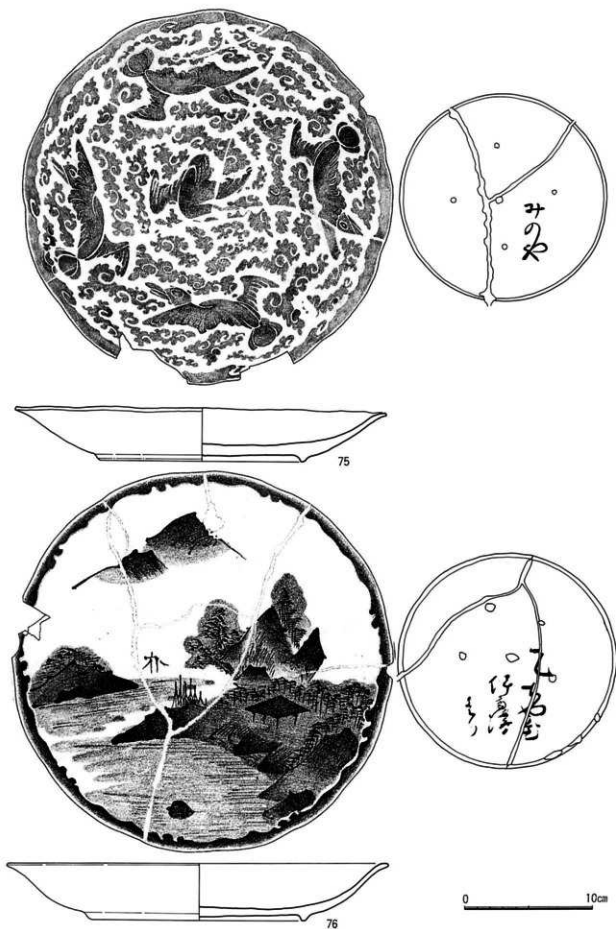
第129図 SK017出土の焼継文字を有する陶磁器実測図4 (1/3)



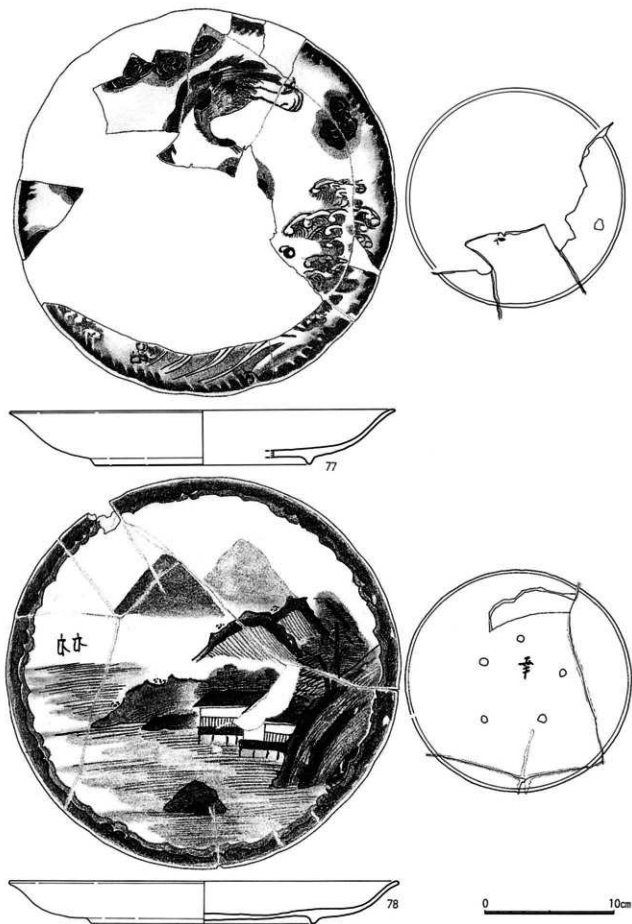
第130図 SK017出土の焼継文字を有する陶磁器実測図5 (1/3)



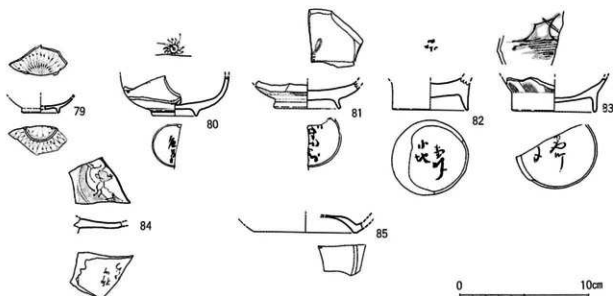
第131図 SK017出土の焼継文字を有する陶磁器実測図6 (1/3)



第132図 SK017出土の焼継文字を有する陶磁器実測図7 (1/3)



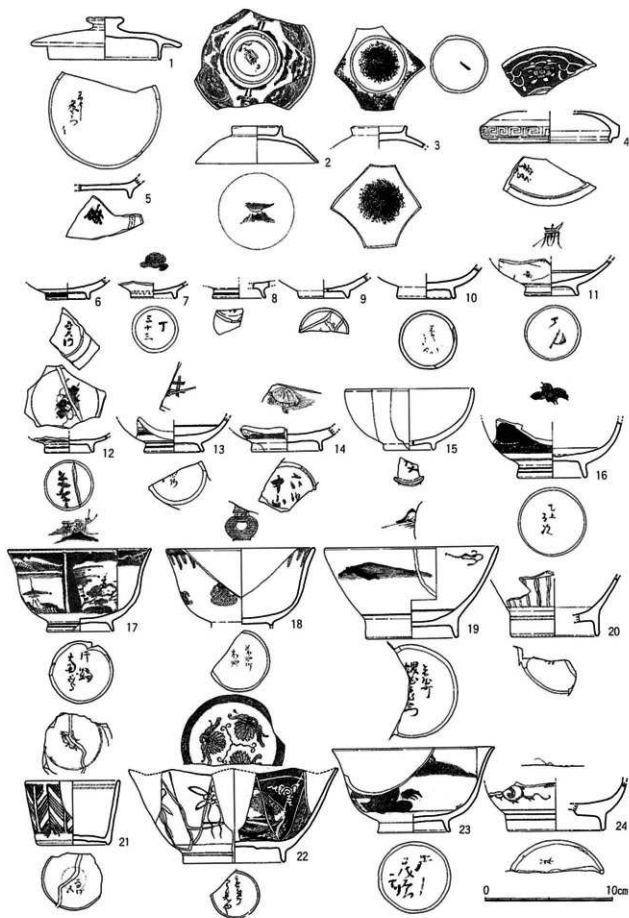
第133図 SK017出土の焼継文字を有する陶磁器実測図8 (1/3)



第134図 SK017出土の焼継文字を有する陶磁器実測図9 (1/3)

巧寺に比定できる可能性がある。14は、瀬戸・美濃産の染付端反碗で、焼継文字は「東新町 おなつ」。東新町は府内城南東側の域外に隣接する町にあたる。15は18世紀後半～末に比定される丸碗で、焼継文字は「山津 新作」。山津は、延岡藩領山津村に比定される。16は口縁部が八角形を呈する碗で、内外面に風景が描かれる。19世紀前半以降の製品であろう。焼継文字は「□波」とだけ判読できる。あるいは「片しま」と記しているのかもしれない。17は蛇ノ目凹形高台の蕎麦猪口で、外面に山水文を描く。焼継文字は「なり松 治兵衛 二匁」と判読できるが、「二匁」のみは墨書で他は朱書きである。なり松は、延岡藩領成松村に比定される。18も蛇ノ目凹形高台の蕎麦猪口で、口縁部は輪花となる。焼継文字は「□□」と判読できようか。19は器径に比して器高の高いタイプの碗で口縁部は端反となる。外面に樓閣と雲鶴文を描き、その間を文様で埋めており、いわゆる祥瑞手の写しであろう。高台の周辺には「祥瑞造 五郎太製」との銘がある。19世紀前半以降の製品である。焼継文字は「米五」。米は調査地が所在する米屋町を示す可能性も考えられる。20は蛇ノ目凹形高台の蕎麦猪口で、外面には二十四孝の孟宗図と漢詩が描かれる。漢詩は「泪滴明風寒 蕭々竹数竿 須臾春笋出 天意報平安」である。焼継文字は高台内の銘の部分に朱書きで「」が書かれているのみである。21は色絵碗で、18世紀中頃～後半に製作されたものであろう。焼継文字は「木」のみ判読できる。22～33及び35は染付端反碗である。22は、「乙津か」と「四匁」の焼継文字が判読できる。乙津は幕府領の港町乙津村であろう。23は、瀬戸・美濃産の染付碗で、焼継文字は「古川町 佐藤 入」。古川町は米屋町の西に隣接する府内城内の町である。24は、焼継文字「清田一□」。清田は地名を示すものかどうか不明である。25の焼継文字は7と同じく「原ノ 天のをや」である。26の焼継文字は、5と同じく「牧 小兵衛」である。27は焼継文字「花つる 中蔵 三匁」と判読できる。これを記入する以前にも何らかの文字が書かれていたらしいが、判読できない。花つるは、府内藩領花津留村にあたると思われる。28は焼継文字「よこふ 源作右衛門 入」。よこふは臼杵藩領横尾村にあたる可能性が考えられる。29は高台内に朱書きで記号「○」のようなものが書かれている。30は焼継文字「元町 □衛門 □拾匁」と判読できる。元町は府内城南東域外に比定できる地名である。31は、焼継文字「□□八」と判読できる。32は、焼継文字「子 □新作」。33は「今津留 升次 □ノ」と判読できる焼継文字が書かれているが、白っぽく発色する材料でかかれており、いわゆる「ガラス字」の可能性も考えられる。今津留は府内藩領今津留村に比定される。35は、焼継文字「はきわら 御□」。はきわらは府内藩領萩原村に比定される。34は肥前産染付の鉢で、内面の文様の一部には墨弾き技法が用いられている。焼継文字は「か□し 九」。36は18世紀後半に比定される染付碗で、見込にコンニャク印判による五弁花が描かれる。焼継文字は「□ろ八」。おそらく人名であろう。37・38はおそ

らく端反碗の底部で、焼継文字は37は「**「」**町 とら吉 て」、38は判読できなかった。37は府内城内の町名を表す可能性が高い。39～46は染付広東碗である。39は焼継文字「はきわら □□ 七匁」。40も「はき□□」と判読でき、おそらく「はきわら」と思われる。41は「おしの 増次」、42は「丁内 魚屋」と判読される。丁内は調査地が所在する米屋町内を示すものではないかと思われる。43の焼継文字は「須(え)し」と判読でき、人名の可能性が高い。44は墨書により書かれており、「あ(き)え) □(匁) ○」と読める可能性がある。45の焼継文字は、「伊野 次二」である。伊野は臼杵藩領猪野村にあたる可能性が考えられる。46は「片嶋 四郎右衛門」と判読できる。片嶋は延岡藩領片島村に比定できると考えられる。47は蛇ノ目凹形高台の染付八角鉢で19世紀前半以降の所産である。見込に墨書があるが判読できない。48は11線部が輪花となる染付鉢で19世紀前半以降の製品である。見込には墨書があり、「(片) (嶋) □□ (巻) 匁」と読める可能性がある。49・50は肥前染付鉢で、同一製品である。焼継文字はそれぞれ異なり、49が「今太五」、50が「米屋町 常右衛門」と読める。これらは、焼継文字のない第117図54とも同一種のものである。51は端反碗と考えられ、見込には墨弾きによる文様が描かれる。焼継文字は「すけ小路 澤吉 に印」。「すけ小路」は府内城内の街路を指すものと思われるが不明である。52は18世紀中頃～後半の肥前染付碗で、焼継文字は判読できない。53は端反碗で、焼継文字は「天神丁 □」。天神丁は府内城内の天神町に比定できる。55は肥前青磁染付鉢で、口縁内面に龍、見込に宝珠を描く。18世紀後半の製品であろう。焼継文字は「(か)く 仁兵衛」。かくは府内藩領賀米村に比定できる可能性がある。56は幅広い高台を有し、見込に芙蓉手の文様を描く染付鉢で、19世紀前半以降のものであろう。焼継文字は、「ふたまた 三匁」。「ふたまた」は府内藩領永興村内に所在する二又にあたると思われる。54は蓋付きと推定される染付鉢で、口縁部内面は露胎である。焼継文字は「はきわら とら蔵 式匁」である。57は全面に瑠璃釉の掛かる肥前磁器鉢で、口縁部は五弁の花状に開くものである。19世紀前半～中頃の製品と推定される。焼継文字は「つもり □し」。津守は延岡藩領津守村に比定される。58は端反碗の底部と推定され、「○」印に見える記号が朱書きされる。59は染付蓋物で18世紀中頃～後半の所産であろう。焼継文字は「いの□」。「いの」は臼杵藩領猪野村にあたる可能性がある。60・61はおそらく端反碗の蓋である。60は焼継文字「はたの 式」、61は焼継文字「津森 卯右衛門入」。「津森」は延岡藩領津守村に比定できる。62は染付筒形碗で「悦」と読める焼継文字がある。63は口縁部が玉縁状になる染付鉢で18世紀末以降の製品であろう。焼継文字は「はきわら 幸作 二匁」。64は、八角鉢で、内面に染付、外面に赤絵を描く。18世紀末～19世紀前半の所産であろう。焼継文字は「高田 岩□」。「高田」は地名であるとすれば、乙津川と大野川にはさまれた輪中地域を指す近世の地域名にあたる可能性がある。この地域は熊本藩領にあり、熊本藩の領域支配機構である手永制のもとでは高田手永になる。65は染付瓶で、底部は露胎で三足がつく。底部に「竹長 正光寺」と判読できる焼継文字が認められる。「竹長」は地名の可能性が高いが、該当するものは不明であった。あるいは、熊本藩領の竹中を誤記した可能性も考えられようか。66は染付筒形碗で18世紀末～19世紀前半の製品である。半分に割れた状態で出土し、完形に復元できた。焼継ぎは施されていないが、内面に墨書が見られ、「□ノ原 (六)兵衛 イ」と判読できる。「□ノ原」については現地比定はできなかった。67は染付皿で、焼継文字は「坊村 ワ」で、府内藩領六坊村に比定できる可能性がある。68は口縁部輪花の皿で、焼継文字は、保存状態が悪く不明である。19世紀前半。69・70は同一種の皿で蛇ノ目凹形高台である。焼継文字は、69が「門田 南吉 九匁」、70が「門田 南吉 九」ではほぼ同一である。同じ皿で、焼継文字の無いものが1個体(第119図93)あり、他に復元が困難なため図示していない破片が1個体分以上ある。71は見込に鶴・菊・牡丹を描く染付皿である。焼継文字は「光さ□寺」で、府内城域下町の西南隅に位置する光西寺に比定されよう。この資料については、見込みに園縁のみを描く、高台内が無文である、16弁の菊文を描く、など「禁裏御用品」の特徴を有するもので²²⁾、その伝来過程が注目される資料である。高台の内側が斜めにカットされており、19世紀前半～中頃のものと推定される。72は志田西山窯産の皿で19世紀前半～中頃の製品である。焼継文字は判読できない。73は見込に鳥籠を描く染付皿で、柴田コレクションに類似した資料が見られ²³⁾、1670年～1690年代の製品である。焼継文字は「佐五郎 □」。74は型打の皿で、焼継文字は判読できない。75～78はいずれも志田西山窯産の皿である。



第135図 その他の遺構から出土した焼継文字を有する陶磁器実測図 (1/3)

75は墨弾き技法を用いて鳥・雲の文様を内面全体に描くものである。焼継文字は「みのや」で屋号であろう。76は焼継文字「乙ちや 伊兵衛 彦丸」。乙は、幕府領乙津を表しているとも考えられる。77は染付の文様をふちどるようになにに赤・緑が上絵付けされている。焼継文字は「や」。78は焼継文字「幸」。79は染付薄手酒杯で、焼継文字は判読できなかった。80は18世紀後半の染付碗で、焼継文字は「□(左) 南門」。81は端反碗の底部で、焼継文字は「(津) 守 □」で「津守」と書かれていた可能性が高い。82は焼継文字「當町 小地」。當町は調査地が所在した米屋町そのものを指す可能性が考えられる。83は広東碗の底部で焼継文字は「米や町」 匁」。84も広東碗の底部と推定され、焼継文字は「柳町 「 八右衛門」。柳町は城内西部にある町で、上柳町、中柳町、下柳町にわかれている。85は陶器土版の底部であり、焼継文字は底部に記されていたようであるが一端がわずかに残存するのみである。

他の遺構出土の焼継文字を有する陶磁器 (第135図)

今回の調査においては、SK017以外の遺構や包含層からも焼継文字が記された陶磁器が24点出土している。ここでは便宜的にこれらの遺物を集成して紹介する。なお、遺構検出作業中に出土したものや、出土位置の記録できなかったもの(表面採集品)、試掘時に出土したものも含めている。

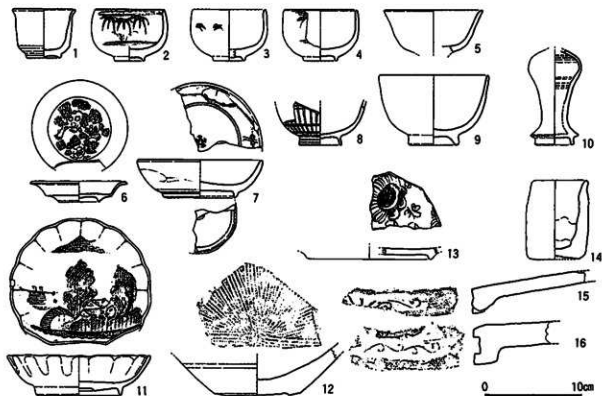
1はK-1区で出土した銅緑釉のかかる関西系陶器土版の蓋で、内面に「米や丁 彦右衛門 イ」の焼継文字がある。2はおそらく端反碗の蓋で、表面採集品である。焼継文字はツマミ内に「今津留」と書かれている。3はSK007から出土したもので端反碗の蓋と推定され、焼継文字はツマミ内に「」と記号状のものが書かれている。4は明治時代の廃棄土坑SK005から出土した染付蓋物の蓋で、焼継文字は内面に書かれ、「米や 彦」 』と判読できる。1と同じ内容を記述していた可能性が考えられる。5は白磁もしくは染付皿の無文部で、焼継文字は「塩」。地名であるとする塩九升町が考えられる。6は染付碗の底部で、焼継文字は「六郎左衛門」と判読できようか。7は薄手酒杯の底部で、焼継文字は「丁 三十三」。8はSK007から出土した染付碗の底部で、焼継文字は判読できない。9はSK009から出土した白磁碗の底部で焼継文字は「仲津 □」と判読できる。「仲津」は府内藩領中津留村にあたる可能性がある。10は染付碗の底部で、焼継文字は「米や□ □や」。米や町と書かれていた可能性が考えられる。11は染付碗の底部で焼継文字は「は ん」。12は染付碗の底部で焼継文字は「米や丁」。13は端反碗の底部で、焼継文字は「□南 □」。14は端反碗の底部で焼継文字は「六ッ 中山」か。15は白磁碗で焼継文字は「九メ」。16は試掘時に出土した端反碗の底部で、焼継文字は「乙上 左兵衛次」である。乙は幕府領乙津を示すものかもしれない。17はSK008出土の端反碗で、焼継文字は「片島 大國や 五郎右衛門」。18はSK042出土の肥前磁器端反碗で、焼継文字は「米や町 木や」である。20はSK017検出時に出土した広東碗の底部で、焼継文字は判読できない。21は明治時代の土坑SK026から出土した蛇ノ目凹形高台の蕎麦猪口で、焼継文字は「高 □ 五」もしくは「馬 □ 五」。22・24はSK070から出土したものである。22は口縁部が波状となる八角鉢で蛇ノ目凹形高台。焼継文字は「上柑屋町 今見や」。上柑屋町は府内城内西部笠和口付近に所在する町名にあたる。24は蛇目凹形高台の染付鉢で、焼継文字は「米」が判読でき、米屋町を示す可能性がある。23はSK029から出土した端反碗で、焼継文字は「□□ 茂右衛門 一匁」である。

SK029 (第114図・第115図)

K-2区で検出された廃棄土坑でSK017を切って掘り込まれている。出土遺物中に瀬戸・美濃産の獅子文皿があり、1855年以降に位置づけられるが、明治4年頃以降に生産されるいわゆる「印判手」磁器を含んでいないため、幕末から明治初期の時期に位置づけられる。

出土遺物 (第136図)

1は灰白色の半透明釉がかかる肥前陶器の小坪で、17世紀初頭から前半のものと推定される。周辺の遺構からの混入品と見られる。内面に鉄分が付着しており、お歯黒用に使われた可能性がある。2～4は染付の丸碗で、18世紀末～19世紀前半の所産。5は褐釉の陶器端反碗である。6は瀬戸・美濃産染付獅子文皿で1855年以降



第136図 SK029出土遺物実測図 (1/4)

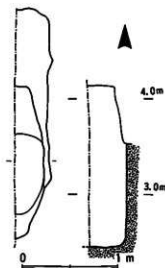
に比定される。7は18世紀後半の染付皿、8は染付端反碗である。9は陶器兵器手碗である。10は白磁の御神酒徳利で18世紀末以降のもの。11は蛇ノ目凹形高台の染付皿で19世紀前半以降に位置づけられる。12は焼締陶器であるが、産地は不明なものである。13は、津州窯系の色絵皿で、いわゆる呉須赤絵である。17世紀前半の所産である。14は焼塩甃で、器形から17世紀後半以前のものと推定される。15・16は軒平瓦である。15は、府内城三の丸D類にあたる。16は、瓦当が大きく、上端部を面取りしており、唐草文の単位も多いことから中世に遡るものと思われる。

SK033 (第137図、土層図：第21図)

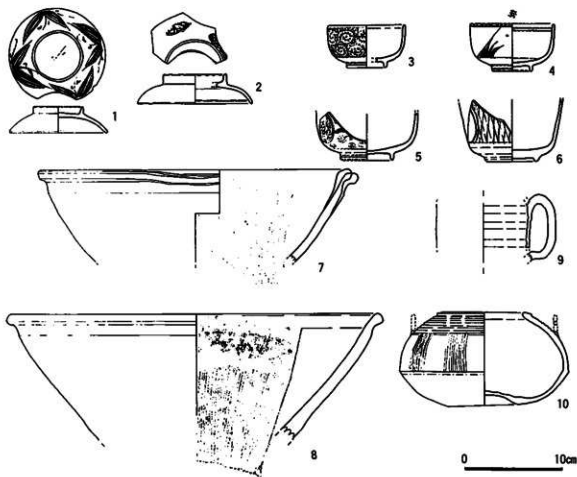
J-1区の西壁沿いに存在する廃棄土坑であるが、試掘トレンチによってほとんど掘られてしまっており、断面で確認できるのみである。SK042を切って掘り込まれている。出土遺物から19世紀前半～中頃の所産と思われる。

出土遺物 (第138図)

1・2は染付碗の蓋で、1はおそらく端反碗の蓋である。3は外面に鎗唐草を描く碗で、口縁部が無釉であることから蓋付きと思われる。4は18世紀後半～末に位置づけられる染付丸碗である。5・6は染付の碗もしくは鉢であり、5は19世紀前半以降、6は17世紀末～18世紀初頭の製品であろう。7・8は肥前陶器播鉢。9は、鉄軸の掛かる陶器で、水注であろうか。10は関西系陶器土瓶で、赤褐色の胎土に鉄軸が掛かる。



第137図 SK033平面・断面図 (1/40)



第138図 SK033出土遺物実測図 (1/4)

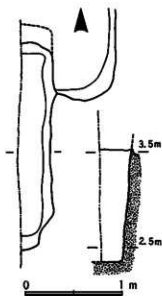
SK042 (第139図、土層：第21図)

K-1区の調査区西壁沿いで検出された土坑で、SK033に切られている。遺構の大半が調査区外にあると考えられるが、壁面の土層断面を見ると本来深さ1.2m以上あり、大型の廃棄土坑であると考えられる。

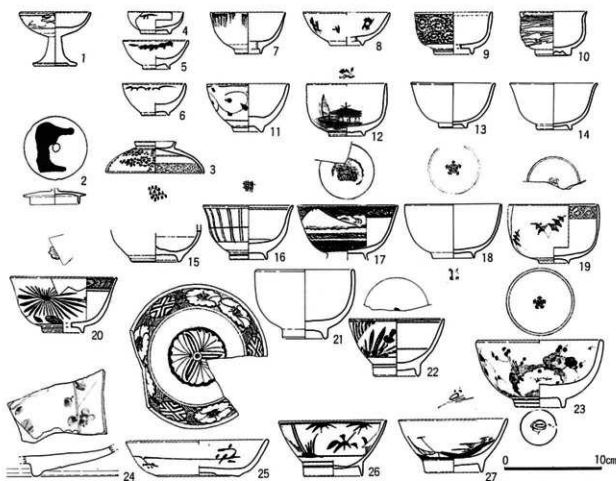
出土遺物から、19世紀前半以降に埋没したものと考えられる。

出土遺物 (第140図～第142図)

1は肥前産染付仏飯器である。2は信楽系陶器の蓋で、白化粧を施した後、銅緑釉をかけたものである。SK017で同一種のものが出土している (第123図141)。3はおそらく端反碗の蓋であろう。4～6は染付紅皿である。7・8・11は18世紀代に位置づけられる、肥前産染付碗である。9は外面に蛸唐草を描く染付蓋物で、18世紀末～19世紀前半。10はいわゆるビラ掛けを施す萩焼の陶器碗。12は18世紀中頃～後半に位置づけられる肥前産の染付碗である。13・14は信楽系の陶器碗である。15は染付の瓶である。16・17・20は端反碗である。20については、同一種の碗と蓋がSK007からまとまって出土している。18は外面瑠璃釉の染付碗で、見込に手描きの五弁花、高台内に「大明年造」の銘が認められる。なお、表面には金彩が施されていた痕跡がある。17世紀末～18世紀前半の所産であろう。19は18世紀中頃～後半の染付碗で見込に手描きの五弁花が認められる。21は肥前陶器の呉器手碗であ



第139図 SK042平面・断面図 (1/40)



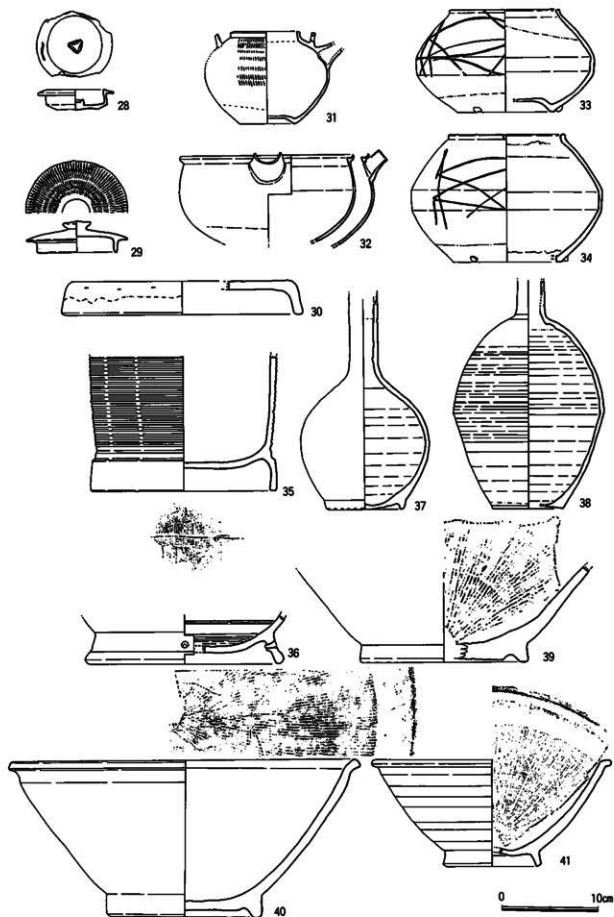
第140図 SK042出土遺物実測図1 (1/4)

る。SK042に切られている18世紀前半の土坑SK057からの混入品の可能性はある。22・26・27は染付広東碗で、26は焼継ぎが施されている。27は見込みに3箇所の目跡が認められる。23は18世紀後半の染付碗で、見込みにコンニャク印判の五弁花、高台内に崩れた「渦福」銘を描く。24は17c前半の初期伊万里の鉢で、混入品であろう。25は蛇ノ目凹形高台の染付皿である。28～34は関西系陶器の土瓶（31・33・34）、土瓶の蓋（28・29）、行平（32）である。33・34はイッチン掛けによる文様が施文される。35は瓦質土器の埴炉で、高台部の外側は丹塗りである。36は土師質土器埴炉である。37は肥前産磁器の瓶で、無文のものである。38は外面に褐釉が掛かる陶器瓶で、胴部中央付近に明瞭な稜線を持ち、肩が丸くなる特徴的な形態である。体部内外面にはロクロ目を著しく残しており、底部にも回転ヘラ切りの痕跡を残す。徳島の大谷焼の瓶であろうと思われ²⁹、府内城三の丸遺跡SK 7でも出土しているものである²⁹。39～41は肥前系の陶器插鉢である。42は土人形である。首の部分に穴があり木製あるいは竹製の軸をつけて使用する玩具で、いわゆる「一文人形」²⁹である。43は猿面形の泥面子で、表面に糸を通す程度の穴がけられている。



第141図 SK042出土遺物実測図2 (1/3)

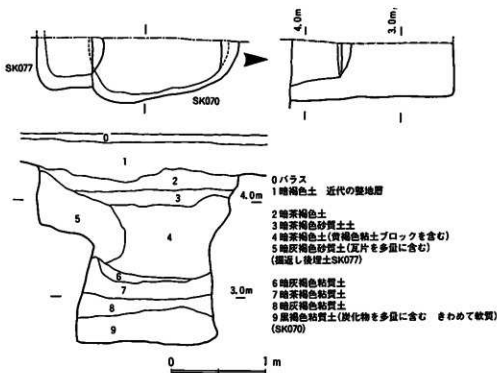
る。SK042に切られている18世紀前半の土坑SK057からの混入品の可能性はある。22・26・27は染付広東碗で、26は焼継ぎが施されている。27は見込みに3箇所の目跡が認められる。23は18世紀後半の染付碗で、見込みにコンニャク印判の五弁花、高台内に崩れた「渦福」銘を描く。24は17c前半の初期伊万里の鉢で、混入品であろう。25は蛇ノ目凹形高台の染付皿である。28～34は関西系陶器の土瓶（31・33・34）、土瓶の蓋（28・29）、行平（32）である。33・34はイッチン掛けによる文様が施文される。35は瓦質土器の埴炉で、高台部の外側は丹塗りである。36は土師質土器埴炉である。37は肥前産磁器の瓶で、無文のものである。38は外面に褐釉が掛かる陶器瓶で、胴部中央付近に明瞭な稜線を持ち、肩が丸くなる特徴的な形態である。体部内外面にはロクロ目を著しく残しており、底部にも回転ヘラ切りの痕跡を残す。徳島の大谷焼の瓶であろうと思われ²⁹、府内城三の丸遺跡SK 7でも出土しているものである²⁹。39～41は肥前系の陶器插鉢である。42は土人形である。首の部分に穴があり木製あるいは竹製の軸をつけて使用する玩具で、いわゆる「一文人形」²⁹である。43は猿面形の泥面子で、表面に糸を通す程度の穴がけられている。



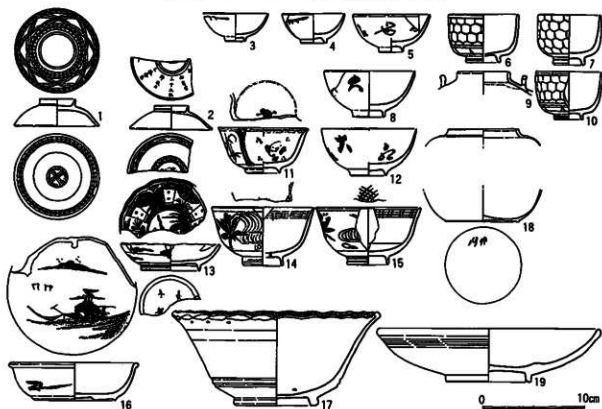
第142図 SK042出土遺物実測図3 (1/4)

SK070・SK077 (第143図)

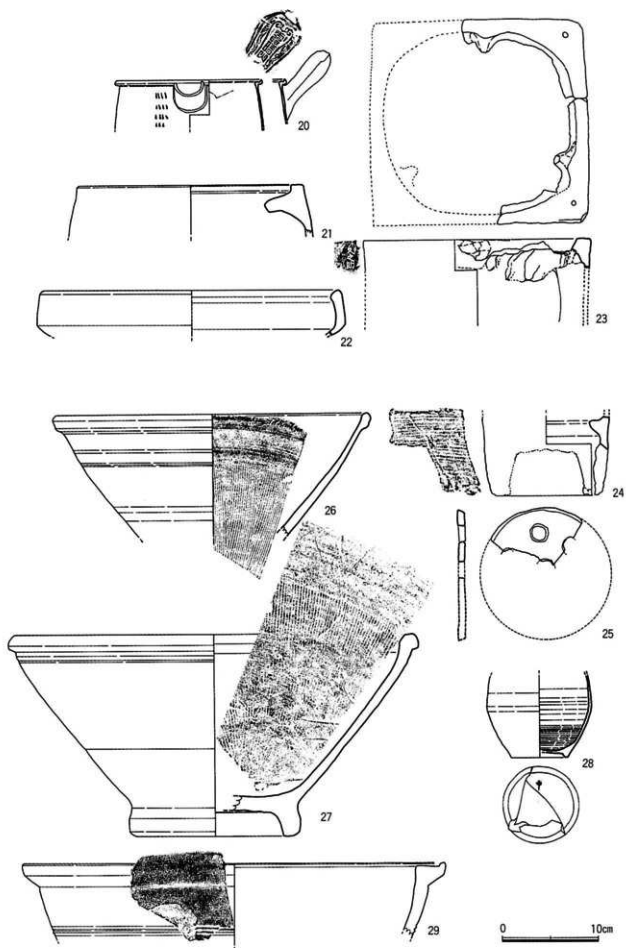
SK070・077はE-1区西壁沿いで検出された方形の廃棄土坑で、長軸2.1m、短軸0.7m、深さ1.7mをはかる。わずかに平面位置を異にして掘り返され、瓦や礫を多く含む土が再び投棄されており(第143図4・5層)、これをSK077としている。いずれも19世紀前半～中頃の所産であろう。



第143図 SK070・SK077平面・土層断面図(1/40)



第144図 SK070出土物実測図1(1/4)



第145図 SK070 出土遺物実測図2 (1/4)

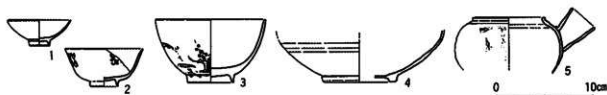
SK070出土遺物（第144図・第145図）

1・2は燗反碗の蓋である。3・4は染付紅猪1。5・8・12は外面に「大坂新町お笹缸」と呉須で書かれた碗で、「笹缸」の紅猪1である。6・7・10は18世紀末～19世紀前半に比定される染付筒丸碗、11は瀬戸・美濃製の碗である。9は関西系陶器の土瓶、18は無軸の陶器急須で清水焼であろう。底部に墨書があるが、判読できない。13は芙蓉手の文様を描く染付皿で、高台内に「大明年製」銘がある。14・15は同一種と思われる、染付燗反碗である。16は蛇ノ目凹形高台の皿で、口縁部は玉縁状になる。17世紀末以降の製品であろう。17は産地不明の陶器鉢である。口縁部は成形後曲げて波状とし、外面を工具により削り、面取りしている。高台部以外には透明釉が掛かるが、口縁端部の銅緑釉を掛ける。見込みには4箇所の目跡が残る。関西系陶器か。19は萩焼の陶器皿で、高台部以外に薬灰釉が掛かる。見込には5箇所の目跡がある。

20は関西系陶器の行平である。21は瓦質土器提灯、22は土師質の焙烙である。23は瓦質土器二重提灯で中央の筒状部分が24である。25はこれとセットになる土師質のサナである。26・27は福岡産陶器描鉢でいずれも19世紀前半～中頃の所産である。28は関西系陶器の瓶で、高台内に「中」の墨書が認められる。29は瓦質土器火鉢である。その他、焼継文字を有する磁器が2点出土している。（第135図）。

SK077出土遺物（第146図）

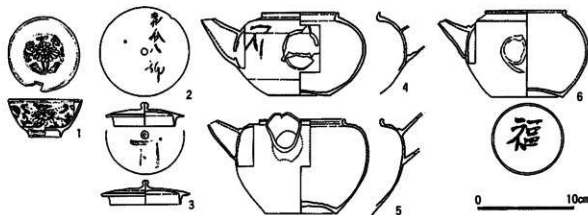
1は薄手酒杯である。図示できなかったが、内面には上絵付けにより文様と文字が描かれ、「濱口 出店 11月」と読める。2は瀬戸・美濃産の磁器碗である。3は染付碗で18世紀前半の製品。4は関西系陶器で鉢と思われる。5は焼締陶器で、体部外面に「ト」の墨書がある。



第146図 SK077出土遺物実測図（1/4）

【参考】表土層出土遺物・表探遺物

1は表土剥ぎ時に出土したもので、菊唐草文を描く清代の青花碗である。17世紀後半代の製品である。2～6は遺構検出時に出土したものである。4は土師質の急須で、側面に「入」の墨書がある。2・3・5・6は焼締陶器の急須及びその蓋であり、清水焼ではないと思われる。2は上面に「嘉谷八彌」、3は「下」の墨書が、6は底部に「福」の墨書がある。5は同一種と思われる資料がSK070からも出土している（第144図）



第147図 表土・表探遺物実測図（1/4）

④近代以降の遺構（第148図）

今回の発掘調査では、明治以降と判断される遺構については、発掘調査の対象としていない。このため攪乱として取り扱ったものが多く、詳細な実測図の作成は原則として行っていない。

SK003

1-1区で検出された廃棄土坑である。出土遺物に明治10年代以降に比定される型紙摺による染付が含まれているものである。

SK005

1-2区で検出された廃棄土坑である。出土遺物に明治4年以降に比定される型紙摺による染付が含まれているものである。

SK026

J-2区で検出された廃棄土坑である。銅板転写技法により施文された染付が出土しており、明治30年代以降のものと判断される。17世紀の遺構であるSK092を切っており、17世紀代に比定される遺物が多数出土した。

SK118

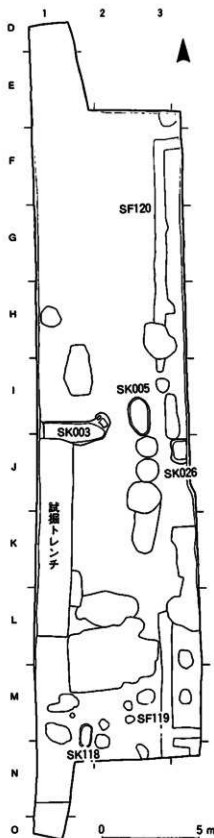
土塁跡に掘り込まれた土坑であり、出土遺物から明治30年代以降のものと判断される。18世紀前半の製品とみられる染付大皿が廃棄されていた。（第149図）これは口径35.6cmを測るもので、内面に意状の文様が描かれていることから、色絵の素地と考えられるものである。

SF119

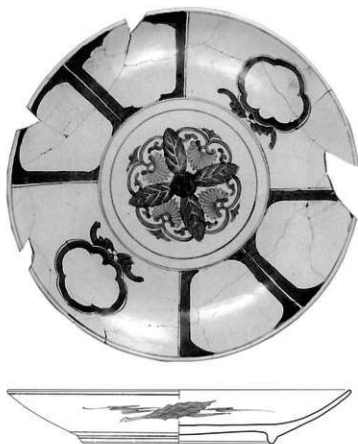
溝内に直方体状に加工した凝灰岩を敷いたもので、建物の基礎と考えられる。出土遺物が皆無であったが、遺構は土塁が所在した位置にちょうどおさまるように築造されていることから、明治中期に土塁が削平されてから後に作られたものと考えられる。現存する周辺の住宅の中にも、その敷地がちょうど土塁比定地の範囲内におさまるものが認められる。

SF120

断面方形の溝に砂・円礫を敷き詰め、さらに三和土状の土を充填して築造した建物基礎と考えられる遺構である。下層の砂礫中から出土した遺物に明治時代の型紙摺による染付が含まれており、明治4年以降に築造されたものとみられる。



第148図 近代以降の遺構・攪乱配置図 (1/200)



第149図 SK118出土遺物実測図(1/4)

註

- (1) 大橋康二氏による5期区分による。大橋康二「九州陶磁概論」『九州陶磁の編年』九州陶磁学会2000
- (2) 高島豊「中世大友城下町跡第3次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報vol.9 1997年度』大分市教育委員会1998 なお、この調査の本報告書は、2003年3月に刊行予定である。
- (3) 森本朝子氏のご教示による。
- (4) 1号井戸出土資料がこれにあたる。『鶴崎御茶屋跡』大分県教育委員会2002
- (5) 『府内城三ノ九遺跡』大分県教育委員会1993 17世紀前半～後半に比定される土坑SK32から出土している。報告者の吉田寛氏は「非ロクロ(手捏ね)成形品」としたもので、17世紀～18世紀中頃に於いて西日本地域で盛行するものである。
- (6) 府内城三ノ九北口路二重櫓SB1周辺で同じ文様の瓦が出土している。『府内城三ノ九北口路』大分県教育委員会1996
- (7) 佐藤竜馬「瀬戸内沿岸地域からみた讃岐の焙烙」『四国と周辺の土器-焙烙の生産と流通』徳島城下町研究会2001
なお、佐藤氏は大原系・御蔵系に、岡本系(讃岐)、東広島系(安芸)、佐野系(周防)を加えて「瀬戸内系焙烙」として把握することを提唱した。本資料については、第3回四国徳島城下町研究会において吉田寛氏を通じて佐藤氏に実見していただき、ご教示いただいた。
- (8) 小林克「オランダからきたクレイパイプ」『甕る江戸』江戸遺跡研究会編1991
小林克「クレイパイプ」『図説江戸考古学研究事典』江戸遺跡研究会編2001柏書房
- (9) 岩崎均史「出島和蘭商館跡出土のクレイパイプについて」『国指定史跡 出島和蘭商館跡』長崎市教育委員会2000

岩崎均史氏は出島和蘭商館跡から出土したクレイパイプにみられるヒールマークの分類を行っており、126種が確認された。このうち本資料と同じと思われる「海馬（王冠付）」は2個確認されており、18c初（1701～1735年）ないし18c中（1734～1775年）に位置づけられている。ただし、この文献中に写真等が掲載されていなかったのと、その他の掲載文献の検索が未だ不十分なため、本資料が同様のものかどうかの確認は今のところできていない。

- 009 「柴田コレクション展」（Ⅱ）佐賀県立九州陶磁文化館 1991 に掲載された、714染付陽刻簡文鶴形小皿（1680～1710年代）もしくは 716染付陽刻簡文鶴形小皿（1690～1720年代）に極めて類似している。

- 010 道路都立学校道路調査会「本郷元町区」1999

33号遺構出土遺物がこれにあたる。吉田寛氏よりご教示いただいた。

- 012 大橋康二氏よりご教示いただいた。なお、同様の人形については、大英博物館所蔵品があるとのことである。

- 013 吉田寛「V 付箋と考察」前掲誌5文獻所収。

- 014 前掲誌13

- 015 「柴田コレクション」（Ⅳ）佐賀県立九州陶磁文化館 1995 に掲載された、284染付烏文捻輪花大皿（1760～1780年代）がこれにあたる。

- 016 柴田コレクションに類似品が見られる。前掲誌10文獻中の 420染付鳳凰唐草菊花文皿がこれにあたり、内面の文様は異なるが、体部外面の文様や台部の文様は共通する。製作年代は、1670～1690年代とされる。

- 017 2000年7月の第2回徳島城下町研究会において、源内焼や砥平焼を実見し、また本資料も持参して参加者に見ていただいたが確定できなかった。

『四国・淡路の陶磁器—生産と流通—（発表要旨）』徳島大学総合科学部歴史学研究室・考古フォーラムくらもと 2000

- 018 堀内秀樹「江戸道跡出土の清制陶磁」『貿易陶磁研究』19 1999

堀内秀樹「輸入された中国陶磁」『図説江戸考古学研究事典』江戸道跡研究会編2001柏竹房

- 019 2000年7月の第2回徳島城下町研究会において、徳島県内の資料を実見でき、さらに日下正剛氏よりご教示いただいた。前掲誌17文獻。

- 020 地名、寺院名の現地比定においては以下の文献を参考にした。

a 「江戸時代後期の村々と主要交通路」『大分市史 中巻』付図Ⅲ大分市史編纂委員会1987

b 「府内城下の復原図」『大分市史 中巻』付図Ⅳ大分市史編纂委員会1987

c 竹内理三編『角川日本地名大辞典 44 大分県』1980角川書店

d 中野輔能監修『日本歴史地名体系 45 大分県の地名』1995平凡社

- 021 吉田寛氏のご教示による。また、以下の参考文献もご教示いただいた。

愛知県陶磁資料館「煎茶とやきもの」2000

大橋康二「明末・清代における中国福建省徳化窯系磁器について」『研究紀要』第2号 大阪市文化財協会1999

- 022 吉田寛氏の指摘を受け、大橋康二氏に確認していただいた。なお、光西寺は、近世以降真宗大谷派に属していた。

大橋康二「柴田コレクションパートⅢ展—禁裏御用の古伊万里発見—」『小さな帯』No412 創樹社美術出版2002

- 023 「柴田コレクション展」（Ⅱ）佐賀県立九州陶磁文化館 1991 に掲載された、382染付濃緑烏籠文皿（1670～1690年代）に図柄が類似しているが、本資料では濃緑が描かれておらず、烏籠が傾いて鳥が飛び立っているような表現になっているものとみられる。

- 024 前掲誌19と同じ。

- 025 前掲誌5文獻。

- 026 由原八幡宮の祭礼市である「浜の市」の名物で、若せ替え遊びに使われたらしい。現在も大分市の民芸品である。

豊田寛三「第二章 大給府内藩の成り立ちと城下町府内」『大分市史 中巻』大分市史編纂委員会1987

第3章 まとめ

中世の遺構と遺物

戦国時代の2条の溝SD201・SD203については何らかの区画溝と考えられるものの、具体的な機能については明らかにできなかった。「府内古図」に基づく復元によれば、付近には「白杵悪六屋敷」が比定されるが(第2図)、これとの関連については不明である。いずれにしても中世府内町と域外との境界付近に当たっており、「さかい寺」と判読できる墨書土器が出土していることもそうした位置と関連があるかもしれない。

溝の主軸方向はN-6°-Eであり、これは府内町において15世紀後半に出現し、16世紀前半以降に盛行すると考えられる基本地割の方向N-4°-E⁽¹⁾にやや近いものの、一致しない。これよりも古いと考えられる基本地割N-10°-E⁽²⁾とは明らかに異なる。また、近世府内城の基本地割はほぼ真北方向であることから、これも異なっており、いずれの基本地割とも一致しなかった。

出土遺物については、掘り返しを伴う溝出土資料であるため遺物の一括性に問題があり、16世紀後半～末に位置づけられる遺物も多く含まれている。しかし、墨書を有するもの(第11図1～3)をはじめとする塩地編年1期⁽³⁾に位置づけられる京都系土師器や、京都系土師器導入期に近いと考えられる一層古相なもの(第11図15、第19図9・11)が存在する。ロクロ成形の土師器には、京都系土師器と類似した胎土を有するものが多くみられるほか、在地的な赤色系の胎土を有するものについても口縁部がやや外反気味となり、強いヨコナデを施すものが多数見られる。これらのロクロ成形土師器は、その胎土や調整あるいは器形の一部といった部分的な属性において京都系土師器のそれと通じる部分があり、模倣もしくは何らかの技術的交流があることを示唆するものと考えられる。従って、これらのロクロ成形土師器については京都系土師器出現以降に位置づけられる可能性が高いものと考えられる。

以上のことから、SD201・SD203に伴う資料のうち最も古い一群は京都系土師器出現期ないし京都系土師器塩地編年1期に併行する時期の資料である可能性が高いと思われる。従って、京都系土師器が豊後府内に導入された時期を16世紀第2四半期であるとする⁽⁴⁾、それとほぼ同じ時期、もしくはやや新しい時期に溝が掘削された可能性が高いと考えられる。

SD201・SD203以前に遡る遺構としては時期不明の溝SD202があるが、それ以外に遺構は全く検出されていない。従って、中世府内町の北端付近にあたる調査地周辺においては、SD201・SD203が掘削される16世紀第2四半期頃になってようやく調査地付近まで開発が及んだ、換言すれば府内町が拡張されたと言ったことができるのでは無からうか。

近世1期の遺構と遺物

府内域外曲輪土塁については、すでに平成9年度に行われた試掘調査の際に、明治以降の著しい削平にもかかわらず基底部が残存していることが確認されていたが、今回の調査で、調査区の南端部分において南北幅約14mにわたって面的に検出することができた。「慶長十年府内絵図」によれば、府内域外曲輪土塁は「敷八間 高二間 並松高六間半」の規模とされる⁽⁵⁾。これをメートル法に換算すると土塁の基底幅はおよそ16mとなり、外堀側である南側が削平されている可能性を考慮すれば、絵図の記録とほぼ矛盾無いものと考えられる。土塁は府内城築城時の整地層上に積み上げられており、これは府内城建設の際、城下町の整地後に土塁を築造したことを明確に示している⁽⁶⁾。

近世1期の遺構は、近世2期以降の遺構に切られているためもあって少数しか残されていない。この中でSX038は17世紀前半の石組み遺構であるが、その主軸方向が現存する府内域下町地割方向とやや異なるN-10°-Eであり、また、先述した戦国時代の溝状遺構、SD201・SD203とも異なっている。

近世2期の遺構と遺物

近世2期（17世紀末～18世紀末）になると4基の井戸をはじめ、火災処理土坑と考えられるものを含む大型の廃棄土坑が多数つくられている。

当該期は、府内城域下町の歴史のなかでも地震や火災が相次いだ時代であり、調査地の所在する米屋町においても寛保の大火をはじめ被害を被った可能性のある災害がいくつか見出される。（第1表）この時期に属する井戸が4基もあること、火災処理土坑SK044やその可能性があるSK018をはじめ、瓦を多量に含む大規模な廃棄土坑が複数見られることなどもこうした歴史的背景を反映している可能性がある。

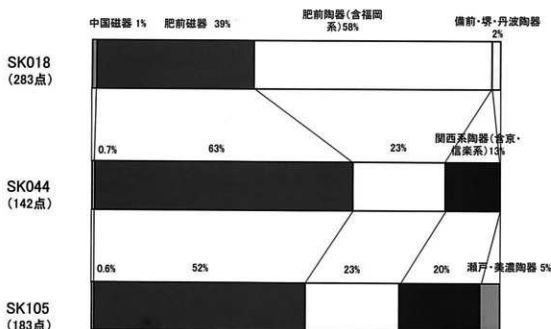
寛保3年の大火については第1章でも触れたように城下の大半を焼き尽くす大災害であり、これによる被災の痕跡が城下町内で広く見出されることが予想される。寛保3年の大火に比定される資料としては、既に府内城三の丸遺跡の報告書において吉田寛氏により検討が加えられ、SK14・SK15出土資料がこれにあたる可能性が高いと指摘されている⁷⁾。

それによればSK14・SK15の資料は①16世紀から17世紀前半代の中国製品の伝世品、②1630～1650年代の肥前陶磁器の伝世品、③1660年代～1680年代の肥前陶磁器を主体とする製品、④1690年代～1740年代の肥前陶磁器を主体とする製品に分類される。このうち④には京焼と考えられる資料が含まれている。

今回検出された近世2期に属する資料のうち、火災処理土坑の可能性のあるSK018・SK044及び火災処理土坑ではないがSK105出土資料を取り上げて比較を試みた。その際、遺物の産地別の陶磁器組成表を作成したが、作成にあたっては口縁部および底部が存在する全資料についてカウントを行った。体部のみの破片は除外している。また、接合して1個に還元された破片については1個としてカウントしている。同一個体の可能性が考えられるものも多くあるが、識別して別にカウントすることは行わなかった。

以上の3遺構についてそれらの出土遺物組成をまとめると以下ようになる。

SK018 肥前陶器の呉器手碗、二彩手の鉢・壺等が多数出土しており肥前陶器は58%を占め、肥前磁器よりも多い。肥前磁器は17世紀後半に製作されたものと17世紀末～1740年代までに位置づけられるものとが存在する。京焼をはじめとする関西系陶器は信楽系壺の胴部破片がわずかに見られるのみである。



第150図 近世2期 各遺構出土陶磁器産地別組成

SK044 肥前磁器は17世紀末～18世紀前半ないし18世紀中葉に位置づけられるものがほとんどで、全体の過半数を占める。肥前陶器の碗・皿は少数である。信楽焼、京焼を含む関西系の陶器が一定量を占める。

SK105 肥前磁器は筒形碗、背磁染付碗蓋、染付小広東碗など18世紀中頃～後半に位置づけられるものが含まれ、肥前陶器の碗・皿は少数である。京焼を含む関西系の陶器および瀬戸・美濃産の陶器が出土しており、前者は一定量を占める。

SK018出土資料は府内城三の丸SK14・SK15出土資料①～④とよく類似するが、京焼等の関西系陶器をほとんど含まない点、肥前系陶器が多数を占める点においてより古い要素が強いように思われる。SK044の資料は府内城三の丸SK14・SK15出土資料のうち①～③が全くないが、④と比較するならば、これに近い内容であるといえる。ただ、SK044出土資料の中には1740年代よりも新しく位置づけられる可能性がある資料（第65図36・39～41、第66図43・44・46）が存在することにも注意を払う必要がある。一方SK105資料は背磁染付碗蓋や染付筒形碗、小広東碗を含む点で明らかにSK044よりも新しい要素の強いものといえることができる。

ところで、当該期における調査地周辺が被災した可能性のある火災としては寛保の大火の他にも、宝暦6年(1756年)及び宝暦9年(1759年)の火災がある。特に宝暦6年の火災においては米屋町の中で24軒が焼失していることが記録されている。米屋町の中にも調査地がこの被災範囲に該当しているかどうかは不明であるが、この火災により被災している可能性はあるといえる。この他、明和8年(1771年)の大火によっても被災している可能性があるが、年代的に新しいため背磁染付碗や染付筒形碗が登場するなど陶磁器の組成が異なっている可能性が高く、SK105のような組成が考えられる。

以上のようなことから、SK044資料は寛保の大火に比定できる可能性があるものの、宝暦6年の火災にも比定できる可能性もあると判断される。SK018については寛保の大火に比定できる可能性もあるが、より古い時期に位置づけられる可能性も捨てきれない。寛保の大火以前に遡る米屋町が被災した可能性がある災害としては、宝永の大地震(1704年)がある¹⁸⁾。しかしこの地震による町屋における被災状況は不明であり、これに比定できるかどうかは明らかでない。

近世2期の遺構からは、SK018出土の柿右衛門様式の色絵生地、SK044出土の青磁鉢、色絵生地の菊皿、クレイパイプ、SK056出土の柿右衛門人形等、上手の陶磁器や稀少品が出土している。クレイパイプについては、長崎市の出島オランダ商館跡¹⁹⁾で多量に出土しており、江戸遺跡でも出土している²⁰⁾。府内城下町においては初の出土例であり、長崎との商取引等で入手した可能性が想定される。

本調査地点がある米屋町は、城下町東南の入り口である堀九井口に最も近い町であり、城外から持ち込まれる物産を買い入れる商家が多く所在した。18世紀中葉、宝暦3年(1753年)の米屋町には「計屋」3軒をはじめ、穀物仲買11軒などが所在した²¹⁾。なお、「計屋」とは、周辺村落で生産された惣後特産の「七島烏」や穀物を扱う府内藩を代表する問屋商人である。

府内城下町は府内藩領のなかでも東に偏していたことから、米屋町など府内城下町の東口(堀九井口)付近の町は、後背地としての府内藩領村落が少ないというハンディがあり、加えて鶴

第1表 府内城下における近世の火災記録(100件以上焼失のもの)

1) 元禄7(1694)11.1	西町より出火、焼失町数10軒、家数232。
2) 宝暦元(1711)3.21	生石村より家出火、焼失188、家数49。
3) 宝暦18(1743)1.14	堀川町松本寺七郎土蔵出火、町数24、家6、8、店13、死人8男6女3、城内番付七兵衛屋敷焼。火元中上町市田屋番三郎納屋、7軒、家数111(本家89、家数2、こぼち家2、家数1、納屋8、馬屋8)。火元下町市長岡宅、焼失、本丸・天守はじり城内大半、町42、家数1,078、外土蔵37、死人3、馬1。
4) 元文元(1738)7.22	火元後小町町、4町108軒。
5) 宝暦3(1743)4.7	火元後小町町、4町108軒。
6) 宝暦6(1756)11.27	火元後小町町、4町108軒。
7) 宝暦9(1759)9.29	火元後小町町、4町108軒。
8) 明和8(1771)8.2	火元後小町町、4町108軒。
9) 安永8(1793)1.29	火元後小町町、4町108軒。
10) 天明4(1794)12.1	火元後小町町、4町108軒。
11) 寛政3(1791)11.2	火元後小町町、4町108軒。
12) 寛政3(1791)12.19	火元後小町町、4町108軒。
13) 康和元(1801)12.15～18	火元後小町町、4町108軒。
14) 文政元(1810)12.15	火元後小町町、4町108軒。
15) 文政元(1810)12.15	火元後小町町、4町108軒。
16) 文政10(1827)11.11	火元後小町町、4町108軒。
17) 天保8(1838)12.23	火元後小町町、4町108軒。

大分市史中巻第37表より作成

崎・乙津など他藩領の在町にも近いことからこれらとの競争も余儀なくされた。このため「計屋」に代表される商家の経営環境は西口（笠和口）に比べ不利であったようで、「計屋」は城内西端の笠和口付近に集中していたようである¹³。しかし、今回の調査で出土した遺物からみると、先述したような上手のものや稀少なものを所有する商家が調査地内に立地していたことを推定することが可能である。今後、文献あるいは絵図による研究により当該期の居住者等が解明されることを期待したい。

近世3期の遺構と遺物

近世3期には、今回の調査で唯一となった建物基礎遺構SF073が検出されている。建物に伴う井戸は今回の調査区内では検出されていない。この時期には多数の廃棄土坑が造られており、焼窯ぎされた陶磁器が多数出土したSK017をはじめSK029、SK033、SK042等は土塁の裾部分を浸食する形で掘り込まれている。明確な火災処理土坑は検出されておらず、文献上調査地付近が被災した火災が知られていない点と一致している。

出土遺物について、特に注目されるものはSK017出土の焼窯ぎを有する陶磁器群であるが、これについては第4章で若干詳述したい。焼窯ぎについては、江戸においては寛政年間から見られるとされるが¹⁴、今回の調査区において焼窯陶磁器が出土している遺構はいずれも端反碗を含む1820年代以降に比定される遺構である。今回の調査を含め、府内城・城下町において端反碗出現以前の遺構から焼窯陶磁器が出土した例は知られておらず、当地においていつ頃から焼窯が開始されたのかは依然として不明である。

ところで、この時期には磁器の生産が肥前以外の各地で行われるようになる。とりわけ瀬戸・美濃では大量生産され、肥前磁器を次第に脅かすようになつたことが指摘されている。府内城城下町においても、府内城三の丸遺跡ではSK33、SK34でまとまって出土しており、全体では碗の2割程度を占めると推定されている。しかし今回の調査において瀬戸・美濃産の磁器はSK017、SK042、SK070・077で出土してはいるがきわめて少数であり、出土した磁器碗の数%以下と考えられる。従って、府内城三の丸における瀬戸・美濃産磁器のあり方が、府内城城下町全般の傾向であるかどうかは今後比較対照資料の増加を待つ必要があると考えられる。府内城三の丸遺跡SK33、SK34は、府内藩家老木村家の屋敷地内であり、参勤により江戸を往復していた上級武士であったことを考慮すると、やや特異なあり方であるかもしれない。

おわりに

今回の調査は、町屋の短冊形地割のうち、当時の道路に近い部分以外をトレンチ状に発掘調査したものであるといえる。先にもふれたように調査区の南部には府内城外曲輪土塁がそびえていたのであり、「数八間高さ二間、並松高六間半」を考慮すると、土塁付近は日当たり・風通し等が悪かったものと考えられる。このように居住地として不適な部分であったため、建物や井戸は調査区の北端部付近でしか検出されず、土塁に近い部分は主としてゴミ穴がつけられる裏庭であったことが推定される。

近世特に18・19世紀については、府内藩記録をはじめとする文献資料や絵図の精査により本調査地が所在する米屋町の具体的な居住者や町の具体的な状況、またその変遷が追える可能性が高いと考えられる。付録で検討した焼窯文字の中にも米屋町内に所在した屋号が複数認められ、その承口が見いだせるように思われる。また、明治期の地籍図からの適度的な検討も可能かもしれない。しかしながら、いずれも今回の報告では報告者の力不足により果たすことができなかった。また、遺構・遺物の報告についても、主要遺構の陶磁器のみ図示するとともに、特に鉄製品を主体とする金属遺物や食物残渣等の自然遺物についてはほとんど提示することができなかった。

以上のようにまことに不十分ではあるが、これをもって府内城・城下町跡第12次調査の正式報告とする。残された多くの課題については今後の府内城城下町における発掘調査・報告及び報告者が行う業務内外の研究活動で補いたいと考えるものである。

註

- (1) 坂本嘉弘「考古学からみた中世大友府内城下町の成立と構造」『中世大友再発見フォーラム 南筑都市・豊後府内都市と交易』大分市教育委員会・中世都市研究会2001
- (2) 前掲註1
- (3) 塩地潤一「大友領国内における京都系土師器の分布とその背景」『法楽達』第6号1998
- (4) 小野貴史「大友氏における式三献について」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会2001
小野氏は、『公儀方々々』の検討により「式三献」の導入を天文五年三月～天文六年三月と推定し、これに伴い京都系土師器の導入時期がこの時期まで遡る可能性があることを指摘している。
- (5) 『慶長十年 府内絵図』大分大学付属図書館蔵 大野康弘「府内城・城下町の曲輪間段差とその意義について」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会2001の記述より
- (6) 本調査地点の試掘を行った大野康弘氏により既に指摘されている。(前掲註5、大野論文。)
- (7) 『府内城三ノ丸遺跡』大分市教育委員会1993
- (8) 『府内藩記録』によれば、府内城の石垣が崩れたり、門矢倉の瓦が落ちるなどの被害がでたらしい。『府内城三ノ丸北口跡』大分県教育委員会1996
- (9) 岩崎均史「出島和蘭商館跡出土のクレイパイプについて」『国指定史跡 出島和蘭商館跡』長崎市教育委員会2000
この文献で報告された1999年の調査時だけで、ボウル部分(キセルで火皿に相当する)で400点以上、ステム(柄)で、1000点以上が出土している。
- (10) 『真砂遺跡』真砂遺跡調査会1987など
- (11) 『府内藩記録』『大分県の地名』日本歴史地名大系45 平凡社1995(p566)より
- (12) 豊田寛三「大給府内藩の成り立ちと城下町府内」『大分市史』中巻 大分市史編纂委員会1987
- (13) 森本伊知郎「焼維ぎに関する一考察」『江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会第三回大会資料編 江戸遺跡研究会1990

第4章 付篇

付篇1 府内城域下町跡第12次調査で出土した焼継文字資料について

1 はじめに

第2章で紹介したように、今回の発掘調査では焼継ぎが施された陶磁器が多数出土している。これらのうちの大部分は19世紀の廃棄土坑SK017に大量に廃棄されていた陶磁器類に含まれていたものであった。焼継ぎされた陶磁器の中には底部・高台内等に朱書あるいは墨書により文字や数字、あるいは記号等が書かれているものが多数認められるが、こうした焼継ぎを有する陶磁器に書かれた文字等について、ここでは「焼継文字」と呼称して記述を進める。基本的認識として、焼継文字は焼継ぎを行った業者が、修理を行った後確実に持ち主へ戻すことを目的として記したものであるとの説¹⁾に従うこととする。

今回の発掘調査の結果、SK017からは85点、その他の遺構から出土したものを含めると調査区全体で109点の焼継文字資料が出土した。これは、一遺構、一調査地点での出土量としては府内城域下町の調査で例を見ないものであり、管見の限りでは全国的にも例が無いようである。そこで、ここではこれらの資料について今少し検討を加えてみたい。

2 組成に占める焼継資料の比率について

今回の調査では、SK017をはじめとして19世紀前半以降に位置づけられる各遺構において、焼継ぎが施された陶磁器が出土している。これら各遺構における出土点数及びその組成における比率はどうであろうか。SK017以外の遺構については、18世紀代の遺構と切り合っていて、資料の一括性に問題があったり、遺物点数が少ないなど、比較資料として必ずしも適当ではないが、SK007、SK042、SK070・077について調べた²⁾。(第2表)

SK017では1044点中244点(23.4%)の陶磁器に焼継ぎが認められる。同時期の遺構についてみるとSK007では595点中12点(2.0%)、SK042では336点中7点(2.1%)、SK070・077ではやや多く152点中10点(6.6%)であった。比較の結果、SK017では焼継ぎを有する陶磁器の出土点数・出土比率ともに突出して多いことがわかる。

3 焼継ぎされた陶磁器について

焼継ぎされた陶磁器のうち圧倒的多数は磁器であり、SK017では244点中の226点を占める。しかし陶器も少数ながら焼継ぎされており、18点存在する。但し、陶器は土瓶と鉢のみで、播鉢や壺・甕類は焼継ぎされていない。

SK017から出土した焼継ぎを有する陶磁器は、染付碗では端反碗が主体を占め広東碗がこれに次ぐ比率となっている。染付皿では、蛇ノ目凹形高台を有するものや志田西山煎茶のものが多くを占めている。また、いわゆる薄手酒壺も多数出土している。SK017については、出土遺物に端反碗が多数含まれ、瀬戸・美濃産染付獅子文皿が出土したSK029に切られていることから、19世紀中頃までに埋め戻されたものと推定される。SK017から出土した焼継ぎを有する陶磁器の組成は、この遺構の埋没年代をそのまま反映しており、19世紀前半以降に生産された製品が主体を占める。しかしながら、18世紀前半以前に生産されたものも少数ながら含まれており、最も古いものは17世紀の後半に生産されたものである。18世紀前半以前に生産された焼継ぎを有する資料は4点を数え、これらは少なくとも100〜150年以上伝世され、破損して焼継ぎが施された後、廃棄されたと判断される。

第2表 焼継ぎを有する陶磁器の占有率

SK017	点数	うち焼継あり	割合(%)
陶器	188	18	9.6%
磁器	856	226	26.4%
合計	1044	244	23.4%

SK007	点数	うち焼継あり	割合(%)
陶器	270	1	0.4%
磁器	325	11	3.4%
合計	595	12	2.0%

SK042	点数	うち焼継あり	割合(%)
陶器	180	0	—
磁器	176	7	4.0%
合計	336	7	2.1%

SK070・SK077	点数	うち焼継あり	割合(%)
陶器	81	1	1.6%
磁器	91	9	9.9%
合計	152	10	6.6%

第3表 府内城・城下町跡第12次調査出土焼継文字判読・地名比定表

SK017出土資料

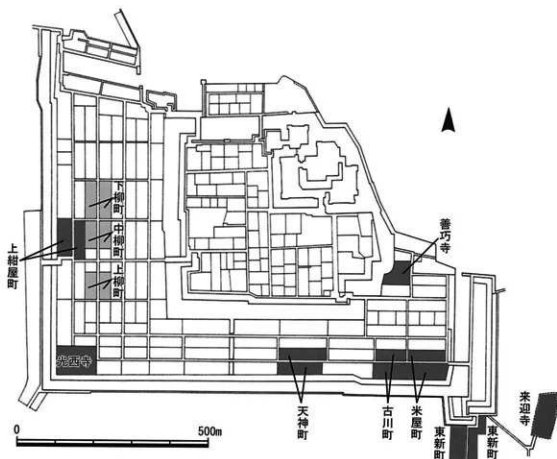
埋蔵番号	番号	焼継文字	地名表記	墓室における比定地
第126回	1	?		
第126回	2	みよや		
第126回	3	門内 是	門内	臼井原 門内村
第126回	4	来(来)寺	来(来)寺	来(来)寺(府内城外)
第126回	5	来 小島	来	府内原 来村
第126回	6	来		
第126回	7	来/ 来のまや	来	来府原 来村
第126回	8	?		
第126回	9	へつき おかや	へつき	臼井原 戸次市村
第126回	10	(来)田氏 来		
第126回	11	口わ		
第126回	12	(来)記号		
第126回	13	(来)寺	(来)寺	府内城 来寺村
第126回	14	来(来) 来	来(来)	府内城 来(来)村
第126回	15	来 来	来	府内原 来村
第126回	16	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第126回	17	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第126回	18	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第126回	19	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第126回	20	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第127回	21	来		
第127回	22	来 来	来	府内原 来村
第127回	23	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第127回	24	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第127回	25	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第127回	26	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第127回	27	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第127回	28	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第127回	29	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第127回	30	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第127回	31	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第127回	32	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第127回	33	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第127回	34	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第127回	35	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第127回	36	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第127回	37	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第127回	38	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第127回	39	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第127回	40	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第127回	41	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第127回	42	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第127回	43	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第127回	44	来(来) 来	来(来)	府内原 来村

埋蔵番号	番号	焼継文字	地名表記	墓室における比定地
第128回	45	伊野 次二	伊野	臼井原 来村
第128回	46	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	47	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	48	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	49	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	50	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	51	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	52	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	53	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	54	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	55	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	56	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	57	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	58	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	59	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	60	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	61	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	62	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	63	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	64	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	65	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	66	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	67	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	68	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	69	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	70	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	71	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	72	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	73	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	74	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	75	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	76	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	77	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	78	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	79	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	80	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	81	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	82	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	83	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	84	伊野 来	伊野	臼井原 来村
第128回	85	伊野 来	伊野	臼井原 来村

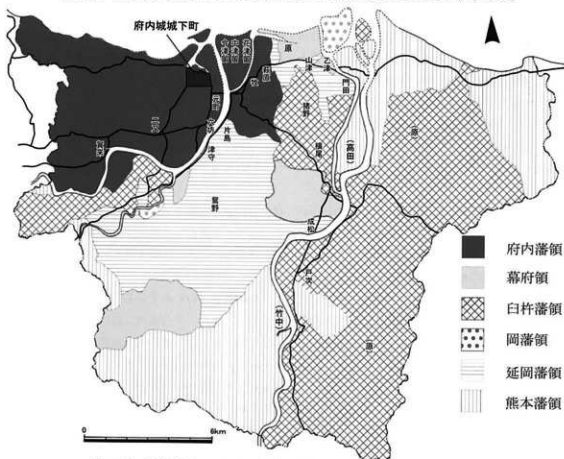
その他の遺構出土資料

埋蔵番号	番号	焼継文字	地名表記	墓室における比定地
第135回	1	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第135回	2	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第135回	3	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第135回	4	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第135回	5	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第135回	6	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第135回	7	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第135回	8	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第135回	9	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第135回	10	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第135回	11	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第135回	12	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第135回	13	来(来) 来	来(来)	府内原 来村

埋蔵番号	番号	焼継文字	地名表記	墓室における比定地
第135回	14	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第135回	15	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第135回	16	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第135回	17	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第135回	18	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第135回	19	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第135回	20	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第135回	21	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第135回	22	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第135回	23	来(来) 来	来(来)	府内原 来村
第135回	24	来(来) 来	来(来)	府内原 来村



第151図 焼継文字にみられる地名の比定地1：府内城内および隣接地（1/10000）



第152図 焼継文字にみられる地名の比定地2：府内城外（1/180000）

4 焼継文字について

ほとんどは朱書きによるもので（109点中103点）、通常は底部（高台内）に書かれている。小型の小坏の中には高台外の体部外面にも朱書きされたものがみられる。（第126図8：ただし判読不能）墨書で有するものはSK017出土品中に6点みられる。このうち第126図17は高台内に朱書きと共に併記されているもので、他は内面に記されている。第130図66については焼継の痕跡が全く無く、厳密にはこれを「焼継文字」の範疇に入れることを躊躇するもので、他の焼継文字資料と同列に扱ってよいかどうかは問題があるかもしれない。

このほか、文字が朱でも墨書でもなく、白っぽく発色しているものが1点みられるが（第127図33）、どのような材料によるものか不明である。

全体のうち文字を一部でも判読できたものは109点中84点である。書かれた文字についての判読結果については遺物説明において記述したとおりであるが、あらためて第3表に示す。これらについてみると、地名とみられるもの、人名と考えられるもの、「ツ」もしくは「ㇿ」といった数量ないし金額を示すとみられる数字、その他記号状のもの、等に判別される。

さて、以下では記述された内容が地名、人名等、上記の推定で正しいとして記述を進めたい。出土した焼継文字資料で内容が判読できた84点のうち、地名が記入されたものは可能性のあるものを含め58点である。人名が記されたものは38点、寺名は4点、屋号は8点、「ㇿ」等の数字や単位が記されたものは25点であった。また、このうち地名・人名（屋号）・数字が併記されたものは9点、地名と人名（屋号）が併記されたものは28点を数える。

5 焼継文字にみられる地名について

焼継文字として記入された地名の現地比定を行ってみると、米屋町をはじめとする府内城域下町の内部に位置する町名だけでなく、府内城外に所在した村落名が多数含まれていた。これらは比定できたもので判断する限り、現在の大分市の範囲内に収まるものであるが、かなり広い範囲におよんでいることが判明した。（第151図・第152図）⁽³⁾このうち、城外の村落については、幕府領を含む府内藩以外の各藩領の村落名が多数認められる。近世の豊後には「七藩八領」といわれるように小藩が分立し、現在の大分市の領域だけを取ってみても府内藩領以外に臼杵藩、延岡藩、熊本藩、岡藩、幕府領が入り交じる複雑な領有関係が存在していたことが知られている。焼継文字に見られる村落名は、まさに府内藩周辺の複雑な領有関係をそのまま反映したものであるといえる。

数量的には府内城域下町内を含む府内藩領が最も多く、各藩領に比定される（もしくは比定される可能性のある）地名を有するもの54点中35点で65%を占めるものの、周辺諸藩領ならびに幕府領に比定されるものも35%を占める。最も遠くのは、臼杵藩領のへつき＝戸次であり、当時の街道をたどった場合、およそ14km程離れた位置にあたる。

これらの分布を見ると、府内城域下町外のものについては、府内城の東あるいは南東側に所在する村落が多いことが読みとれる。その多くは城下東南部の塩九升口につながる主要街道沿いに点在する村落であり、こうした交通路をたどって塩九升口から調査地の所在する米屋町へ持ち込まれたことを示唆するものでは無からうか。

6 府内城域下と周辺における焼継文字資料

府内城域下町跡においては、平成14年度までに15次に及ぶ発掘調査が行われているが、これまでも多くの調査地点において焼継文字を有する陶磁器の出土が報告されている。また、大分市内における府内城・城下町跡以外の遺跡の発掘調査においても焼継文字を有する陶磁器の出土例があり、市域の広い範囲において焼継文字資料が出土していることがわかる。（第4表）⁽⁴⁾これらの資料を見ると、府内城内外の調査地点において知られている焼継文字については記号のみのものやカタカナ1字のみのものも若干認められるが、多くは地名・人名・数字等が記入されており、今回SK017等で出土した資料との共通点を見出すことができる。このことから、府内城域下町および、大分平野に存在する周辺諸藩領においては人名・地名・数字、特に人名・地名を表す焼継文字を伴う焼継ぎが一般的であったといえることができるようである。

第4表 大分市域における焼燬文字資料一覧

No.	遺跡名(調査年)	所在における位置	出土遺構	遺物番号	焼燬遺物	焼燬文字	掲載文献
1	府内城三の丸遺跡	三ノ丸武家屋敷	SK7	9	焼付銅板	記号?	文献1
2	(府内城・城下町跡第1次調査)	(木村家)	SK7	6	焼付銅板	判読不可	
3		/福寿院	SK33	13	焼付銅板	不明	
4			SK33	29	焼付銅板	「木村」	
5			SK33	30	焼付銅板	記号?	
6			SK33	34	焼付銅板	不明	
7			SK33	41	焼付銅	「ケ廿六」	
8			SK33	48	焼付銅	「九郎次様」	
9			SK33	51	焼付銅	「(木村)」	
10			SK33	52	焼付銅	「木村」	
11			SK33	72	焼付銅	「(九郎次様)」	
12			SK33	93	焼付銅	判読不可	
13			SK33	94	焼付銅	判読不可	
14			SK33	107	焼付銅	判読不可	
15			SK33	118	色紙型手酒杯	「力六」	
16			SK34	5	焼付銅板	判読不可	
17			SK34	6	焼付銅板	「木村」	
18			SK34	12	焼付銅板	「木村」	
19			SK34	14	焼付銅板	判読不可	
20			SK34	32	焼付銅	「木村」	
21			SK34	62	焼付銅	「木村」	
22			SK34	64	焼付銅	「木村」	
23			SK41	23	焼付銅	「中村 口口」	
24			SK44	18	焼付銅板	「モロ 木村 九郎次様」	
25	府内城三の丸遺跡	三ノ丸武家屋敷	SK1	1	焼付銅板	「口入 九郎次様」	文献2
26	(府内城・城下町跡第2次調査)	(木戸家)	焼土	1	焼付銅	「口 △(記号)」	
27	府内城三の丸北口跡	三ノ丸北口	中庭 SD1	1	焼付銅板	「名々小路 市工門」	文献4
28	(府内城・城下町跡第3次調査)		通廊石垣SV1層成	1	焼付銅板	「安田氏」	
29			通廊石垣SV1層成	1	焼付銅板	「口口 口口口口」	
30	府内城・城下町跡第5次調査	中庭跡	中庭跡	1	焼付銅板	中ノ町 口口口口	文献3・5
31	府内城・城下町跡第7次調査	寺町/聖明町	朱報告	1	焼付銅板	「寺ノ かじや」	文献5・6
32			朱報告	1	焼付銅	「寺町 仕立屋」	
33	府内城・城下町跡第8次調査	西町/西上市町	朱報告	西 朱公説	「西町 口口」	文献8	
34	府内城・城下町跡第9次調査	府内城外西新町	朱報告	西 朱公説	「西新町」	文献10	
35			朱報告	西 朱公説	「新町」		
36	府内城・城下町跡第10次調査	新町	朱報告	西 朱公説	「西町 油屋 口口」	文献11	
37			朱報告	西 朱公説	「油屋」		
38	府内城・城下町跡第11次調査	三ノ丸武家屋敷 (森下家)	朱報告	広東説	「もりした氏」	文献12	
39			朱報告	焼付銅	「森下氏」		
40		/浄安寺	朱報告	西 朱公説	「名々小路村田」		
41			朱報告	西 朱公説	「木村下」		
42			朱報告	西 朱公説	「森下」		
43	府内城・城下町跡第14次調査	竹町/安和町	S212	焼付銅	「竹町 米屋」	文献13	
44	下郡遺跡群第79次調査	府内藩領下郡村	SX007	青銅焼付大皿	「高岡町中村や口口口口」	文献9	
45			朱報告	焼付八角鉢	「口 口 口 口 九」		
46	下郡遺跡群第71・76次調査	府内藩領下郡村	a295	焼付銅	「常高屋新田印」	文献7	
47		臼杵藩領下郡村	SD002	焼付銅	「里 嘉瑞」	文献14	

文献1 大分県教育委員会1993「府内城三ノ丸遺跡Ⅱ-大分県共同庁会(復原)施設」に伴う焼燬文化財調査報告書-Ⅱ

文献2 大分県教育委員会1994「府内城三ノ丸遺跡Ⅱ-大分県共同庁会(復原)施設」に伴う焼燬文化財調査報告書-Ⅱ

文献3 大分県教育委員会1994「府内城・城下町跡第7次調査(寄付品)」に大分市埋蔵文化財調査年報Ⅴ

文献4 大分県教育委員会1995「府内城三ノ丸北口跡-大分中央警察本部別館庁舎新築工事に伴う焼燬文化財調査報告書-Ⅱ」

文献5 大分県教育委員会1996「文化財より1995年度」

文献6 大分県教育委員会1996「府内城・城下町跡第7次調査」に大分市埋蔵文化財調査年報Ⅴvol.7 1995年度

文献7 大分県教育委員会1996「下郡遺跡群第71・76次調査」に大分市埋蔵文化財調査年報Ⅴvol.7 1995年度

文献8 大分県教育委員会1997「府内城・城下町跡第8次調査」に大分市埋蔵文化財調査年報Ⅴvol.8 1996年度

文献9 大分県教育委員会1997「下郡遺跡群第79次調査」に大分市埋蔵文化財調査年報Ⅴvol.8 1996年度

文献10 大分県教育委員会1998「府内城・城下町跡第9次調査」に大分市埋蔵文化財調査年報Ⅴvol.9 1997年度

文献11 大分県教育委員会1998「府内城・城下町跡第10次調査」に大分市埋蔵文化財調査年報Ⅴvol.9 1997年度

文献12 大分県教育委員会1999「府内城・城下町跡第11次調査」に大分市埋蔵文化財調査年報Ⅴvol.10 1998年度

文献13 大分県教育委員会2001「府内城・城下町跡第14次調査」に大分市埋蔵文化財調査年報Ⅴvol.12 2000年度

文献14 大分県教育委員会2001「臼杵藩領下郡村」に大分市埋蔵文化財調査年報Ⅴvol.12 2000年度

7 府内城下における「焼継ぎ」の営業形態について

江戸における焼継ぎについては、18世紀末の寛政年間ごろから一般に行われるようになったらしいことが「親子草」、「守貞漫稿」等の近世文献から知られる⁵¹⁾。こうした文献史料やそれらの挿し絵等によれば、焼継ぎは道具を携えた職人が町を巡回して注文を取り、出先で焼継ぎを行うといった形で営業していたとするイメージである。しかし、これはあくまで江戸における焼継ぎの営業形態を示すものであり、人口や陶磁器の普及状況が異なる地方においては異なった営業形態が存在したことも予想される。

出土資料についてみると、江戸遺跡の発掘調査では、焼継ぎの施された陶磁器資料はこれまで数多く報告されている⁵²⁾。ところが、朱書き等の焼継ぎ文字を伴うものは意外に少ないらしく、記号や数字が少数記入されたものが主体となっているようである⁵³⁾。同じく大規模な城下町である名古屋城下町においても、焼継ぎされた資料は多く出土しているものの、焼継ぎ文字については記号や数字、簡略なかな(カナ)文字等が主体であり、江戸と大きく異なることがないようである⁵⁴⁾。一方、東海道沿いの宿場町山中新田であった静岡県三島市山中城跡では、地名(山中)に加えて人名や屋号、数字が朱書きされた焼継ぎ資料が多数出土している⁵⁵⁾。この他三島市内では、接待茶屋遺跡⁵⁶⁾や三島代官所跡⁵⁷⁾においても、屋号・地名等の焼継ぎ文字が書かれた資料が出土している。また、神奈川県小田原市小田原城下町においても、屋号とみられる焼継ぎ文字が記入された資料が出土していることが、複数の調査地点で報告されている⁵⁸⁾。このように、焼継ぎ文字に注目した場合、その記述の内容において、江戸や名古屋に代表される大城下町と三島市内の遺跡や小田原城下町のような地方の町場や城下町とは異なったありようが認められるのである。

こうした違いについては、焼継ぎ屋の生業(営業)形態の違いなどにその原因を求める解釈が考えられる。江戸等において、簡略な記号等の焼継ぎ文字が主体であるのは、その営業形態が行商による出張主体のものであり、簡単な記号で用が足りるためであろうと考えられる⁵⁹⁾。移動先でその都度焼継ぎを行ってれば、焼継ぎ文字を記入する必要は無いと思われるが⁶⁰⁾、簡単な記号等が必要となる程度、複数の注文主を区別する必要が生じることもあったのであろう。このような営業形態では、その商圏はかなり狭いものと考えられるが、逆に、それでも生業として成り立つほど焼継ぎの需要が常にあるような大都市に適した営業形態だったのであろう。

一方、地名や人名が豊富に記述された焼継ぎ文字が一般的にみられる地方においては、焼継ぎ屋が依頼主の居住する地名や依頼主の名前を確実に把握しておく必要がある、「同時に多くの製品を取り扱う商売の形態」⁶¹⁾すなわち、「破損陶磁器を一括回収一店で焼き継ぎ一注文主に返還」⁶²⁾、という江戸とは異なる焼継ぎの営業形態が想定される。加えて、地方においては人口が少なく人1密度も低いため、焼継ぎ屋が営業的に成り立つだけの注文量を確保するには広い商圏を必要とし、そのため簡便な行商によるのではなくより組織化された方法によらないてはならない事情もあったのではないと思われる⁶³⁾。

これまでみてきたように、府内城下町および周辺遺跡における焼継ぎ文字のあり方は明らかに三島市内の遺跡や小田原城下町における例に類似する。さらに今回の調査ではSK017という1つの廃棄土坑から、城外村落を含む多数の地名がそれぞれ記入された資料が多量に一括出土しており、これらの地名に該当する地の住人から集められてきたことを強く示唆する事象である。地名や人名を記した焼継ぎ文字は、さまざまな町や村に住む多くの注文主から集められた注文品を間違いなく区別するために書かれていたと推定され、これは府内城下町においても三島市内の遺跡等と類似した焼継ぎの営業形態が成立していたことに起因する可能性が高いと考えられる。

以上のようなことから、SK017が所在する今回の調査地付近では、幕末期に、城外の村落を含め広く焼継ぎの注文品を集める焼継ぎ屋あるいはその取次ぎを行う商売が営まれていた可能性を考えておきたい。そしてその商圏は、焼継ぎ文字の比定地の分布からみて、府内城下町内及び城下東南の塩九升口につながる街道沿いにある村落にまで広く及んでいたと推定される。また、府内城南西側の村落名がほとんどみられず、府内城下町に次ぐ規模の町場であった熊本藩領鶴崎と同藩領の村落名がみられないことからすると、こうした地域を商圏とする別の業者が同時に存在したことも浮かび上がってくるのではないだろうか。

8 おわりに

今回の調査で出土した焼継を有する陶磁器資料により、府内城下町では江戸等の大城下町とは異なる形で焼継が営業されていたことが示唆された。焼継に供される破損した陶磁器は、府内城下町周辺に存在する諸藩領の境界を越えて府内城内に搬入されていたことが明らかであり、幕末における地域経済的なつながりの一端も示すものと考えられる。これまで、焼継文字が記入された資料については、それが出土した屋敷地等が文献資料や絵図にみられる居住者等と一致することを考古学的に証明する傍証資料として用いられることはあったが、今回の出土資料により、これ以外にも多くの情報を秘めていることが一部明らかにできた。しかしながら、筆者の力不足により、こうした焼継文字資料のもつ潜在的な情報を十分引き出すには到底至っていない状況である。そもそも、今回の報告で最も重要な焼継文字の判読については、報告書の上梓時に至っても依然心もとない部分がいくつも残っており、修正すべき点が含まれている可能性が高いことを断らざるを得ない。こうした修正作業も含め、いずれ別稿において再論したいと考えている。

註

- (1) 浅野弘子「尾張出土の焼継ぎ資料-名古屋城下を中心として-」『名古屋博物館研究紀要』第22巻 名古屋博物館1999
- (2) 陶磁器のカウント方法
陶磁器をカウントするに当たって、接合した破片については1点と数え、これ以外のものについては、同一個体の疑いがあるものについても別々に1点としてカウントしている。本報告書に掲載した遺物についてはそれぞれ1点としてカウントした。
- (3) 第151図は、「府内城下の復原図」『大分市史 中巻』付図Ⅳ大分市史編集委員会1987を改変したものである。第152図は、「江戸時代後期の村々と主要交通路」『大分市史 中巻』付図Ⅲ大分市史編集委員会1987と勝目忍「京都大分」『大分の歴史 (10)』大分合同新聞社1979に掲載された「大分市の市域の拡大」図 (p18)を参考とし、現在の大字境等も考慮して作成したものである。なお、第152図は、19世紀前半以降における各藩領の領域を表すことを意図したものであるが、各藩領の境界を平野部から山間部に至るまで厳密に現地比定して表したものとはいえ、あくまで概念的な図であることをお断りしておく。
- (4) このほかにも多数出土しているものと思われるが、正式報告書が出されていないものも多いため、公開された文献に何らかの形で記載あるいは掲載されたものを抽出した。
- (5) 森本伊知郎「焼継ぎに関する一考察」『江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会第三回大会資料編 江戸遺跡研究会 1990
- (6) 『白金館址遺跡Ⅰ』調査研究編 白金館址遺跡調査会 1988 ほか
- (7) 前掲註6および註1浅野論文による。
- (8) 前掲註1、浅野1999
- (9) 『山中城跡Ⅲの九第1地点』三島市教育委員会1995
- (10) 『接待茶屋跡跡』三島市教育委員会1996
- (11) 『三島代官所・市ヶ原庭寺開通跡Ⅰ』三島市教育委員会1995
- (12) 『小田原城下 欄干橋町遺跡Ⅲ』小田原市教育委員会1994
『小田原城下 欄干橋町遺跡Ⅴ地点』小田原市教育委員会1999
これらの遺跡では、屋号が記入されているもののほか、カナ1字のみのものも多く見られる。
- (13) 前掲註1論文の中で浅野氏は「おそらく江戸では簡単な記号で用が足りる程度の出職中心の簡便な修理システムが効率的に回転していたのだろう」(p26)とし、さらに、名古屋における焼継ぎ文字がかなり記号化・番号化していることについて、「江戸ほどではないが焼継ぎの需要が相応量存在していたことを示す材料のひとつ」と評価している。
- (14) 前掲註10文献中で注記人氏は「……こうした行商スタイルで商売が行われていた場合、註文に応じて移動先でその都度焼継ぎを行うのなら朱書きを施す必要はほとんど認められない。それにもかかわらず地名や所有者の名前番号等をわざわざ書き込むようになったのは同時に多くの製品を取り扱う商売の形態がとられ、他のものと区別する必要性が生じたからではないだろうか。」と述べている。(p66)
- (15) 前掲註14

06 前掲註10文献中、前掲註14に続く部分。

07 前掲註10文献中で、辻真人氏は、焼窯に「回収システム」がとられている地域について、「陶磁器の普及率の低さ」と「市場の狭さ」をその理由としてあげている (p66)。

小文を作成するにあたり、辻真人氏 (三島市教育委員会) には、焼窯文字についてご教示いただき、基本文献を送って下さる等の便宜を図っていただきました。最後になりましたが、ここに記し、感謝を表します。

付篇2 府内町 (米屋町) 出土脊椎動物遺存体について

大分市歴史資料館館長 木村 幾多郎

SD201で検出された脊椎動物遺存体の種名と遺存部は第5表の通りである。

イノシシ・シカ・ウシ・ウマと種類は少ない。遺存骨は何れも主要四肢骨で胸郭部・頭部は認められない。遺跡地以外の所で解体され、肉付きの四肢骨部分が、食用として運び込まれた事を示している。骨端部が殆ど失われており、明確なカットマークは認められない。イノシシ・シカに骨端分離した個体が存在し、若獣の肉がもたらされている。イノシシに関しては、ブタ(家猪)の可能性も残るが、判別できる部位が存在せず、判定できない。各遺存骨は、纏まって検出されているようで、短期間に廃棄された事を示す。SD201は発掘所見によれば、16C中頃に掘削されたもので、溝が完全に埋められたのは、府内城下町建設にあたっての整地工事によってであるという(慶長7年1602)。脊椎動物遺存骨は溝底の堆積土(3層)中で検出されており、掘削年代に近い事が推定される。この溝が屋敷地を区画するものであれば、屋敷内からの廃棄も推定される。道路に沿ったものであれば、屋敷外からの廃棄もありうる。

短期間に廃棄された状況からすれば、一般家庭消費レベルではない。また、骨に加工痕が認められないし、胸郭部が検出されてもいないので、骨加工業者や皮革業者の居住地でもない。16世紀中頃～後半時期に公然と鳥獸類内の販売がなされていとも考えがたく、やはり自己消費と考えるのが妥当であろう。

第5表 SD201出土獣骨同定表

	肩甲骨 Scapula		上腕骨 Humerus		桡骨 Radius		尺骨 Ulna		中手骨 Metacarpus		大趾骨 Femur		脛骨 Tibia		距骨 Talus		踵骨 Calcaneus		中足骨 Metatarsus		指骨 Phalanx		その他
	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	
イノシシ Sus		近位部	肩骨端欠 遠位部 骨体		近位部欠 遠位部欠						肩骨端欠 骨端分離 遠位部 骨体				○								
個体数		1	2		2						3	2			1								
シカ Cervus	近位部		近位部 遠位部		近位部 骨端分離 遠位部 骨体		近位部 骨体						近位部 骨体 遠位部 骨体										
個体数	1		1		2		1						2										
ウシ Bos			骨体部 (同一個体?)	遠位部 骨体					近位部前部 (骨端欠)		骨端部										骨体部	角(x.)	
個体数			1	1					1	1											1	1	
ウマ Equus			近位部 骨体								肩骨端欠	遠位部欠					骨体		突			M1J	
個体数			1								1	1				1		1				1	



第153図 SD201出土動物骨1 (イノシシ)



第154図 SD201出土動物骨2 (シカ)



第155図 SD201出土動物骨 3 (ウシ)



第156図 SD201出土動物骨 4 (ウマ)

出土遺物観察表

第6表 中世遺構出土遺物観察表 1

遺物番号	調査番号	遺物	種別	産出・寸	位置		出土層	出土状況	色別	材質	形状・寸	数量	備考
					平面	断面							
92001	第11層-1	灰砂系土師器	皿		12.5	2.0	30cm×11cm 底径11cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	底縁に磨痕 焼跡
92002	第11層-2	灰砂系土師器	皿		12.3	5.5	30cm×12cm 底径12cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	底縁に磨痕 焼跡
92003	第11層-3	灰砂系土師器	皿		12.3	2.0	30cm×11cm 底径11cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	底縁に磨痕 焼跡
92004	第11層-4	灰砂系土師器	小皿		10.5		30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	小皿	10cm×7cm	1	
92005	第11層-5	灰砂系土師器	皿		12.0		30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	
92006	第11層-6	灰砂系土師器	皿		12.3		30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	
92007	第11層-7	灰砂系土師器	小皿		9.2	1.8	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	小皿	10cm×7cm	1	
92008	第11層-8	灰砂系土師器	皿		12.3		30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	10% 焼跡付
92009	第11層-9	灰砂系土師器	皿		12.1	2.3	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	10% 焼跡付
92010	第11層-10	灰砂系土師器	小皿		8.4	1.9	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	小皿	10cm×7cm	1	
92011	第11層-11	灰砂系土師器	皿		12.6		30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	10%
92012	第11層-12	灰砂系土師器	皿		11.4		30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	10%
92013	第11層-13	灰砂系土師器	小皿		9.0		30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	小皿	10cm×7cm	1	30% 焼跡付
92014	第11層-14	灰砂系土師器	皿		11.6	2.2	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	20%
92015	第11層-15	灰砂系土師器	皿		10.6		30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	
92016	第11層-16	灰砂系土師器	小皿		8.8	1.0	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	小皿	10cm×7cm	1	100%
92017	第11層-17	灰砂系土師器	皿		11.8	4.7	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	10%
92018	第11層-18	灰砂系土師器	皿		12.3	2.5	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	100%
92019	第11層-19	灰砂系土師器	皿		10.1	2.3	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	20%
92020	第11層-20	灰砂系土師器	皿		12.5		30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	20% 焼跡付
92021	第11層-21	灰砂系土師器	皿		12.6	2.3	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	50%
92022	第11層-22	灰砂系土師器	皿		10.4	2.1	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	20%
92023	第11層-23	灰砂系土師器	皿		12.4	2.6	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	20%
92024	第11層-24	灰砂系土師器	皿		12.8	1.7	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	30% 焼跡付
92025	第11層-25	灰砂系土師器	皿		10.7	2.2	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	10%
92026	第11層-26	灰砂系土師器	皿		12.2		30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	20%
92027	第11層-27	灰砂系土師器	皿		12.4	2.4	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	40%
92028	第11層-28	灰砂系土師器	皿		10.4	4.2	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	二次焼成 40%
92029	第11層-29	灰砂系土師器	皿		12.6	2.5	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	少
92030	第11層-30	灰砂系土師器	皿		12.7	2.3	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	少
92031	第11層-31	灰砂系土師器	皿		11.2	2.1	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	少
92032	第11層-32	灰砂系土師器	皿		12.4	2.6	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	20%
92033	第11層-33	灰砂系土師器	皿		14.4		30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	10%
92034	第11層-34	灰砂系土師器	皿		10.7		30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	30% 焼跡付
92035	第11層-35	灰砂系土師器	皿		12.5	2.3	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	40%
92036	第11層-36	灰砂系土師器	皿		13.8	2.0	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	20%
92037	第11層-37	灰砂系土師器	皿		11.6		30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	30% 焼跡付
92038	第11層-38	灰砂系土師器	皿		12.2		30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	
92039	第11層-39	灰砂系土師器	皿		14.2		30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	20%
92040	第11層-40	灰砂系土師器	皿		10.9		30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	20%
92041	第11層-41	灰砂系土師器	皿		12.4	2.4	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	20%
92042	第11層-42	灰砂系土師器	皿		15.4		30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	30% 焼跡付
92043	第11層-43	灰砂系土師器	皿		10.9	2.4	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	40%
92044	第11層-44	灰砂系土師器	皿		13.0	2.0	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	20%
92045	第11層-45	灰砂系土師器	皿		13.3	1.8	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	30% 焼跡付
92046	第11層-46	灰砂系土師器	皿		12.6	2.4	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	内面に有磨痕 30%
92047	第11層-47	灰砂系土師器	皿		13.0		30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	10% 焼跡付
92048	第11層-48	灰砂系土師器	皿		14.2		30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	10% 焼跡付
92049	第11層-49	灰砂系土師器	皿		12.7	2.2	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	20%
92050	第11層-50	灰砂系土師器	皿		12.9	2.1	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	100%
92051	第11層-51	灰砂系土師器	皿		14.2		30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	10% 焼跡付
92052	第11層-52	灰砂系土師器	皿		13.0		30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	20%
92053	第11層-53	灰砂系土師器	皿		14.0	4.2	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	10%
92054	第11層-54	灰砂系土師器	皿		14.6	2.4	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	10%
92055	第11層-55	灰砂系土師器	皿		13.7		30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	10%
92056	第11層-56	灰砂系土師器	皿		15.1		30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	10% 焼跡付
92057	第11層-57	灰砂系土師器	皿		14.6	4.4	30cm×7cm 底径7cm	30cm×7cm	灰砂系土師器	皿	10cm×7cm	1	40%

法量の単位はcmである。また、※がつくものは、復元される法量を表す。

第7表 中世遺構出土遺物體察表 2

品番	品名	規格	単位	定価/円	原価		利益		品質		色別	重量				備考・土壌改良材等
					材料	加工	材料	加工	重量	長さ		幅	厚さ			
00001	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00002	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥14.5					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			10% 20%	
00003	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥15.1	2.0				30cm×70 (1) 30cm×70 (1)	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00004	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	12.8	2.3				30cm×70 (1) 30cm×70 (1)	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			100%	
00005	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.8					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			30% 20%	
00006	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥15.1	2.3				30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00007	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.5	¥2.3				30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00008	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00009	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.4					30cm×70 (1) 30cm×70 (1)	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20% 20%	
00010	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00011	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00012	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00013	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00014	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00015	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00016	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00017	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00018	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00019	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00020	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00021	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00022	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00023	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00024	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00025	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00026	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00027	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00028	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00029	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00030	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00031	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00032	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00033	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00034	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00035	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00036	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00037	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00038	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00039	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00040	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00041	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00042	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00043	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00044	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00045	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00046	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00047	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00048	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00049	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00050	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00051	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00052	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00053	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00054	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00055	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00056	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00057	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00058	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00059	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00060	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00061	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00062	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00063	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00064	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00065	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00066	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00067	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00068	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00069	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00070	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00071	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00072	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00073	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00074	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00075	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00076	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00077	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00078	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00079	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00080	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00081	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00082	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00083	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00084	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00085	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00086	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00087	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00088	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00089	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00090	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00091	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00092	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00093	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00094	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00095	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70	30cm×70	鉄板系土壌改良材	20			20%	
00096	第120-50	鉄板系土壌改良材	20	¥13.0					30cm×70							

第 8 表 中世遺構出土遺物觀察表 3

品目コード	品名	単位	数量	単価	小計		大計		色別	大計		備考
					数量	単価	数量	単価		数量	単価	
00001	第1402-115 土砂類	坪										
00001	第1402-116 土砂類	坪										
00001	第1402-117 土砂類	坪										
00001	第1402-118 土砂類	坪										
00001	第1402-119 土砂類	坪										
00001	第1402-120 土砂類	坪										
00001	第1402-121 土砂類	坪										
00001	第1402-122 土砂類	坪										
00001	第1402-123 土砂類	坪										
00001	第1402-124 土砂類	坪										
00001	第1402-125 土砂類	坪										
00001	第1402-126 土砂類	坪										
00001	第1402-127 土砂類	坪										
00001	第1402-128 土砂類	坪										
00001	第1402-129 土砂類	坪										
00001	第1402-130 土砂類	坪										
00001	第1402-131 土砂類	坪										
00001	第1402-132 土砂類	坪										
00001	第1402-133 土砂類	坪										
00001	第1402-134 土砂類	坪										
00001	第1402-135 土砂類	坪										
00001	第1402-136 土砂類	坪										
00001	第1402-137 土砂類	坪										
00001	第1402-138 土砂類	坪										
00001	第1402-139 土砂類	坪										
00001	第1402-140 土砂類	坪										
00001	第1402-141 土砂類	坪										
00001	第1402-142 土砂類	坪										
00001	第1402-143 土砂類	坪										
00001	第1402-144 土砂類	坪										
00001	第1402-145 土砂類	坪										
00001	第1402-146 土砂類	坪										
00001	第1402-147 土砂類	坪										
00001	第1402-148 土砂類	坪										
00001	第1402-149 土砂類	坪										
00001	第1402-150 土砂類	坪										
00001	第1402-151 土砂類	坪										
00001	第1402-152 土砂類	坪										
00001	第1402-153 土砂類	坪										
00001	第1402-154 土砂類	坪										
00001	第1402-155 土砂類	坪										
00001	第1402-156 土砂類	坪										
00001	第1402-157 土砂類	坪										
00001	第1402-158 土砂類	坪										
00001	第1402-159 土砂類	坪										
00001	第1402-160 土砂類	坪										
00001	第1402-161 土砂類	坪										
00001	第1402-162 土砂類	坪										
00001	第1402-163 土砂類	坪										
00001	第1402-164 土砂類	坪										
00001	第1402-165 土砂類	坪										
00001	第1402-166 土砂類	坪										
00001	第1402-167 土砂類	坪										
00001	第1402-168 土砂類	坪										
00001	第1402-169 土砂類	坪										
00001	第1402-170 土砂類	坪										
00001	第1402-171 土砂類	坪										
00001	第1402-172 土砂類	坪										
00001	第1402-173 土砂類	坪										
00001	第1402-174 土砂類	坪										
00001	第1402-175 土砂類	坪										
00001	第1402-176 土砂類	坪										
00001	第1402-177 土砂類	坪										
00001	第1402-178 土砂類	坪										
00001	第1402-179 土砂類	坪										
00001	第1402-180 土砂類	坪										
00001	第1402-181 土砂類	坪										
00001	第1402-182 土砂類	坪										
00001	第1402-183 土砂類	坪										
00001	第1402-184 土砂類	坪										
00001	第1402-185 土砂類	坪										
00001	第1402-186 土砂類	坪										
00001	第1402-187 土砂類	坪										
00001	第1402-188 土砂類	坪										
00001	第1402-189 土砂類	坪										
00001	第1402-190 土砂類	坪										
00001	第1402-191 土砂類	坪										
00001	第1402-192 土砂類	坪										
00001	第1402-193 土砂類	坪										
00001	第1402-194 土砂類	坪										
00001	第1402-195 土砂類	坪										
00001	第1402-196 土砂類	坪										
00001	第1402-197 土砂類	坪										
00001	第1402-198 土砂類	坪										
00001	第1402-199 土砂類	坪										
00001	第1402-200 土砂類	坪										

第9卷 中世遺構出土遺物調査報告 4

通称番号	神功番号	用途	建物	所在地	面積			延床			色紙	人		備考・土庫等利用有	
					戸数	延床	面積	戸数	延床	坪数		坪数	坪数		
SD001	第1700-181	住居用	建	神奈川	127.3										
SD001	第1700-182	住居用	建	神奈川	450.0										
SD001	第1700-183	住居用	建	神奈川											
SD001	第1700-184	住居用	建	神奈川	450.2										
SD001	第1700-190	住居用	建	神奈川											
SD001	第1700-196	住居用	建	神奈川	450.4										
SD001	第1700-197	住居用	建	神奈川											
SD001	第1700-198	住居用	建	神奈川	450.6										
SD001	第1700-199	住居用	建	神奈川											
SD001	第1700-200	住居用	建	神奈川	450.8										
SD001	第1700-201	住居用	建	神奈川										外置へう型	
SD001	第1800-202	土庫用	土	神奈川											
SD001	第1800-203	土庫用	土	神奈川											
SD001	第1800-204	住居用	土	神奈川										坪数 4.8 内積 1.6	
SD001	第1800-205	住居用	土	神奈川										坪数49.2 面積積算	
SD001	第1800-206	住居用	土	神奈川										坪数11.3 内積2.8 面積積	
SD001	第1800-207	住居用	土	神奈川											
SD001	第1800-208	住居用	土	神奈川											
SD001	第1800-209	住居用	土	神奈川											
SD001	第1900-1	住居系・土庫用	土	神奈川	10.3	2.1	4.3	30ナナ 住居系	30ナナ	一方ナナ	住居系	住			50%
SD001	第1900-2	住居系・土庫用	土	神奈川	112.6	2.6	46.6	30ナナ	30ナナ	一方ナナ	住居系	住			20%
SD001	第1900-3	住居系・土庫用	土	神奈川				30ナナ	30ナナ	住居系	住				10% 住居系
SD001	第1900-4	住居系・土庫用	土	神奈川	112.7			30ナナ	30ナナ	住居系	住				10% 住居系
SD001	第1900-5	住居系・土庫用	土	神奈川			46.2	30ナナ	30ナナ	一方ナナ	住居系	住			20%
SD001	第1900-6	住居系・土庫用	土	神奈川				30ナナ	30ナナ	住居系	住				10% 住居系
SD001	第1900-7	住居系・土庫用	土	神奈川	113.1	42.6	46.6	30ナナ	30ナナ	一方ナナ	住居系	住	少		20%
SD001	第1900-8	住居系・土庫用	土	神奈川	114.0	3.2	47.6	30ナナ	30ナナ	一方ナナ	住居系	住			20%
SD001	第1900-9	住居系・土庫用	土	神奈川				30ナナ	30ナナ	住居系	住				2% 住居系
SD001	第1900-10	土庫用	土	神奈川	113.7			30ナナ	30ナナ	住居系	住				10% 住居系
SD001	第1900-11	住居系・土庫用	土	神奈川	113.9			30ナナ	30ナナ	住居系	住				10% 住居系
SD001	第1900-12	土庫用	土	神奈川	111.9			30ナナ	30ナナ	住居系	住				20%
SD001	第1900-13	土庫用	土	神奈川	111.6	2.8	46.1	30ナナ	30ナナ	住居系	住				10%
SD001	第1900-14	土庫用	土	神奈川			46.6	30ナナ	30ナナ	住居系	住	少	多		口積算0.1・住居70%
SD001	第1900-15	土庫用	土	神奈川			46.4	30ナナ	30ナナ	住居系	住	多	多		口積算0.1・住居30%
SD001	第1900-16	住居用	建	東京都	115.1										
SD001	第1900-17	住居用	建	中国											
SD001	第1900-18	住居用	建	中国											

第10表 近世遺構出土遺物觀察表 1

連番番号	種番番号	材質	形状	群・注文	口径	長さ	重量	備註	成金 京	製作年代	備考
198001	11021-1	鋼	円盤		7.7	124	7.6		1800年		
198002	11022-2	鋼	円筒		15.8	7.7	2.6		1800年		
198003	11023-3	鋼	円筒		8.3	37	2.3		1800年		
198004	11024-4	鋼	小皿		43.1	44.0	4.1		1800年		
198005	11025-5	鋼	小皿		46.3	44.0	4.3		1800年		
198006	11026-6	鋼	円筒		9	37	1.6		1800年		
198007	11027-7	鋼	巻物		44.7	46.2	4.4		1800年		
198008	11028-8	鋼	円筒		49.1	46.1	4.7		1800年		
198009	11029-9	鋼	円筒		41.0	31	3.1		1800年		
198010	11030-10	鋼	円筒		48	37	3.1		1800年		
198011	11031-11	鋼	円筒		45.3	46	4.3		1800年		
198012	11032-12	鋼	円筒		24.0	37	2.0		1800年		
198013	11033-13	鋼	円筒		45.3	46	4.3		1800年		
198014	11034-14	鋼	円筒		47.7	46.7	4.8		1800年		
198015	11035-15	鋼	円筒		47	37	3.1		1800年		
198016	11036-16	鋼	円筒(厚板)		48.8	2.0			1800年		
198017	11037-17	鋼	円筒(厚板)		47	2.0			1800年		
198018	11038-18	鋼	円筒(厚板)		73	37	3.7		1800年		
198019	11039-19	鋼	円筒(厚板)		73	40	4.0		1800年		
198020	11040-20	鋼	円筒(厚板)		17.4	37	4.3		1800年		
198021	11041-21	鋼	円筒(厚板)		17.6	37.1	4.0		1800年		
198022	11042-22	鋼	円筒(厚板)		7.0	6	1.0		1800年		
198023	11043-23	鋼	円筒(厚板)		24	40	3.3		1800年		
198024	11044-24	鋼	円筒(厚板)		21	40	3.3		1800年		
198025	11045-25	鋼	円筒(厚板)		21	40	3.3		1800年		
198026	11046-26	鋼	円筒(厚板)		49.8	7.1	5.3		1800年		
198027	11047-27	鋼	円筒(厚板)		11.6	40	4.0		1800年		
198028	11048-28	鋼	円筒(厚板)		41.4	46.1	4.3		1800年		
198029	11049-29	鋼	円筒(厚板)		41.8	44	4.0		1800年		
198030	11050-30	鋼	円筒(厚板)		42.8	45.3	4.6		1800年		
198031	11051-31	鋼	円筒		47	37	3.1		1800年		
198032	11052-32	鋼	円筒		41.8	37	3.1		1800年		
198033	11053-33	鋼	円筒		24.0	37	2.0		1800年		
198034	11054-34	鋼	円筒		45.3	46	4.3		1800年		
198035	11055-35	鋼	円筒		45.3	46	4.3		1800年		
198036	11056-36	鋼	円筒		42.8	46.3	4.6		1800年		
198037	11057-37	鋼	円筒		43.1	43.1	4.0		1800年		
198038	11058-38	鋼	円筒		43.4	38	3.9		1800年		
198039	11059-39	鋼	円筒		42.6		4.6		1800年		
198040	11060-40	鋼	円筒		41.8		4.0		1800年		
198041	11061-41	鋼	円筒		41.8	47	4.7		1800年		
198042	11062-42	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198043	11063-43	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198044	11064-44	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198045	11065-45	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198046	11066-46	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198047	11067-47	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198048	11068-48	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198049	11069-49	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198050	11070-50	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198051	11071-51	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198052	11072-52	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198053	11073-53	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198054	11074-54	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198055	11075-55	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198056	11076-56	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198057	11077-57	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198058	11078-58	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198059	11079-59	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198060	11080-60	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198061	11081-61	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198062	11082-62	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198063	11083-63	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198064	11084-64	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198065	11085-65	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198066	11086-66	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198067	11087-67	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198068	11088-68	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198069	11089-69	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198070	11090-70	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198071	11091-71	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198072	11092-72	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198073	11093-73	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198074	11094-74	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198075	11095-75	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198076	11096-76	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198077	11097-77	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198078	11098-78	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198079	11099-79	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198080	11100-80	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198081	11101-81	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198082	11102-82	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198083	11103-83	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198084	11104-84	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198085	11105-85	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198086	11106-86	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198087	11107-87	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198088	11108-88	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198089	11109-89	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198090	11110-90	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198091	11111-91	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198092	11112-92	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198093	11113-93	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198094	11114-94	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198095	11115-95	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198096	11116-96	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198097	11117-97	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198098	11118-98	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198099	11119-99	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		
198100	11120-100	鋼	円筒		47	47	4.7		1800年		

第11表 近世遺構出土遺物観察表 2

遺物番号	発掘番号	材質	形状	単位式	口径	高さ	底径	底面形状	出土層	出土年代	備考
200001	100001-46	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-46	100001-46	銅貨(100円)
200002	100001-47	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-47	100001-47	銅貨(100円)
200003	100001-48	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-48	100001-48	銅貨(100円)
200004	100001-49	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-49	100001-49	銅貨(100円)
200005	100001-50	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-50	100001-50	銅貨(100円)
200006	100001-51	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-51	100001-51	銅貨(100円)
200007	100001-52	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-52	100001-52	銅貨(100円)
200008	100001-53	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-53	100001-53	銅貨(100円)
200009	100001-54	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-54	100001-54	銅貨(100円)
200010	100001-55	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-55	100001-55	銅貨(100円)
200011	100001-56	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-56	100001-56	銅貨(100円)
200012	100001-57	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-57	100001-57	銅貨(100円)
200013	100001-58	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-58	100001-58	銅貨(100円)
200014	100001-59	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-59	100001-59	銅貨(100円)
200015	100001-60	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-60	100001-60	銅貨(100円)
200016	100001-61	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-61	100001-61	銅貨(100円)
200017	100001-62	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-62	100001-62	銅貨(100円)
200018	100001-63	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-63	100001-63	銅貨(100円)
200019	100001-64	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-64	100001-64	銅貨(100円)
200020	100001-65	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-65	100001-65	銅貨(100円)
200021	100001-66	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-66	100001-66	銅貨(100円)
200022	100001-67	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-67	100001-67	銅貨(100円)
200023	100001-68	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-68	100001-68	銅貨(100円)
200024	100001-69	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-69	100001-69	銅貨(100円)
200025	100001-70	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-70	100001-70	銅貨(100円)
200026	100001-71	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-71	100001-71	銅貨(100円)
200027	100001-72	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-72	100001-72	銅貨(100円)
200028	100001-73	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-73	100001-73	銅貨(100円)
200029	100001-74	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-74	100001-74	銅貨(100円)
200030	100001-75	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-75	100001-75	銅貨(100円)
200031	100001-76	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-76	100001-76	銅貨(100円)
200032	100001-77	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-77	100001-77	銅貨(100円)
200033	100001-78	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-78	100001-78	銅貨(100円)
200034	100001-79	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-79	100001-79	銅貨(100円)
200035	100001-80	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-80	100001-80	銅貨(100円)
200036	100001-81	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-81	100001-81	銅貨(100円)
200037	100001-82	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-82	100001-82	銅貨(100円)
200038	100001-83	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-83	100001-83	銅貨(100円)
200039	100001-84	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-84	100001-84	銅貨(100円)
200040	100001-85	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-85	100001-85	銅貨(100円)
200041	100001-86	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-86	100001-86	銅貨(100円)
200042	100001-87	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-87	100001-87	銅貨(100円)
200043	100001-88	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-88	100001-88	銅貨(100円)
200044	100001-89	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-89	100001-89	銅貨(100円)
200045	100001-90	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-90	100001-90	銅貨(100円)
200046	100001-91	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-91	100001-91	銅貨(100円)
200047	100001-92	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-92	100001-92	銅貨(100円)
200048	100001-93	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-93	100001-93	銅貨(100円)
200049	100001-94	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-94	100001-94	銅貨(100円)
200050	100001-95	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-95	100001-95	銅貨(100円)
200051	100001-96	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-96	100001-96	銅貨(100円)
200052	100001-97	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-97	100001-97	銅貨(100円)
200053	100001-98	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-98	100001-98	銅貨(100円)
200054	100001-99	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-99	100001-99	銅貨(100円)
200055	100001-100	銅	銅貨(100円)	銅貨	42	2.5	2.5	円筒形	100001-100	100001-100	銅貨(100円)

第13表 近世遺構出土遺物觀察表 4

[illegible]

第14表 近世通關出土海物觀覽表 5

通称番号	帳簿番号	科目	摘要	借-本文	口振	借振	貸振	借振 貸振	摘要	通称	備考
00001	00001	1000	現金	現金	1000	0	0	0	現金	現金	
00002	00002	1001	現金	現金	1001	0	0	0	現金	現金	
00003	00003	1002	現金	現金	1002	0	0	0	現金	現金	
00004	00004	1003	現金	現金	1003	0	0	0	現金	現金	
00005	00005	1004	現金	現金	1004	0	0	0	現金	現金	
00006	00006	1005	現金	現金	1005	0	0	0	現金	現金	
00007	00007	1006	現金	現金	1006	0	0	0	現金	現金	
00008	00008	1007	現金	現金	1007	0	0	0	現金	現金	
00009	00009	1008	現金	現金	1008	0	0	0	現金	現金	
00010	00010	1009	現金	現金	1009	0	0	0	現金	現金	
00011	00011	1010	現金	現金	1010	0	0	0	現金	現金	
00012	00012	1011	現金	現金	1011	0	0	0	現金	現金	
00013	00013	1012	現金	現金	1012	0	0	0	現金	現金	
00014	00014	1013	現金	現金	1013	0	0	0	現金	現金	
00015	00015	1014	現金	現金	1014	0	0	0	現金	現金	
00016	00016	1015	現金	現金	1015	0	0	0	現金	現金	
00017	00017	1016	現金	現金	1016	0	0	0	現金	現金	
00018	00018	1017	現金	現金	1017	0	0	0	現金	現金	
00019	00019	1018	現金	現金	1018	0	0	0	現金	現金	
00020	00020	1019	現金	現金	1019	0	0	0	現金	現金	
00021	00021	1020	現金	現金	1020	0	0	0	現金	現金	
00022	00022	1021	現金	現金	1021	0	0	0	現金	現金	
00023	00023	1022	現金	現金	1022	0	0	0	現金	現金	
00024	00024	1023	現金	現金	1023	0	0	0	現金	現金	
00025	00025	1024	現金	現金	1024	0	0	0	現金	現金	
00026	00026	1025	現金	現金	1025	0	0	0	現金	現金	
00027	00027	1026	現金	現金	1026	0	0	0	現金	現金	
00028	00028	1027	現金	現金	1027	0	0	0	現金	現金	
00029	00029	1028	現金	現金	1028	0	0	0	現金	現金	
00030	00030	1029	現金	現金	1029	0	0	0	現金	現金	
00031	00031	1030	現金	現金	1030	0	0	0	現金	現金	
00032	00032	1031	現金	現金	1031	0	0	0	現金	現金	
00033	00033	1032	現金	現金	1032	0	0	0	現金	現金	
00034	00034	1033	現金	現金	1033	0	0	0	現金	現金	
00035	00035	1034	現金	現金	1034	0	0	0	現金	現金	
00036	00036	1035	現金	現金	1035	0	0	0	現金	現金	
00037	00037	1036	現金	現金	1036	0	0	0	現金	現金	
00038	00038	1037	現金	現金	1037	0	0	0	現金	現金	
00039	00039	1038	現金	現金	1038	0	0	0	現金	現金	
00040	00040	1039	現金	現金	1039	0	0	0	現金	現金	
00041	00041	1040	現金	現金	1040	0	0	0	現金	現金	
00042	00042	1041	現金	現金	1041	0	0	0	現金	現金	
00043	00043	1042	現金	現金	1042	0	0	0	現金	現金	
00044	00044	1043	現金	現金	1043	0	0	0	現金	現金	
00045	00045	1044	現金	現金	1044	0	0	0	現金	現金	
00046	00046	1045	現金	現金	1045	0	0	0	現金	現金	
00047	00047	1046	現金	現金	1046	0	0	0	現金	現金	
00048	00048	1047	現金	現金	1047	0	0	0	現金	現金	
00049	00049	1048	現金	現金	1048	0	0	0	現金	現金	
00050	00050	1049	現金	現金	1049	0	0	0	現金	現金	
00051	00051	1050	現金	現金	1050	0	0	0	現金	現金	
00052	00052	1051	現金	現金	1051	0	0	0	現金	現金	
00053	00053	1052	現金	現金	1052	0	0	0	現金	現金	
00054	00054	1053	現金	現金	1053	0	0	0	現金	現金	
00055	00055	1054	現金	現金	1054	0	0	0	現金	現金	
00056	00056	1055	現金	現金	1055	0	0	0	現金	現金	
00057	00057	1056	現金	現金	1056	0	0	0	現金	現金	
00058	00058	1057	現金	現金	1057	0	0	0	現金	現金	
00059	00059	1058	現金	現金	1058	0	0	0	現金	現金	
00060	00060	1059	現金	現金	1059	0	0	0	現金	現金	
00061	00061	1060	現金	現金	1060	0	0	0	現金	現金	
00062	00062	1061	現金	現金	1061	0	0	0	現金	現金	
00063	00063	1062	現金	現金	1062	0	0	0	現金	現金	
00064	00064	1063	現金	現金	1063	0	0	0	現金	現金	
00065	00065	1064	現金	現金	1064	0	0	0	現金	現金	
00066	00066	1065	現金	現金	1065	0	0	0	現金	現金	
00067	00067	1066	現金	現金	1066	0	0	0	現金	現金	
00068	00068	1067	現金	現金	1067	0	0	0	現金	現金	
00069	00069	1068	現金	現金	1068	0	0	0	現金	現金	
00070	00070	1069	現金	現金	1069	0	0	0	現金	現金	
00071	00071	1070	現金	現金	1070	0	0	0	現金	現金	
00072	00072	1071	現金	現金	1071	0	0	0	現金	現金	
00073	00073	1072	現金	現金	1072	0	0	0	現金	現金	
00074	00074	1073	現金	現金	1073	0	0	0	現金	現金	
00075	00075	1074	現金	現金	1074	0	0	0	現金	現金	
00076	00076	1075	現金	現金	1075	0	0	0	現金	現金	
00077	00077	1076	現金	現金	1076	0	0	0	現金	現金	
00078	00078	1077	現金	現金	1077	0	0	0	現金	現金	
00079	00079	1078	現金	現金	1078	0	0	0	現金	現金	
00080	00080	1079	現金	現金	1079	0	0	0	現金	現金	
00081	00081	1080	現金	現金	1080	0	0	0	現金	現金	
00082	00082	1081	現金	現金	1081	0	0	0	現金	現金	
00083	00083	1082	現金	現金	1082	0	0	0	現金	現金	
00084	00084	1083	現金	現金	1083	0	0	0	現金	現金	
00085	00085	1084	現金	現金	1084	0	0	0	現金	現金	
00086	00086	1085	現金	現金	1085	0	0	0	現金	現金	
00087	00087	1086	現金	現金	1086	0	0	0	現金	現金	
00088	00088	1087	現金	現金	1087	0	0	0	現金	現金	
00089	00089	1088	現金	現金	1088	0	0	0	現金	現金	
00090	00090	1089	現金	現金	1089	0	0	0	現金	現金	
00091	00091	1090	現金	現金	1090	0	0	0	現金	現金	
00092	00092	1091	現金	現金	1091	0	0	0	現金	現金	
00093	00093	1092	現金	現金	1092	0	0	0	現金	現金	
00094	00094	1093	現金	現金	1093	0	0	0	現金	現金	
00095	00095	1094	現金	現金	1094	0	0	0	現金	現金	
00096	00096	1095	現金	現金	1095	0	0	0	現金	現金	
00097	00097	1096	現金	現金	1096	0	0	0	現金	現金	
00098	00098	1097	現金	現金	1097	0	0	0	現金	現金	
00099	00099	1098	現金	現金	1098	0	0	0	現金	現金	
00100	00100	1099	現金	現金	1099	0	0	0	現金	現金	
00101	00101	1100	現金	現金	1100	0	0	0	現金	現金	
00102	00102	1101	現金	現金	1101	0	0	0	現金	現金	
00103	00103	1102	現金	現金	1102	0	0	0	現金	現金	
00104	00104	1103	現金	現金	1103	0	0	0	現金	現金	
00105	00105	1104	現金	現金	1104	0	0	0	現金	現金	
00106	00106	1105	現金	現金	1105	0	0	0	現金	現金	
00107	00107	1106	現金	現金	1106	0	0	0	現金	現金	
00108	00108	1107	現金	現金	1107	0	0	0	現金	現金	
00109	00109	1108	現金	現金	1108	0	0	0	現金	現金	
00110	00110	1109	現金	現金	1109	0	0	0	現金	現金	
00111	00111	1110	現金	現金	1110	0	0	0	現金	現金	
00112	00112	1111	現金	現金	1111	0	0	0	現金	現金	
00113	00113	1112	現金	現金	1112	0	0	0	現金	現金	
00114	00114	1113	現金	現金	1113	0	0	0	現金	現金	
00115	00115	1114	現金	現金	1114	0	0	0	現金	現金	
00116	00116	1115	現金	現金	1115	0	0	0	現金	現金	
00117	00117	1116	現金	現金	1116	0	0	0	現金	現金	
00118	00118	1117	現金	現金	1117	0	0	0	現金	現金	
00119	00119	1118	現金	現金	1118	0	0	0	現金	現金	
00120	00120	1119	現金	現金	1119	0	0	0	現金	現金	
00121	00121	1120	現金	現金	1120	0	0	0	現金	現金	
00122	00122	1121	現金	現金	1121	0	0	0	現金	現金	
00123	00123	1122	現金	現金	1122	0	0	0	現金	現金	
00124	00124	1123	現金	現金	1123	0	0	0	現金	現金	
00125	00125	1124	現金	現金	1124	0	0	0	現金	現金	
00126	00126	1125	現金	現金	1125	0	0	0	現金	現金	
00127	00127	1126	現金	現金	1126	0	0	0	現金	現金	
00128	00128	1127	現金	現金	1127	0	0	0	現金	現金	
00129	00129	1128	現金	現金	1128	0	0	0	現金	現金	
00130	00130	1129	現金	現金	1129	0	0	0	現金	現金	
00131	00131	1130	現金	現金	1130	0	0	0	現金	現金	
00132	00132	1131	現金	現金	1131	0	0	0	現金	現金	
00133	00133	1132	現金	現金	1132	0	0	0	現金	現金	
00134	00134	1133	現金	現金	1133	0	0	0	現金	現金	
00135	00135	1134	現金	現金	1134	0	0	0	現金	現金	
00136	00136	1135	現金	現金	1135	0	0	0	現金	現金	
00137	00137	1136	現金	現金	1136	0	0	0	現金	現金	
00138	00138	1137	現金	現金	1137	0	0	0	現金	現金	
00139	00139	1138	現金	現金	1138	0	0	0	現金	現金	
00140	00140	1139	現金	現金	1139	0					

[illegible]

第16表 近世遺構出土遺物觀察表 7

通知序号	设备型号	材料	备注	单位	数量	单价	金额	品牌/产地	备注	备注
30001	80001-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30002	80002-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30003	80003-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30004	80004-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30005	80005-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30006	80006-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30007	80007-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30008	80008-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30009	80009-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30010	80010-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30011	80011-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30012	80012-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30013	80013-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30014	80014-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30015	80015-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30016	80016-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30017	80017-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30018	80018-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30019	80019-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30020	80020-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30021	80021-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30022	80022-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30023	80023-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30024	80024-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30025	80025-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30026	80026-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30027	80027-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30028	80028-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30029	80029-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30030	80030-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30031	80031-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30032	80032-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30033	80033-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30034	80034-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30035	80035-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30036	80036-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30037	80037-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30038	80038-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30039	80039-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30040	80040-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30041	80041-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30042	80042-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30043	80043-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30044	80044-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30045	80045-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30046	80046-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30047	80047-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30048	80048-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30049	80049-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30050	80050-1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

第17表 近世遺構出土遺物觀察表 8

[illegible]

第19表 近世遺構出土遺物觀察表 10

[illegible]

第20表 近世遺構出土土物観察表 11

発掘番号	検出番号	材質	形状	図・本文	口径	高さ	底径	底面形状	備考	制作年代	備考
第120表	120-1	磁器	小杯	色絵	5.9	2.8	3.0	肥前	19c前半～中頃	?	
第120表	120-2	磁器	小杯	色絵	4.1	2.8	2.8	肥前	19c前半～中頃	みとや	
第120表	120-3	磁器	小杯	色絵	4.1	2.8	2.8	肥前	19c前半～中頃	戸田 は	
第120表	120-4	磁器	小杯	色絵	4.1	2.8	2.8	肥前	19c前半～中頃	永(画)寺	
第120表	120-5	磁器	小杯	色絵	4.1	2.8	2.8	肥前	19c前半～中頃	宮 小長衛	
第120表	120-6	磁器	小杯	色絵	4.1	2.8	2.8	肥前	19c前半～中頃	宮 小長衛	
第120表	120-7	磁器	小杯	色絵	5.4	4.2	2.7	肥前	19c前半～中頃	宮/天のまや	
第120表	120-8	磁器	小杯	色絵	4.1	2.8	2.8	肥前	19c前半～中頃	?	
第120表	120-9	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	へつき おかや	
第120表	120-10	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	(原)長 気力	
第120表	120-11	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	口わ	
第120表	120-12	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	記号:二本の線	
第120表	120-13	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	(原)寺	
第120表	120-14	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	宮前町 岩なつ	
第120表	120-15	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	山崎 新市	
第120表	120-16	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	(原)寺	
第120表	120-17	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	なりぬ 池具衛 二ツ	
第120表	120-18	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	ツ	
第120表	120-19	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	記号:二本の線	
第120表	120-20	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	宮前町 岩なつ	
第120表	120-21	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	山崎 新市	
第120表	120-22	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	(原)寺	
第120表	120-23	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	宮前町 岩なつ	
第120表	120-24	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	山崎 新市	
第120表	120-25	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	(原)寺	
第120表	120-26	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	宮前町 岩なつ	
第120表	120-27	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	山崎 新市	

第21表 SK017から出土した焼継文字を有する陶磁器観察表 1

発掘番号	検出番号	材質	形状	口径	高さ	底径	底面形状	制作年代	焼継文字	備考
第120表-1	120-1	磁器	小杯	色絵	5.9	2.8	3.0	肥前	19c前半～中頃	?
第120表-2	120-2	磁器	小杯	色絵	4.1	2.8	2.8	肥前	19c前半～中頃	みとや
第120表-3	120-3	磁器	小杯	色絵	4.1	2.8	2.8	肥前	19c前半～中頃	戸田 は
第120表-4	120-4	磁器	小杯	色絵	4.1	2.8	2.8	肥前	19c前半～中頃	永(画)寺
第120表-5	120-5	磁器	小杯	色絵	4.1	2.8	2.8	肥前	19c前半～中頃	宮 小長衛
第120表-6	120-6	磁器	小杯	色絵	4.1	2.8	2.8	肥前	19c前半～中頃	宮 小長衛
第120表-7	120-7	磁器	小杯	色絵	5.4	4.2	2.7	肥前	19c前半～中頃	宮/天のまや
第120表-8	120-8	磁器	小杯	色絵	4.1	2.8	2.8	肥前	19c前半～中頃	?
第120表-9	120-9	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	へつき おかや
第120表-10	120-10	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	(原)長 気力
第120表-11	120-11	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	口わ
第120表-12	120-12	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	記号:二本の線
第120表-13	120-13	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	(原)寺
第120表-14	120-14	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	宮前町 岩なつ
第120表-15	120-15	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	山崎 新市
第120表-16	120-16	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	(原)寺
第120表-17	120-17	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	なりぬ 池具衛 二ツ
第120表-18	120-18	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	ツ
第120表-19	120-19	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	記号:二本の線
第120表-20	120-20	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	宮前町 岩なつ
第120表-21	120-21	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	山崎 新市
第120表-22	120-22	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	(原)寺
第120表-23	120-23	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	宮前町 岩なつ
第120表-24	120-24	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	山崎 新市
第120表-25	120-25	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	(原)寺
第120表-26	120-26	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	宮前町 岩なつ
第120表-27	120-27	磁器	小杯	金襴目	7.8	3.0	2.8	肥前	19c前半～中頃	山崎 新市

第22表 SK017から出土した焼継文字を有する陶磁器観察表 2

得意番号	材質	器形	胎	口径	高さ	底径	産地/重	制作年代	焼継文字	備考
第127回-28	磁器	碗(無足碗)	施付	10.5			肥前	18c前半～中頃	よこふ	
第127回-29	磁器	碗(無足碗)	施付	*10.4	*5.7	*4.6	肥前	18c前半～中頃	源作右衛門 入	
第127回-30	磁器	碗(無足碗)	施付	11.1	6.2	4.9	肥前	18c前半～中頃	先町 口南門	
第127回-31	磁器	碗(無足碗)	施付	10.1	5.7	4.2	肥前	18c前半～中頃	口松丸	
第127回-32	磁器	碗(無足碗)	施付	*10.9	*5.4	*4.3	肥前	18c前半～中頃	子口口 龍作	
第127回-33	磁器	碗(無足碗)	施付	12.8	7.0	5.4	肥前	18c前半～中頃	今津番 升次	
第127回-34	磁器	鉢	施付	*11.2	5.3	*4.7	肥前	18c前半～中頃	口口口 九	
第127回-35	磁器	碗(無足碗)	施付	*10.0	*5.8	*4.0	肥前	18c前半～中頃	はきわら 餅口	
第127回-36	磁器	鉢	施付	11.8	6.4	4.4	肥前	18c後半～末	口口八	
第127回-37	磁器	鉢	施付			*4.8	肥前	18c前半～中頃	「町」とら直て	
第127回-38	磁器	鉢	施付				肥前	18c前半～中頃	?	
第128回-39	磁器	碗(広底碗)	施付	11.3	6.3	5.5	肥前	18c末～19c前半	はきわら「」	
第128回-40	磁器	碗(広底碗)	施付	*11.7	7.4	*6.1	肥前	18c末～19c前半	セツ	
第128回-41	磁器	碗(広底碗)	施付	11.4	6.9	6.1	肥前	18c末～19c前半	はき口口	
第128回-42	磁器	碗(広底碗)	施付	11.2	6.8	6.2	肥前	18c末～19c前半	是しの増次	
第128回-43	磁器	碗(広底碗)	施付	*11.4	*7.1	*5.9	肥前	18c末～19c前半	丁内 魚屋	
第128回-44	磁器	碗(広底碗)	施付	11.2	6.1	6.6	肥前	18c末～19c前半	堀久丸	
第128回-45	磁器	碗(広底碗)	施付	11.2	6.4	5.5	肥前	18c末～19c前半	みきX丸(口)の	
第128回-46	磁器	碗(広底碗)	施付				肥前	18c末～19c前半	〇	
第128回-47	磁器	鉢	施付	13.1	7.8	7.4	肥前	18c末～19c前半	浮野 第二	
第128回-48	磁器	鉢	施付	15.4	7.8	7.3	肥前	18c前半～中頃	片崎 御右衛門	
第128回-49	磁器	鉢	施付	13.3	8.0	5.2	肥前	18c前半～中頃	口口(雪丸)	
第128回-50	磁器	鉢	施付	*14.9	*7.3	*5.2	肥前	18c後半	今太五	
第128回-51	磁器	鉢	施付	*14.7	7.0	*5.0	肥前	18c後半	米屋町 亮右衛門	
第128回-52	磁器	鉢	施付				肥前	18c前半～中頃	寸ヶ小路 澤吉	
第128回-53	磁器	鉢	施付	11.0	6.1	4.3	肥前	18c中頃～後半	に印	
第128回-54	磁器	鉢	施付	12.3	7.3	5.4	肥前	18c前半～中頃	天神(町) 口	
第128回-55	磁器	鉢	施付	12.8	7.7	6.6	肥前	18c前半	はきわら とら屋	
第128回-56	磁器	花形鉢	背置施付	15.2	8.9	6.7	肥前	18c後半	成茂	
第128回-57	磁器	鉢	施付	12.1	6.0	6.0	肥前	18c前半～中頃	「か」仁義	
第128回-58	磁器	鉢	施付	15.0	7.3	6.3	肥前	18c前半～中頃	ふたまた 三友	
第128回-59	磁器	鉢	施付			*6.8	肥前	18c前半～中頃	つゞり 口口	
第128回-60	磁器	鉢(異物)	施付	8.9			肥前	18c前半	いの口	
第128回-61	磁器	鉢	施付	9.8	3.9		肥前	18c前半～中頃	はたの口	
第128回-62	磁器	鉢	施付	*8.8	*2.9	*3.8	肥前	18c前半～中頃	鎌倉 御右衛門	
第128回-63	磁器	鉢	施付	15.2	6.0	10.2	肥前	18c末～19c前半	入	
第128回-64	磁器	鉢	施付	15.1	6.8	8.4	肥前	18c前半～中頃	悦	
第128回-65	磁器	鉢	施付				肥前	18c末～19c前半	はきわら 幸作	
第128回-66	磁器	鉢	施付	15.2	6.0	10.2	肥前	18c末～19c前半	二口	
第128回-67	磁器	鉢	施付	15.1	6.8	8.4	肥前	18c前半～中頃	高田 若丸	
第128回-68	磁器	鉢	施付	6.9	5.4	3.5	肥前	18c前半～中頃	竹長 正栄寺	
第128回-69	磁器	鉢	施付				肥前	18c末～19c前半	口口口	
第128回-70	磁器	鉢	施付	*11.0			肥前	18c前半	「(六)昌新 イ	
第128回-71	磁器	鉢	施付	15.1	3.8	8.3	肥前	18c前半	「(初)利」ウ	
第128回-72	磁器	鉢	施付	14.1	3.8	8.5	肥前	18c前半	?	
第128回-73	磁器	鉢	施付	14.0	3.8	8.5	肥前	18c前半～19c前半	門田南百九ツ	
第128回-74	磁器	鉢	施付	14.0	3.8	8.3	肥前	18c前半～19c前半	門田 南百 九	
第128回-75	磁器	鉢	施付	20.0	2.7	10.2	肥前	18c前半	はた口等	
第128回-76	磁器	鉢	施付	20.0	3.0	12.5	肥前	18c前半	志田西山	
第128回-77	磁器	鉢	施付	*8.2	*2.0	*5.4	肥前	18c前半	後五郎「」	
第128回-78	磁器	鉢	施付	29.0	4.1	16.0	肥前	18c前半	?	
第128回-79	磁器	鉢	施付	29.0	4.1	16.0	肥前	18c前半	志田西山	
第128回-80	磁器	鉢	施付	29.4	4.5	16.6	肥前	18c前半	みゆや	
第128回-81	磁器	鉢	施付	*38.8	4.4	*48.5	肥前	18c前半	乙 ちゃや	
第128回-82	磁器	鉢	施付	30.1	3.4	17.2	肥前	18c前半	伊兵衛ツ	
第128回-83	磁器	鉢	施付				肥前	18c前半	「」や	
第128回-84	磁器	鉢	施付				肥前	18c前半	等	
第128回-85	磁器	鉢	施付				肥前	18c前半～中頃	?	
第128回-86	磁器	鉢	施付				肥前	18c後半	口(古X)開門	
第128回-87	磁器	鉢	施付				肥前	18c後半	「(初)守口口	
第128回-88	磁器	鉢	施付				肥前	18c後半	徳町 小地	
第128回-89	磁器	鉢	施付				肥前	18c後半	はきわら「」	
第128回-90	磁器	鉢	施付				肥前	18c後半	夕	
第128回-91	磁器	鉢	施付				肥前	18c後半	徳町「」八右衛門	
第128回-92	磁器	鉢	施付				肥前	18c後半	?	

第23表 SK017以外の遺構から出土した焼継文字を有する陶磁器観察表

発掘番号	調査番号	出所	図形	軸	口径	胴径	底径	産地/窯	製作年代	焼継文字	備考
第1350-1	K1区	陶器	蓋(土器)	胴縁軸	8.8	3.3		越前系	19c前半	米や丁 藤右衛門	
第1350-2	灰層	陶器	蓋(灰)	底付	8.8	2.9		肥前	19c前半~中頃	イ	
第1350-3	SK007	陶器	碗	底付	≒4.1			肥前	19c前半~中頃	イ	
第1350-4	SK006	陶器	碗	底付	≒9.5			肥前		米や 蓋	
第1350-5	SK020	陶器	皿	底付				肥前		イ	
第1350-6	灰層	陶器	碗	底付			≒3.3	肥前		「六郎左衛門」	
第1350-7	灰層	陶器	小杯	底付			3.3	肥前	19c前半~中頃	丁 三十三	
第1350-8	SK007	陶器	碗	底付			≒4.0	肥前	19c前半~中頃	?	
第1350-9	SK008	陶器	碗	底付			3.8	肥前		仲かき「」	
第1350-10	SK020	陶器	碗	底付			4.4	肥前		米や口 「」や	
第1350-11	SK019	陶器	碗	底付			4.1	肥前	19c前半~中頃	ほ ん	
第1350-12	SK029	陶器	碗	底付			2.7	肥前	19c前半~中頃	米や丁	
第1350-13	SK042	陶器	碗	底付			≒4.5	肥前	19c前半~中頃	「」焼か「」	
第1350-14	K1-K2区	陶器	碗	底付			≒5.4	肥前	19c前半~中頃	六ツ 中山	
第1350-15	SK007	陶器	碗	底付	≒8.9	≒4.8	≒3.8	肥前		(丸)ノ	
第1350-16	灰層	陶器	碗	底付			5.2	肥前	19c前半~中頃	乙上 左次	
第1350-17	SK008	陶器	碗	底付	11.2	6.5	5.0	肥前	19c前半~中頃	片島大面や	
第1350-18	SK042	陶器	碗	底付	≒11.5			肥前	19c前半~中頃	五郎左衛門	
									水や町 水や		
第1350-19	SK029	陶器	碗	底付	≒13.8	≒7.1	≒7.0	肥前	19c前半~19c前半	米屋町	
第1350-20	SK017遺構	陶器	碗	底付			≒6.7	肥前	19c前半~19c前半	?	
第1350-21	SK029	陶器	碗口	底付	≒7.3	≒5.1	≒5.2	肥前	19c前半~19c前半	高カ 島口 五	桜ノ目凹線窯倉
第1350-22	SK070	陶器	鉢	底付	≒16.4	7.3	7.9	肥前	19c前半~中頃	上野屋新 今夏や	桜ノ目凹線窯倉
第1350-23	SK029	陶器	碗	底付	12.8	6.7	5.5	肥前	19c前半~中頃	「」 茂右衛門	
第1350-24	SK070	陶器	鉢	底付		≒4.0	≒7.2	肥前	19c前半~中頃	一舟	桜ノ目凹線窯倉



1 調査区遠景空中写真（南東から）



2 調査区全景空中写真（上が西）



3 近世遺構完掘状況（南から）



4 SD201完掘状況(南端部除く:南から)



5 SD201・203完掘状況(南から)



6 SD201近景(北から)



7 土塁土層(東から)

写真図版 2



8 SX038石組み (南から)



9 SK061遺物出土状況 (北から)



10 SK092遺物出土状況 (南から)



11 SK018完掘状況 (北から)



12 SK022礫出土状況 (東から)



13 SK044土層断面 (東から)



14 SE064井筒痕跡検出状況 (東から)



15 SK105完掘状況 (東から)



16 SX083石組み・甕検出状況（東から）



17 SF073石組み検出状況（東から）



18 SK017完掘状況（北から）



19 SK017陶磁器廃棄状況（北から）



20 SK017陶磁器廃棄状況近景



21 SK017下底 遺物出土状況

写真図版 4



22 SD201出土墨書土器 1 「光盛」

23 SD201出土墨書土器 2 「さい良」



24 SD201出土墨書土器 3 「さかい寺」

25 SD201出土墨書土器 4 「右」



26 SD201出土推定中国産焼締陶器 甕鉢



27 SK017出土禁裏御用品肥前磁器皿（焼継ぎ有り）

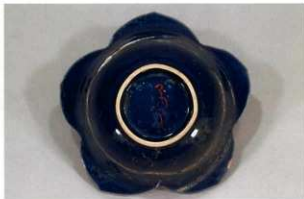


28 SK017出土禁裏御用品肥前磁器皿裏面（焼継ぎ文字：「光さ□寺」）

写真図版 6



29 SK017出土肥前磁器花形鉢 (焼継文字:「つもり 口し」)



30 SK017出土伝世され焼き継ぎされた肥前磁器皿



31 SK017出土中国宜興窯産急須・徳化窯産碗



32 SK017出土萩焼製品



33 SK017出土福岡産陶器鉢・碗



34 SK017出土三田青磁鉢



35 SK017・SK042出土大谷焼



36 整地層出土志野向付 1



37 整地層出土志野向付 2



38 SX038出土肥前陶器片口



39 SX038出土ベトナム産長胴瓶



40 SK092出土ガラス製品

写真図版 8



41 SK056出土柿右衛門人形（若衆人形）



42 SK044出土クレイパイプとヒールマーク（右）



43 SK057・SK052出土色絵磁器人形



44 SK044出土白磁皿



45 SK044出土京焼（京・信楽系陶器）



46 SK105出土京焼（京・信楽系陶器）



47 SK105出土瀬戸・美濃産陶器碗



48 近世遺構出土中国産磁器皿

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふないじょうじょうかまちあと							
書 名	府内城・城下町跡							
副 題 名	第12次調査報告書 旧米屋町における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査							
巻 次								
シ リ ー ズ 名								
シ リ ー ズ 番 号								
編 著 者 名	高島 豊 井口あけみ							
編 集 機 関	大分市教育委員会							
所 在 地	大分市荷揚町2番31号							
発 行 年 月 日	西暦2003年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °		m ²	
ふないじょうじょうかまちあと	おおい・たしおおてまち	44201	322041	33 31 7	131 16 43	990702～ 990915	298	共同住宅 建 設
府内城・城下町跡	大分市大千町1丁目							
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特 記 事 項		
府内城・城下町跡	近世城下町	中世	溝状遺構	京都系土師器 青花		墨書を有する土師器が4点出土		
		近世	土塁跡 井戸跡 建物基礎 石組遺構 土坑	肥前陶磁 色絵磁器人形 クレイパイプ		焼継文字を有する陶磁器が多量 に出土		

府内城・城下町跡

第12次調査報告書

旧米屋町における共同住宅建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査

平成15年3月31日発行

発 行 大 分 市 教 育 委 員 会
大 分 市 荷 揚 町 2 番 13 号

印 刷 い づ み 印 刷 株 式 会 社
大 分 市 下 郡 宇 丁 畑 3119 番 地 1

